

---

# 魔法少女リリカルなのは ～転生者はH A P P Y ENDを至高とする～

夜神

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは　　転生者はHAPPY　ENDを至高とする　　

### 【Nコード】

N0282P

### 【作者名】

夜神

### 【あらすじ】

ある日、青年は神を名乗る幼女にうっかりミスで殺されてしまった。幼女曰く、青年を気に入ったから、好きな世界に特典付きで転生させてくれるという。

「なら、『リリカルなのは』の世界だね」青年は自身をチート化して新たな人生を歩み始める。果たして青年は自身の望むハッピーエンドに辿り着けるのか！？

『魔法少女リリカルなのは』転生者はHAPPY ENDを至高とする』はじまります！！ 11/27 無印編完結！1/31 A・S編の本編完結！ 6月16日現在、「今後について」を投稿。

## プロローグ（前書き）

初執筆、初投稿につき、かなりの素人っぷりを発揮すると思います  
が、生温かい目で見守ってやってください（笑）

本作品は原作崩壊、キャラ崩壊、主人公最強などありとあらゆる概念を破壊しながら作者が自由気ままに理想の物語を紡いでいく内容となります。

原作至上主義な方、俺 T E E E E ! ! といった無茶な展開に嫌悪感を抱く方は、至急ブラウザの戻るを選択し自身を保護してください。

内容としては無印からStrikersまでを予定しております。  
余裕があればオリジナルを展開するかもしれません。

更新は基本遅い（たまに速い）です。それでも良いという方は、是非読んでいってください。

感想も受け付けています。ただし内容が作者及び作品への過激な批判・非難であった場合、精神面がへタレな作者は凹むので、それは止めてください。orz

## プロローグ

「アレ？ここ、何処？」

白い空間に一人の青年が佇んでいた。

「おお、やっと目が覚めたか。」

「ん？誰？」

「此方か？此方は神じゃ！！  
偉いんじゃないぞ、敬うがいい！！」

（自称）神と名乗る偉そうな少女がそこにいた。

「ふーん、神様ね…。んで、その神様が何の御用ですか？  
俺、早く帰って観たいアニメがあるんですけど」

「お主、信じとらんな？それに帰るって  
何処に帰るんじゃない？お主、死んでおるのだぞ？」

「はい？（何いつてんの？この少女）」

「じゃから、死んだと言っておるのじゃ。  
耳が聞こえるのか、お主。」

「いや、ちよつとマテ！？死んだ？死んだってどういうこと！？」

・・・ぷい（汗）

「…オイ、カミサマ？何故、目を逸らすの力ナ？」

「そ、逸らしてなどおらぬぞ？ホントだぞ！？

神がすっかり予定にない者を殺してしまったなんて  
あつてはならぬからな！！・・・あ！」

「へえ、じゃあ何？」

俺はお前のすっかりでポツクリ逝かされたって訳…？」

「…あはは、、（汗）」

「ふざけるなああああ！！松田ああああ！！誰を討ってる！？」

「ひゃう！？こ、この状況でネタに走るとは結構余裕あるのお。お主」

「ああ！？」（ギロリ

「ヒッ！？ごめんなさい、ごめんなさい、痛いことしないで！？  
いやゝ犯されるケダモノ！！」（ビクビク

「…はあゝ、で？死んでしまった俺はどうなるの？」

「へ?...怒つとらんのか？」

「なに？殴つてイイの？」（凶悪な笑み

「ごめなさいい！？」（半泣き

「俺だつてこの現状には納得してないさ。

でも、実際死んじゃた以上どうしようもない。

それなら前向きに先について考えた方がまだ展開的に明るいでしょ？  
さらに言えば幼女を殴る趣味は無いよ」

「幼女という単語に苛立ちを覚えるが

お主、見かけによらず前向きじゃの！！

気に入った！！本来ならこのままあの世行きになるんじやが  
別世界に転生させてやろう！！」

「別世界？」

「そうじゃ。別世界というのはお主がいた世界での架空の世界  
小説や漫画、アニメといったものじゃな。

その世界で原作崩壊させようが何しようがお主の自由じゃ」

「な！？マジでアニメの世界にイケるの！？」

「う、うむ。元はと言えば此方のミスで殺してしまったのだしな。  
転生特典として好きな能力を好きなだけ追加してやろう」

「俺の人生、最大のチャンスが此処にきて到来したよ！！  
やべえ、ワクワクしてきたZE」

「まずは世界の選択じゃな。どこが良い？」

「なら、世界は『リリカルなのは』の世界だね！」

「ほう、何でもまたその世界を？」

他にも面白そうな世界はいくらでもあるだろうに」

「いや、この世界って結構悲しい出来事が多くてね。いつもアニメを観ては展開をハッピーエンドにもっていったらなあって思ってたんだ」

「そうか。お主、優しいのだな・・・」

「別に、優しくはないよ。単なる自己満足だよ。てか、笑うと結構可愛いんだね？」

「ぬな！？／＼／＼おだてても何も出んぞ！！  
で、では、能力の方は決まったかの？」

「うん。でも、その前に一つ確認したいことがあるんだ」

「何じゃ？」

「俺は可能ならこの世界で生き返らせたい子が居るんだ。  
だから死者の蘇生」ならぬ！！」「・・・」

「・・・いきなり大きな声を出してすまんの。

死者の蘇生はどの世界においても、してはならぬ禁忌なのじゃ」



「やっぱり、そうか。なら世界の元々の設定を少し改竄することは可能？」

「改竄とな？」

「うん、死んだのではなく酷く死に近い仮死状態にある為に死んだと誤解されているという設定だよ。

仮死状態にあるものを回復させるのであれば問題はないでしょ？」

「…ふむ、成程のお。確かにそれなら可能じゃ。

お主、頭悪そうに見えて意外と回転が効くのお」

「頭悪いは余計だよ！なら、その件はそという設定で頼むね」

「わかった。じゃが、もとの設定を変えとなると結構な労力でな。

お主に追加出来る能力の数に限りが出来てしまうぞ？」

「かまわないよ。元々あった設定を改竄するんだ。それくらいは受け入れるさ。それでいくつまで可能になるの？」

「10じゃ」

は？

「何だつて？」

「じゃから、10個までなら可能だといっておるのじゃ！」

「マジかよ、それだけありややりたい放題じゃん！！」

この幼女、無い胸を張ってとんでもないこと言い切りやがったよ・・。

「何か、失礼なことと思ってないか？お主。

数をもっと減らしてやつても良いんじゃないぞ？」

「すみませんでしたア！！」（土下座中

「うむ わかれば良いのじゃ」

ちくせう。にしても、10個か。考えて設定しないとな。

考え中

「よし、決まった！」

こんな感じでどうだろうか。

一、転生した際は現在の記憶、知識を保有している。

二、なのはの世界における魔法・技術の全知識

三、基本ステータスはすべてEX

四、他の漫画やアニメ、ゲームに至る、術・技及び固有<sup>デメリットなし</sup>能力使用权

五、四と同じ条件で全てのアイテムを生成・使用できる。（ある意味無限の剣製と同じ能力）

六、自身のステータスを自身で封印・解除・調整できる。

七、魔力変換資質「炎熱」「電気」「凍結」「風」を持っている。  
八、独自の魔法、アイテムを開発・使用する能力  
九、一を知ったらそれを十二全にこなせる能力  
十、自身の望む能力を一つだけ後付けで追加出来る。

「やつと、決まったか・・・って偉くチートな設定にしたのお、お主」

「いいでしょ？新しい人生への餞別とでも思つてよ」

「…はあ、まあいい。次は自身の容姿設定と介入時期じゃな」

「そうだな、容姿は銀髪蒼眼のイケメンで中性的な顔立ち。  
転生時期は無印の原作開始から」

「ふむ、わかった。あとの細かい設定まで聞いてると  
面倒：もとい、お主も大変じゃろうから  
コツチで良いようにやっておく」

もとは自分のミスのせいなのに、コイツ、もう投げやりだよね…

「うん、頼むよ」

「ではな、お主の新たな人生に幸多からんことを願っておるよ」

「ありがとう」（ニコ

「／／／／早く逝くのじゃ！！」

アレ？字がおかしくね？行くだよね？

ん？なんか底が抜けるような・・・（まさか…?!）

「やっぱりかあああああああッ!？」

そう言い残し転生を果たす主人公であった。（笑）

## 第01話 『カミングアウトは突然に』

主人公side

ん、着いた…のかな？

ここは、一体どのあたりなんだろう？ 何処かの空き地みたいだけ  
ど。

それに何故だか普段よりも視野が低く感じるな。

ん？・・・あ、そうだ。自身の設定をする際に  
なのは達に合わせて同じくらいの年齢にしたんだった。  
確かにそうすれば視野も低くなるわな。すっかり忘れてた。

「にしても、あの幼女。なかなか良い仕事するじゃないか」

服装そのものは黒い長袖に紺のジーンズと転生前と同じものだが  
サイズがしっかり子供用に合せてある。

服装を確認する際に持ち物もチェックしたところ財布と鍵が入って  
おり地図と

メモも付属されていた。時間も勿体ないし地図の場所を目指しながら  
読んでみるか。

何々…

このメモを読んでいるということとは

無事に『リリカルなのは』の世界に着いたということじゃろう。

お主の此の世界における家庭環境とかなんじゃがな

色々原作を改変したいお主のことじゃ。

親と暮らすとなると自由が制限されて不便じゃろうから

既に両親は他界し祖父の援助を受け一人暮らしをしておる設定にしておいた。

因みに祖父は此方こなたの部下が演じておるからの何かあれば頼るがよい。  
此方こなたは気がきくからの！！此方は（ry：大事なことなので2回言ってみた。

コホン、それでじゃ。生活費に関しては子供の身で稼ぐのは厳しいじゃろうから

働かんでも一生暮らせるくらいの金をお主名義で振り込んでおいた。

（俺名義って、俺、名前をあの神に名乗ったっけ？）

因みに『何故、お主の名前を知っているのか』といえは  
此方こなたが神だからじゃ！！恐れ入ったか！！敬っていいのじゃぞ

（何でだろう、敬ったら負けな気がするのは…）

でじゃ、あのな。大変申しにくいのじゃがな……。  
あははは……

（うん？なんだか雲行きが怪しくなってきたな……。  
てか、手紙で苦笑いするヤツ初めてみたよ。）

実はの、お主の容姿に関して何じゃが……。確か中性的なイケメンじゃったな。

（俺の容姿？別に普通だと思うけど……。  
ん？さつきから何で通り過ぎる人たちはコツチをみてるんだろう？  
別に子供が出歩いていても不思議な時間帯でもないだろうに……）

スマン！！実は容姿を設定する際に  
うっかり「男の娘」っぽい容姿にしてしまったのじゃー！！  
ついでに、なのは達より一つ下の年齢に……。

「は？」

てへ

「はあああああああああああああああつ！？  
「てへ」 じゃねえよ！？何で中性的なイケメンって頼んだら  
男の娘になるんだよ！！どんなうっかりだよ！！おかしいだろ！？  
しかも、さり気なく、もう一つカミングアウトしやがりましたね！  
？」

いやな、此方も悪いと思っておるから、こうして破格の待遇をじゃ  
な・・・。

それに余り大きな声で騒ぐと傍から見て痛い奴にしか見えんぞ。

「うるさいよ！？へっばこ神が！！

何が悲しくて、態々、男の娘にならにやなんのだ！！」

ま、まあ、落ち着け。此方も容姿には若干コンプレックスを抱く身。  
このままタダで済ませるのは忍びなく思っておるのじゃ。



(年齢は気にしとらんのか……)

「つーか、なんで手紙で

会話が成立してるんだよ!? 何処かで見てるだろ、お前!」

~~~~~

「こいつ……。さっきの敬ってはいけない気がしたのはコレか!」

で?、忍びなく思っている『うっかりスキル常備のへっぽこ幼女』は何をしてくれるの?」

……。なんか、扱いがどんどん酷く「いいから進める」…はい…。

でじゃ、先の個人的な理由もあるが何よりミスが過ぎると此方こなたの威信にも関わってくるのじゃ。

そこで、先の待遇に加え、お主に此方こなたから

この世界で必要となるデバイスをプレゼントするのじゃ!!

お主の望む理想はチート能力があったとしても決して容易ではなからう。

ある意味、遥か高みを目指すに等しい行為じゃ。

故に此方はコレを                      高みを行く者                      【ハイペリオン】と名付けた。

必ずや、お主の助けになる。それだけの性能を秘めたデバイスじゃ。  
・・・ん？どうしたのじゃ？

「…マジで？マジでそんな高性能デバイスくれるの！？  
何かしらコレをネタに色々ふっかけようと思ってたけど  
まさかコレほど好条件だしてくるとは思わなかった！！スゲー、うれしい！！」

そ、そうか。何か不穏な発言も聞こえたが喜んで貰えて何よりじゃ。  
では、此方の用はこれだけじゃ。元気で暮らせよ。「神様」ん？

「色々、あつたけど、態々ありがとう。神様も元気でね」（ニコ

あ、ああ…／／／  
（じゃから、その笑顔は反則じゃろう。気づいとらんのじゃろう  
か／／／）

s i d e   e n d

余談

【はじめまして、マスター】

「ああ。これからよろしくね、ハイペリオン」

【はい、マスター。あ、マスター。マイスターからメッセージを預かっています】

「メッセージ？再生して」

ツピ

あゝ、此方<sup>こなた</sup>じゃ。先程の手紙じゃがの

早々に処分することをお勧めするぞ。ソレ自然消滅（破裂）するからの テンプレ的に。

一度やってみたかつたんじゃ

「な!？」

パンツ！

「うわっ?!……………そ、そんな、テンプレ…いるか……」

主人公の中で神の評価が上がったり下がったりと忙しい転生初日であったとき（笑）

## 第02話 『未来の白い悪魔と遭遇』

主人公 side

「ふう、さっきは酷い目に会ったなあ」

【はい。我がマイスターながら困ったものです】

いま、俺は新たな相棒【ハイペリオン】とともに  
駄神（先の一件などで敬う気がゼロになった）が寄こした  
地図を頼りに新たな住居、ぶっちゃけマイホームを目指している。

「地図によれば、この公園のあたりのはずなんだけど…」

所詮、アニメを元にした知識だ。地図があつたところで初めての土地には変わらない。

「そして俺は自慢じゃないが若干方向音痴でもある。いや、初めての土地限定だよ？マジで」

【マスター……迷子になったんですね】

「え?!何いつてんの?リオン。」

俺はお前のマスターだよ?そんな俺が迷子なんて…H A H A H A !  
」

【声に出てましたよ。この通り「そして俺は（中略）」

マスター、ここは誰か土地勘のある人に訪ねてみてはどうですか?】

「何、このハイスpekデバイス…。俺の独り言を録音（隠し取り）  
しただけでなく

今後の方針を提示してきたよ!?!一家に一台ハイペリオン!?!これ  
名言じゃないか?」

【迷言も程々にマスター。……あの少女なんてどうでしょう?  
地元の子のようですし、手掛かりくらいは分かるかもしれませんよ】

「最近、リオンが冷たい気がするな、俺。出会って1時間しか経ってないけど」

因みに【リオン】というのは俺がつけた【ハイペリオン】の愛称である。

聞けばAIは女性人格という。それならばと名付けてみたのである。この呼び名なら女性でもイケると思ったからだ。

けして某仮面の剣士の本名からとったわけではない。ここ重要！！

【マスター・・・？】

「おk、分かったから無言の圧力プレッシャーをかけるのはやめようか」

【・・・なら、急いでください】

「・・・はい」(シユン

【(この人、反応がいちいち可愛いですね／＼／＼何だかハマってしまいそうです)】

ちくせう。

なんか良からぬことを考えてそうなんだけど  
触れない方が良い気がするので言わないでおこう。

べ、別にリオンの無言の圧力に怖気づいた訳じゃないんだからね！！

「んで、女の子だっけ？じゃあ、聞いてみようか。行こう、リオン」

【Yes、マスター】

「ねえ、きみ。道を聞きたいんだけどいいかな」

主人公 side out

なのは side

わたし、高町なのはは、とある事情で近所の公園に遊びに来ていま

す。

え？・・・友達？友達はいません。私は良い子でないとダメだから。

おかあさんや家族の皆に迷惑はかけられないから。友達を作る気にはなれません。

なれないはずでした。彼女に出会うまでは

「ねえ、きみ。道を聞きたいんだけどいいかな」

話しかけられて、わたしは辺りを見渡しました。  
もしかしたら、違うひとに声をかけたのかもしれないから。

「うん？きみだよ。きみ」

今度は私の目の前まで来て話しかけてきました。  
まず目が行ったのは、その透き通るような輝きを放つ銀色の髪  
そして何よりも空のように海のように深く優しい蒼い瞳。  
声質からして女の子だと思う。わたしと同年くらいの。



「わ、わたし？／／／」

見とれていたこともあつて若干声がどもってしまった。

「そう、きみ」

そう彼女はいうと優しい笑みを浮かべ頷いてくれた。いつ以来だろう。

誰かから優しい笑顔を向けて貰ったのは…。

いつのまにか、わたしは悲しい訳でもないのに人目をはばからず泣いていた。

自然と涙が溢れていたのだ。

「え？何！？どうしたの？！」

彼女は驚いていた。当然だと思う。

見ず知らずの女の子が自分の目の前で突然泣き出すのだ。

わたしだつて突然そんな場面に出くわしたら同じような反応をして  
いただろう。

だけど、止めることは出来ない。久しく忘れていた暖かいものに触  
れてしまったから。

だから・・・

ギュッ

「・・・え？」

気づいたら彼女が優しく抱きしめてくれていた。それは何て暖かい  
のだろうか。

わたしは押さえがきかなくなっていた。涙を流すだけで済んでいた  
はずなのに嗚咽は漏れ

歳相応としの少女として声をあげて泣いていた。彼女には悪いことをし  
てしまった。

落ち着いたら理由も含めて謝ろう。だから、落ち着くまでこのまま  
でいさせて欲しい。

そう願ってしまっていた。

ようやく、涙も収まり落ち着きを取り戻したころ既に日は西に傾き  
始めていた。

「ごめんね、突然泣きだしたりして・・・／＼／＼」

わたしは泣きやんですぐ謝罪を口にした。

なんというか、わたしが彼女に抱きしめられた状態で泣いていたせいで

色々と上着が大惨事なのだ・・・／／

「いや、かまわないよ。その様子だと理由があっただんでしょ？」

彼女は気にしてないと、理由があっただから仕方ないと許してくれた。

気づいたら、わたしは現在の家庭の事情を包み隠さず彼女に話していた。

幸い、最初にかなり泣いてしまったせいか、すんなりと話すことができた。

・・・出来たと思う。

「...そっか、でもさ、きみも僕もまだ子供なんだから

我儘をいつていいんだよ。我慢する必要なんてないんだ。

もし、そんなことが許容される環境があるのなら僕がそれを否定する」

うれしかった。いつも誰かに言っただけの言葉。ただ自身の殻にこもり我慢していたから掛けて貰えなかった言葉。その言葉を彼女は言ってくれた。ただ純粹に、まっすぐにわたしの目を見て。

わたしは、わたしらしくあっていいのだと

さらに、彼女はわたしにうれしい一言を優しい笑顔で言ってくれた。

「じゃあさ、きみがきみらしく生活する第一歩として、僕と友達になろう」

うれしくてまた泣いてしまった。

だけど、それでもこの返事だけは笑顔で返したかった。彼女の笑顔に答えるために。

そして、彼女とわたしは友達になった。

なのはside out

主人公side

マジでびびった。いやだつて、なのはだよ！？  
いきなりあそこで会うとは思わなかったわ。  
確かに、なのはの過去にこういったことがあったのは知っていたけど  
まさか、この時期の、この公園だったとは。

しかも、突然泣き出すし・・・（汗）

場の勢いに負けて思わず抱きしめて慰めてしまったけど  
俺の予定ではあともう少し自身の能力とか諸々の状況を理解してから  
エンカウントしたかったのに・・・orz

でも、これはこれでアリかも知れない。

なのはの無理をする根源はこの事も含まれているのだから。  
早い段階でなのはの心の楔を抜いてあげられたと考えれば悪くはないだろう。

だから、俺は一通り話が済んだところで、彼女にこう言った。

「僕と友達になろう」

主人公 side out

## 余談

「それで、落ち着いたところで悪いんだけど、この住所知らない？」  
「ふえ？この住所・・・？ごめんなさい、わたし、まだ地図わからないの」

なんだと！？ここにきて迷子…もとい遭難フラグ再び？！

「でも、安心なの！今日、『カナタちゃん』は  
ウチにお泊まりだからお母さんかお姉ちゃんに聞けば大丈夫」

「え、いや。それはまずいよ。だって、僕『男』だよ?」

「ふえ?」「いや、だから男!」  
ふえええええええええええ  
ふえええええええええええ

?!  
」

「あ、なのはさんや、まさかとは思うけど…  
カタナくん、こんなに可愛いのに男の子なの?!」

カナタがダメージを負った！

グ  
フ  
ッ  
!  
!

（【マスター、お氣を確かに！！！  
確かにマスターの可愛らしさは異常ですが、れっきとした『男の娘』  
なんですから！】）

ズドンッ！！

カナタに渾身の一撃！！

グハッ?!

(「つぐ・・・お前の最後の一言が一番効いたよ、リオン?!」

お前はマスターを虐めて楽しいのか?!」)

(【ああ、その涙ぐんだ顔!!最高に可愛いですよ マスター!!】  
)

(「もう嫌だ!!」

絶対、いつか解体してやる!!この駄バイス!!」)



主人公設定 (無印時) 【ネタバレの危険アリ】 (前書き)

最低でも五話まで読んでから見ることを推奨します。

## 主人公設定（無印時）【ネタばれの危険アリ】

夜神 「コンチャーっす！」

カナタ「ちわー」

夜神 「ようやく、お前の設定紹介まで話を持って行けたよ」

カナタ「おつかれさま」

夜神 「おう、ありがとさん」

カナタ「で、実際の所、俺ってどんなキャラなのよ？」

夜神 「そうだな、まあ、ざっとこんな感じだな」

## 転生前

天城力ナタ<sup>あまぎ</sup>

性別 男（一応w）

年齢 21

身長 前世時：168？

体重 前世時：60？

容姿 前世時・黒髪、黒眼の純日本人といった感じ。体型はひきしまった細身。

前世から中性的（女性寄り）な顔立ちではあったが本人に美形としての

自覚はなかった。むしろ、その容姿と名前から女性扱いされることが

多かった為、若干困っていた。

性格 基本は、誰に対しても気さくで優しく目上に対する礼節は弁えるタイプ。

しかし、相手の態度によってはその限りではない。天然で恋愛関連には疎い。

状況・感情等によって口調が変化する。

特技 家事全般をそつなくこなせる。歌が上手い。

趣味 自分が菓子と茶が好きだった為、休日などには良く菓子などを作っていた。

一人称 俺、公的场所では私<sup>わたし</sup>

好きなもの HAPPY END、優しい人、お茶全般、それと和・洋菓子（自作）

嫌いなもの BAD END、外道な奴、自分の信念や理想などを押し付けてくる奴 etc .

## 転生後

カナタ・アマギ

性別 男の娘（笑）

年齢 なのは達より一つ下

（カナタは同じ年かと思っていたが、幼女神の「うっかり」スキルで（ry

身長 なのはと同じか若干低い位（なのはと出会った当初）

体重 身長とのバランスは取れている。

容姿 銀髪蒼眼。本人は中性的（かつこいい意味で）なイケメンを望んでいたが

幼女神のうっかりミスで前世同様もしくはそれ以上に可愛らしい容姿に

なってしまった。（だが、イケメンではある）本人も当初は気にしていたが

原作開始頃には最早諦めの境地に達している。しかし、面と向かって言われると

凹む（笑）男の娘化した影響か、髪は後ろで縛れるくらいには長くなっている。イメージ的にはネギまのネギが髪を下ろした程度の

長さ。カナタは普段から下ろしている。

性格 前世同様。

特技 前世同様。チートスキルでその腕前はさらに強化された模様。  
趣味 前世同様。チートスキルを手に入れてからは趣味が多くなつたように思われる。

一人称 年齢のこともあり人前では僕、リオンと二人の時は俺。

好きなこと 前世と同じ

嫌いなこと 前世と同じ

家族構成 神の心遣い？で祖父がいる設定になっている

夜神 「どうよ？」

カナタ 「どうよ？…じゃねえよ！？」

なんだよ！性別：男の娘（笑）って！？てか、そのどや顔やめろ！！」

夜神 「え〜〜〜〜？」（ニヤニヤ

カナタ 「…コイツ。リオン、セットアップ！【Yes、マスター】」

夜神 「ちょ？！待つ、落ち着け！俺、年上。お前年下。礼節はどうした？！」

カナタ 「知るか〜〜〜！！焰龍一閃！！」

夜神 「おま？！ステータス行く前に技だしてんじゃ・・・アッ  
「……………?！」

しばらくお待ちください

カナタ「粛清は済ませた。ここからは俺が進行するからよろしくね」

カナタ「俺の無印（前半）でのステータスはざっとこんな感じだよ」

カナタ・アマギ（本来の実力） 能力で調整した状態

|        |      |     |
|--------|------|-----|
| 保有魔力量  | （EX） | AA+ |
| 魔導師ランク | （EX） | AA+ |
| 魔力制御能力 | （EX） | AA  |
| 魔力運用能力 | （EX） | AA  |
| 魔力収縮能力 | （EX） | AA  |
| 魔力変換効率 | （EX） | S   |
| 瞬間最大火力 | （EX） | AA  |

魔力光 藍色（紺に近いかな？綺麗な色ではある）

仕様術式 近接では古・近代ベル力式、遠距離ではミッド式で戦う。

レアスキル 魔力変換資質【炎熱】【電気】【凍結】【風】

## 所持デバイス 【ハイペリオン】

愛称：リオン AI：女性人格 待機形状：銀の剣十字ネックレス

第二話で分かるようにカナタを弄ることに快感を覚え始めた少し危険なデバイス。

最近ではカナタのさまざまな様子を記録し愉しんでいることもあるとかないとか。

しかし、基本はマスター第一主義（LOVE?）であり、性能も神の折り紙つきなので安心?といえる。

一人称は私、カナタのことはマスターと呼ぶ。マイスターはあの幼女神。

機能：武装変換機能

先ほど作者を屠る際に剣型に変形していたが他にも設定次第で変形可能。

アーカイバ

なのはの世界における魔法・技術の全知識

（過去も含む）を

保有している。

特殊通信機能

神と通信をやり取りする機能。最近では勝手に映像回線で

に映像回線で

通信してくることもあるとか。カナタの悩み

の種?になっている。

神査機能

自身や相手の状態を検査する機能（対象に

例外はない）

## 【チートスキル一覧】

- 一、転生した際は現在の記憶、知識を保有している。
- 二、なのはの世界における魔法・技術の全知識（過去も含む）  
（リオンに備わることになった）
- 三、基本ステータスはすべてEX
- 四、他の漫画やアニメ、ゲームに至る、術・技及び固有能力使用権  
（デメリットなし）
- 五、四と同じ条件で全てのアイテムを生成・使用できる。？（ある意味無限の創製と同じ能力）
- 六、自身のステータス・及びスキルを自身で封印・解除・調整できる。
- 七、魔力変換資質「炎熱」「風」「雷」「氷」を持っている。
- 八、独自の魔法、アイテムを開発・使用する能力
- 九、物事を十二全にこなせる能力
- 十、自身の望む能力を一つだけ後付けで追加出来る。

夜神 「うわゝ、改めてみるとすげえチートwww」

カナタ「うわ？！突然、出てくるなよ！というかこういう設定にしたのお前じゃん」

夜神 「うん、そうだよ。この物語では俺が最高神（作者）だからな！！」

カナタ「なんか凄いむかつく…」

夜神 「これで、一通りの紹介は済んだのか？」

カナタ「ああ、現時点で分かっているのはこれだけのはずだよ」



夜神 「じゃあ、今日はここまでだな。後はまかせた〜」

カナタ「あ、こら！最後まで居ろよ作者！…たく、これからも

『魔法少女リリカルなのは 転生者はHAPPY

ENDを至高とする』を

よろしく願いますね。では、第三話でまたお会いしましょう。」

### 第03話 『別れるのは辛いけど』

カナタ side

俺は、いま転生して初めてのピンチを迎えている。  
え？意味がわからない？ダイジョブだ！

俺も何でこうなったのかわからないから！！

だから、理解できなかったキミは至って問題ない。

某墮天使が質問してきても「大丈夫だ、問題ない」と答えればいい  
さ！！

「カナタくん、待つの～～～～！！」

ゲッ！？

現実逃避してたら見つかった？！

はあ、どうしてこうなったんだろ。マジで。

（回想シン）

そう、なのはと友達になったあの日。

俺はなのはの勢いに負け、結局、家に泊めさせてもらうことになったんだ。

その時、なのはの母さん（桃子さんだったか？）は普段大人しい態度を装っていた

なのはが必死に頼みこむ姿を見て驚いていたなあ。

まあ、そりゃそうだよな。あの時の必死さには俺も驚いたし。

恐らく、なのはに俺の家庭環境を話した事が原因だろうけどね。

友達になった時に自分だけ教えないのもどうかと思ったから

一部ばかりしながら話しておいたんだ。

で、そんな、なのはのお願いが功を奏して俺は一晩の宿を得ることが出来た。

その日の夕飯の時、俺は思いもよらない……いや、可能性的には十分あり得たんだが

こんなことを桃子さんが言ってきたんだ。

「ねえ、カナタくん。よかつたら暫くウチで一緒に暮さない？」

アナタの家庭の事情は、さっきなのはから聞いたわ。ウチの事情はなのはから聞いた通りだから、私たちは余り一緒には居られないけどアナタと一緒にいてくれたら、なのはもきつと喜ぶわ。どうかしら？」

正直、この申し出はありがたかった。

一緒に暮らす事でなのは父さん、土郎さんの病室を訪れるチャンスが増えるからだ。

しかし、ここで問題が生じる。仮に土郎さんを治療し目的を果たしたでしょう。

そのあとは、どうすればいいのだろうか。この家族のことだ。

恐らく、土郎さんが完治した後も、よかつたらと面倒を見てくれようとするに違いない。

そうになると、俺の計画に誤差が生じる。

・・・だが、現実とは非情である。

そう、なのはがこっちを見てるのだ。

捨てられた子猫が拾って貰えるかもしれないと期待と不安を宿して見つめている

そんな感じの瞳でこっちを見てるんだ・・・。

わかるだろ？俺もこんなナリをしていても列記とした男の子なんだよ…。

可愛い女の子が自分にそんな目を向けてくるんだよ！？

そしたら、答えなんて決まってるじゃないか！

「よ、よろしく願いします／＼／＼」

「やったー！なの」

「ふふっ、よろしくね。カナタくん」

「よろしく、カナちゃん」

「……よろしくな」

誰が、どのセリフを言ったかは語るまでもないだろう。

恭也さん、よろしくと言いつつガン垂れないでください。

美由希さん、カナちゃんはマジでやめて？！前世のあだ名がそれだから！！

ああ、女の子扱いされた前世の記憶が蘇ってくる……orz

こうして、高町家でしばらくの時を過ごすことになった。

計画の誤差については後々考えるところ。

え？計画性がない？

うるさいよ、計画を深く立てないことこそが最大の計画なんだよ！

（【マスター、それはどうかと思いますよ…】）

そして、時が経ち高町家に居候していたことで予想通り

士郎さんをお見舞いに行くチャンスが生まれた。

俺はその好機を見逃さず、しっかり治療した。

え？どうやったかって？

そんなの、簡単ですよ。

なのは達に見つからないように、隙をついて

俺のスキルでリジエネを一回唱えたら終わりですよ。

ん？リジエネはそんなに都合のいい術じゃない？

そんな俺のスキルの前には関係ないね！！

それで、まあ結果だけ話せば士郎さんは無事回復。

いまは喫茶翠屋のマスターとして仕事に精を出しているし

桃子さんも士郎さんが元気になったことでご満悦。

美由希さんは志郎さんが入院していた際の重圧から解放されたせい  
か幾分かほっとしているようだ。

恭也さんは…驚くほど丸くなっていた…。

アレ？貴方、恭也さんですよ？

まったく、以前の刺々しさがなくなっていた。

しかも、今では俺と普通に会話してくれるまでになっていたし

なのはに關してもよく氣遣うようになっていた。

恐らく、士郎さんが退院してすぐに恭也さんと呼び出していたから

親子水入らずの時間があつたんだろう。いいことだ。

で、だ。我らがなのはさんかというと

「にやはは」

俺の腕を引っ張りながら

桃子さんに頼まれた物を買いに俺と商店街に向かっていた。

かなりご満悦である。本当、明るい子になったようで何よりだ。

そして、月日は経過し今日の夕食後に爆弾は投下された  
いや、投下してしまったというべきか・・・

そう、俺は高町家が大分落ち着いてきたこともあって  
食後にまったりと寛いでいる高町家の皆さまに  
兼ねてより考えていたことを口にしたのだ。

「そろそろ、ここを出ようと思います」

この時、俺はもっと考えて発言するべきだったと  
のちに心の底から反省したよ。

「ふえゝ?!なんで?!ずっと一緒に暮らそうよ!!!カナタくん!  
!」

なのはが凄く喰いついたのだ。

「ふむ、よかつたら理由を聞かせて貰えないかい？」

騒ぐなのはを余所に真剣な表情で聞いてくる士郎さん。

まあ、当然だろう。まだ、<sup>よわい</sup>齡一ケタの子供が

再び一人暮らしに戻るというのだ。心配しない方がおかしいだろう。  
だが、俺にはこの世界に来るときにあの駄神が設けた切り札<sup>せつてい</sup>がある  
！！

「はい。先日、祖父から連絡がありました  
よければ一緒に暮らさないかと言われました」

「その祖父の方とはもうお会いしたのかい？」

「はい、既に会って話はつけています。  
明日には迎えを寄こすそうです」

「そうか。急な話ではあるが、そこまで決まっているなら  
こちらから口をはさむことではないな」

「すみません。本当なら世話になった士郎さんや桃子さんに  
相談してから決めるのが筋なのに勝手に決めてしまつて」

「いや、構わないさ。」

むしろ、私達の方がキミに世話になつたと言えるぐらいだ」



「そうね、今思えばこちらの勝手な都合にカナタくんを巻き込んでしまったような気もするわね。カナタくん、本当に今までありがとうね」

「いえ、こちらこそ本当にお世話になりました」

「カナタくん、今度こっちに戻ってくることがあったら遠慮なく寄って行つてね。母さん達じゃないけどカナタくんには本当に世話になったと思ってるし、家族だと思ってるから」

「そうだぞ、カナタ。お前には、なのはもかなり救われたんだ。もちろん、俺達もだ。だから、何かあったら今度は俺達が助けてやるからな」

「はい、ありがとうございます。美由希さんも恭也さんもお元気で」

カナタ side out

なのは side

え？なんで？どうして？

急な発言だった。カナタくんが突然ここを出ていくと言い出したのだ。

わたしは最初言葉の意味を理解できなかった。  
そして、理解した瞬間私は叫んでいた。

「ふえー?! なんで?! ずっと一緒に暮らそうよ! カナタくん!」

そう、今まで通り一緒に暮らしたい。ただ、それだけだった。  
だが、現実とは非常なもので既に引越手続きは済んでいるのだ  
という。

家族とカナタくんの会話に耳を傾けてみると、どうやらウチの家族  
も了承するようだ。

でも、わたしは認めたくない。

わたしに再び人の温かさを教えてくれた彼がわたしの傍から居なく  
なることを。

なら、どうする? カナタくんが引越さないように駄々をこねる?  
いや、それはダメだ。それではカナタくんが困ってしまう。  
そんな彼の顔をわたしは見たくない。

それでも、やはり寂しくはある。

一番仲の良かった初めての友人が、家族とも思えるそんな人が  
わたしの傍からいなくなるのは。

だから、わたしは気づいたら彼の温かさを忘れない為にあることを  
提案していた。

「カナタくん!! 今日と一緒に寝よう!!」

なのはside out

カナタside

は？

俺は正直、今とても間抜けな顔をしていると思う。

いや、だって仕方ないだろ？突然なのは「一緒に寝よう」と言い出したのだ。

いや、寝ること自体は問題ないんだ。寝ること自体は……

問題は…後ろの二人である。

阿修羅が二体ほど凄いオーラをだしているのだ。

誰がだって？

決まってるじゃないか。高町家の男性陣だよ！！

てか恭也さん、あんた丸くなったんじゃないのか！？

あと土郎さんその手にした木刀は置いてくれませんかね！？非常に怖いです！！

と、内心怯えていると救世主（般若）が現れた！！

桃子さんと美由希さんだ。

二人は高町家の男性陣を引き連れ奥の部屋に入って行った。

恐らく、これが後のなのはに受け継がれる高町式OHANASIなのだろう。

先を考えると恐ろしいものがあるな。

で、二人が連れて行かれたことで、俺はなのはと二人きりな訳だが・  
・・

「カナタくん・・・」

だから！！その捨てられた子猫のような顔はやめてくれと、何度言  
ったら・・・

「カナタくん・・・ぐすっ」

ちょっ！軽く泣きがはいつてるんですけど？！

（【マスター、女性に恥をかかせるものではありませんよ】）

いや、リオンも何いちゃってるの!?

恥とかの前に命の危機だから!!

くっ、こうなったら戦略的撤退をするしかないか!!

### 回想終了

で、冒頭の話に戻るわけだが、俺にどうしろと!?

桃子さん達がOHANASIしてくれているとはいえ

朝方にはあの二人と顔を合わすんだよ!?

しんでしまっじゃないか!!

俺には守りたい世界があるんだ!!こんなところでやられる訳には  
!!

（【大丈夫ですよ、マスター。貴方が怯え、半泣きになっている  
愛らしい表情は私のメモリーに永久保存されますから】）

（「だまれ!!駄バイス!!お前の変態記録なんて  
どうでもいいわ!!お前は俺の命が心配じゃないのか!？」）

（【何いつてるんですか。  
心配していますよ。貴方は私の唯一のマスターなんですから】）

（「リオン・・・」）

（【だから腹を括ってなのは嬢と一緒に寝て私の為にフラグを立てて下さい】）

（「少しでも感動した俺が馬鹿だったよ！！俺の感動を返せ、コノヤロー！！」）

「あ、見つけたの さあ、カナタくん。一緒に寝よう」 （腕を捕獲中w

もうこれはあの名台詞を借りるしかないよな・・・

「不幸だ~~~~~~~~!!」

カナタに明日はくるのか、それは神（作者）のみが知るところwww

## 第04話 『能力へちから』の把握』

やあ。昨夜、結局、なのはに捕まり一夜を過ごしたカナタだよ。うん、賢明な人はもう気づいてるよね。

経緯はどうあれ、なのはと一夜を共にしたんだ。

当然、黙っていられない人がいるわけで。

まあ、桃子さん達に捕縛されていったから

問題なかったけどね！！

で、いまは祖父（部下の人）の案内で以前辿り着けなかった我が家へと足を運んでいるのだ。

【最初から彼に頼っていれば

こんな面倒なことにはならなかったのでは？】

「そういうなよ、リオン。俺だって神の寄こしたメモが消滅式じゃなかったら覚えていたんだよ？」

【どうでしょうが、マスターのことですから

メモが残っていても忘れていたと思いますが…】

「はは・・・なかなか手厳しいね、リオンは」

因みに、ここまで案内してくれた祖父（部下の人）は案内が終わってすぐに忙しい為か、当たり障りのない会話を一通りして帰ってしまった。やはり、あの神の下だと大変なんだろうなと思ってしまうカナタであった。

このまま、建物の下で会話していても仕方ないので渡されていた鍵を片手に自分の部屋を目指した。

部屋という言い方をしたのはどうも俺のこの世界での住居は一軒家ではなくマンションだからだ。それにしても、この建物、何処かで見た気がするんだよね？

そして自室にて

「さて、部屋にも無事に辿り着けた訳ですが、何からやりますかね」  
【そうですね、まずは私の機能について調べてみてはどうでしょうか】

リオンの機能か。確かに神が言うにはかなりの高性能デバイスらしいからね。

先に調べておいた方が何かと役立つかな。



「そうだね、じゃオリオンの解析からはじめようか」

【イエス、マスター】

そして調べてみて分かったことは・・・

武装変換機能があり、幾つものデバイスと  
バリアジャケットに換装することができるということ。  
通常のデバイスと同様の機能も備わってはいるが  
どれもが規格外ということ。

解析出来ない機能がいくつか存在していること。  
神と通信をやり取りする機能があったこと。

（解析の途中で行き成り、

あの幼女神が映像通信で現れた時には少々ビビったよ・・・）

っと、ざっとこんな感じのことが分かった

「これで名実ともにキミが凄いデバイスって事が証明されたね。  
そんなデバイスを持つマスターとしては、とても心強いよ」

【ありがとうございます、マスター。

私も 高みに行く者 《ハイペリオン》の名に  
恥じぬよう何処までもマスターについていきます】

「ああ、よろしく相棒<sup>リオン</sup>」

こうして、リオンの解析を終えた俺は自身の能力の確認の為にオンと共にとある開けた場所に来ていた。

【マスター、周囲の生体反応の確認、高硬度の結界構築終了しました】

「じゃあ、はじめようか。リオン、セットアップ!」

【セットアップ】

リオンの武装変換機能が判明してすぐ、幾つかの設定を組み込んでみた。

一つは古代ベルカ式魔法に合わせて騎士甲冑と剣、槍、双剣を  
一つは近代ベルカ式魔法に合わせてナックル系統の武装を  
一つはミッド式魔法に合わせて二丁拳銃を

そして、今回最初にしたのは

「へえ、なかなか良いセンスだね。リオン」

【ありがとうございます。

マスターのその銀の髪に合うよう構成してみました】

そう、カナタは大まかな設定はしたものの  
バリアジャケットや騎士甲冑のデザインが浮かばなかった為  
リオンにそのデザインを任せたのである。

因みにいまカナタが装備しているのは  
古代ベルカ式に合わせた騎士甲冑と剣である。

デザインは黒を基調とし、  
銀の装飾で飾るという至ってシンプルなものである。

しかし、カナタの容姿も鑑みれば下手な装飾は  
むしろ無粋であり不要といえるだろう。

それほどまでにこの騎士甲冑は  
カナタに似合っているのである。

そして手には自身の瞳と同じ色で  
ブルーサファイアを彷彿とさせる  
蒼く美しい剣が握られていた。

「じゃあ、俺の能力の確認もしつつ、一通り試していこうか」

【イエス、マスター】

こうして、カナタは原作までの残りの時間を  
リオンとともに能力と自身に見合った戦闘スタイルの  
把握にあてたのであった。

## 余談

「よし、まずは【炎熱】の変換資質！！焔龍一閃！！」

バリッッ！

「やば！？調子に乗って結界ぶち抜いちゃった？！」

【なんだか、マスターの力を前にすると  
自分が本当に高性能デバイスなのか不安になってきます】

結果として、スキルを使いステータスを調整したカナタであった。

## 第05話 『原作への介入』

あれから、俺はさらに自分の力を把握する為に『ネギま!』に出てきた

エヴァの別荘を作り出して漫画とかの魔法を片っ端から試していたんだ。

因みに不老の魔法が掛かったアイテムを作ったから年はとってないよ

で、結論から言うとこれはマズイ。

いやさ、エヴァの別荘に雪山のエリアあつたじゃん？

そこで燃える天空って技あつたら？

アレを自分のスキルやステータスを弄らないで放つたんだ

そしたらさ、雪山のエリアが消しとんだ。

全力じゃないのに、これってヤバすぎるだろ。

いくらなんでもこれはマズイ。

だから、俺は戦闘では極力、漫画やゲームの

特に攻撃系魔法は使わないようにした。

モノによつては恐らく惑星さへ破壊できるんじゃないだろうか。

勿論、ステータスやスキルもこういう事態に備えて設定したあのスキルで調整した。

ただ、そうなってくると、ここの世界にあった戦い方をしなければいけないということだ。

## 閑話休題

時間はかかったが

何とか自分の戦闘スタイルをこっちの世界に合わせることが出来た。

近接戦では前に造った騎士甲冑に剣、槍、双剣、ガントレットを術式構成は古代ベルカと近代ベルカだ。騎士甲冑は古代・近代どちらにも対応できるように設定してある。

中、遠距離戦では二丁拳銃を使い、近接にも備えてダガ モードも造った

術式はミッド式だよ。

え？ティアナのパクリ？いいじゃん二丁拳銃は男のロマンだよ  
また、ライフルモードも合わせて組み込んである。狙撃ってカッコイイよね。

因みにこの時のバリアジャケットはデジモンのベルゼブモンのアレね。

機械的な方じゃないよ？

戦闘方法に関してはこんな感じで決まったから後は鍛錬と魔法の勉強だね。

鍛錬に関しては

俺の能力と別荘という空間を使ったから、かなりいい感じに仕上がった。

魔法の勉強に関して何だが、ここで驚きの事実が判明した。

俺自身に

『なのはの世界における魔法・技術の全知識（過去も含む）』が備わっていなかった。

どうということかと、神に連絡をとったら・・・

「人間の脳で

ある意味アカシックレコード級ともいえる量の知識を扱えるわけがなからう」

とのお言葉を頂きました。ちくせう

で、そのスキルはどうなったのかというところとリオンに備わっているらしい。

もともとリオンはその為に造られたのだという。流石はハイスペックというところか。

という訳でリオンさんを通して、リオンさんから教わり、それを俺が実践するという

家庭教師のような構図が出来上がってしまった。

まあ、魔法に関してはこんな感じかな。

あとは日常的な学問に関して何だけど、正直真面目に頑張ってる人に謝りたい。

うん。俺のスキルってさ漫画やアニメの固有スキルも使えるから、ガツシユの

アンサーカー

『答えを出す者』とか魔眼のようなものも平気で使えるんだ。

だからね、某月の頭脳とか呼ばれているあの人並みか

それ以上に頭がよくなっているんだ。俺に何をしろと・・・。  
何か資格でも取るのかな・・・。

カナタ side

そんな、こんなで時間（数年）が過ぎていき、ようやく原作の時期がやってきた。

え？なんで分かったかって？ ユーノが俺の夢にも出てきたんだよ。どうせなら、もっと別の夢を見たかったが・・・

で、今は夢のお告げがあったから、そろそろ張っていた方がいいな  
と思い

現在、なのはを探しながら

ステルス魔法と飛行魔法を使って、悠々空から高みの見物ですよ。

「っと、アレは、なのは達だね。あの感じだと、これからユーノと遭遇かな」



【介入しなくてよろしいのですか？マスター】

「いや、今はまだいいよ。原作通りなのはユーノに出会っても  
らわないといけないし  
この流れで出ていけば色々と面倒なことになるからね。今は静観し  
よう」

【了解しました】

さて、気づかれないとは思っけど、一応保険に障害の魔法もかけて  
おくか。

カナタ side out

なのは side

カナタくんと別れから数年が過ぎ、わたし、高町なのはは小学三年生になりました！

今は昔と違い、二人のお友達がいいます。

アリサ・バニングスちゃんと月村すずかちゃんです

友達になるまでに色々とありましたが、今ではわたしの大切な友達です

今はその二人と塾に向かうため普段の道から逸れ、近道を通っている所なのですが

（ここ、昨夜夢で見た場所・・・？）

まさかね

そう思い歩を進めると・・・

（「たすけて・・・」）

え！？

最初は気のせいかと思ったけど再び聞こえてくる助けを求める声・

・

私は声のする方へと走っていた。すると・・・

そこにいたのは、赤い宝石を身に付けた小さな動物さんでした。

なのはside out

カナタside

・・・ユーノとなのはは無事に出会ったみたいだね

これで鍵は彼女の手に移り、物語の扉は開かれる・・・か。  
始まるからには、俺もこの物語の出発地点『ジュエルド事件』に  
どう関わっていくかが今後の課題になるな。

俺の大望の為にもミスは許されない……。まあ、物語の扉が完全に開かれるその瞬間までは静観を続けるでしょう。

今夜、来るであろう、その時まで……

場所：動物病院　上空

さて、時間になったわけだが  
確か最初のジュエルシードはユーノのいる病院に来るんだったか。  
病院がまだ荒れていない所からすると、恐らく、まだ襲撃を受けていないのだろう。  
にしても、遅いな。退屈過ぎて暇だよ……。  
因みに今もさつきと同様の魔法を自身にかけているから発見される恐れはない。

【マスター、ジュエルシードと思われるものが下の病院に向かっています】

お、来たか

「じゃあ、そろそろコッチもスタンバイしておこうか」

【静観をするのではなかったのですか？】

「静観するよ。なのはの闘いに関してはね」

【といますと？】

「ここはもう現実なんだ、何が起きてもおかしくないよ」

【了解しました】

準備をし終わると、原作通り、あのモコモコ？な黒い塊が病院へ突っ込んでいった。

そして原作通り、なのはが病院までやってきた。

ユーノがしゃべったことに驚いていたが、早く逃げた方がいいと思うよ。

と思ったら、なのはもそれを理解したらしく、逃げて行った。

「じゃあ、俺たちも追おうか」

そういつて俺はなのは達の後を追った。

着いた頃には、今後なのはのイメージカラーとなる

白いバリアジャケットを既に展開していたようで

今はプロテクションで攻撃を受け切っていた所だった。

すると、ケムクジャラが破裂した……

周囲は破片で大惨事である、そして危機は俺にも迫っていた。

は？

そう、ケムクジャラの一部（？）がこっちに向かって来ているのだ

「っく、リオン、こっちもプロテクションだ!!」

【プロテクション】

なんとか防御が間に合い、事なきを得たが、なのはが再び走り出していた。

再び追いついたところには例のあのセリフを言っていた。

「リリカル、マジカル！ジュエルシード シリアルXXI、封印！  
！」

おお、なんかクライマックスには間に合ったようで少し感動した。と、感動に浸っているとジューエルシードの回収が始まっていた。回収をし終わると、ユーノが倒れた。それに合わせるようにサイレンが聞こえてきた。

警察などが向かってきているのだろう。周囲を見渡す、なのは。

「えっと、もしかしたら、わたし、ここに居たら大変アレなのは・・・？」

ひきつった顔で謝りながら逃げたっていった。  
うん、もしかしくなくても、そのまま居たら捕まってたよ、なのは。  
一部始終を見届けた俺はその場を後にした。

場所：カナタの自宅

昨夜の件で物語の扉は開かれた  
なのははこの事件に本格的に介入することになるだろう  
そして俺もまた

！？

【マスター、昨夜と同じ反応があります。恐らくはジュエルシードかと】

「よし、向かうよ、リオン！」

そういうと俺は部屋を飛び出し、反応のある場所へと向かった。

場所：神社

反応をみるとこの辺のはずなんだけど・・・  
周囲を見渡してみると、そこには犬の化物が存在していた。

「犬の化物ってことはコイツで間違いないよね、リオン？」

【はい、間違いありません】

「よし、初めての实战だけど、直になのは達も来るだろうから  
素早く終わらせる！リオン、セットアップ！！」

そして俺はバリアジャケットを纏った。

今回の目的は封印なので非殺傷設定にした二丁拳銃で相手をした。



「封印するけど、いいよね？答えは聞いてない！！」

ネタに走りながらも、手早く魔力ダメージを与え、封印を施した。

「【ジュエルシード、シリアルXVI】封印！！」

封印したジェルシードはリオンの中へと収納されていた。

接近する生体反応があるとリオンが言っているので

恐らく、なのは達がやってきたのだろう。

俺は見つからないようにその場を後にした

――これで、俺もこの事件に介入する為の鍵を手に入れた

-  
ここから俺の物語は始まるんだ

## 第06話 『ふたつめ、Getだよ!』

カナタside 場所：自宅

俺がジュエルシードを手に入れて一週間が経とうとしている訳ですが、  
なんということでしょう!

匠（俺）の記憶と知識により現在入手できたジュエルシードの数は・  
・・・・

・・・・・ たったの一つでした。

ジーザス!! orz

いやさ、俺のリリカルの知識ってアニメだけなんだよ。

つまりはアニメで描写された所しか入手場所が分からないんだ。

リオンのアーカイバにアクセスしてもあるのは技術や魔法の知識だけ・  
・・

俺にどうしろというんだ、神よ!!

ヴォンツ

呼んだかの？

「……神といつても神違いだから、帰れ、少女」

「なんじゃと！？せつかく此方こなたが現れてやったというのに、お主というッピツ」

まったく、余計な機能を付けてくれたものだ。勝手に出てくるなよ。因みにさっき言っていた【アーカイバ】は以前言っていた俺のスキルが

リオンに譲渡された際につけられた機能の名称だ。便利ではあるんだけどね……。

探査しようにも大きな術式発動したらユーノに感づかれるし地道に現場に先回りするしかないんだよ。

ああ、悲しいかな、隠遁調査……。

【マスター、落ち込んでいても仕方ありません。少し外に出て息抜きをしませんか？】

（マスターの落ち込んだ顔もいいですが、そろそろ別の表情が見たいですし……）

このデバイス、誰に似たのか実に欲望に忠実である。・・・by天  
の声

「はあ、そうだね。いつまでも落ち込んではいられないか。  
ちよつと、散歩にでも行こうか。リオン」

【イエス、マスター】

少年、散歩中・・・

どこかに落ちていないもんかねえ・・・  
落ちていたらリトスのマスク・・・斎藤並みにはっちゃけるのに  
・・・

【マスター、微弱ですが、ジュエルシードと思われる反応があります】

「はづらほづれ、うまっうゝ?!」

【意味がわかりませんが、急いでください。まだ発動していないようですから】

・・・かなしくないよ？むしろ見つかったから嬉しい位だもん・・・  
ぐすっ・・・。

（【ああ！！さっき程の驚いた表情に加え、拗ねた表情まで記録することが

出来ました！！今日は何て良い日でしょうか】）

周辺住民の為に早く回収して欲しいものである。・・・by夫の声

「で、こっちでいいの？リオン」

【はい、この辺りで間違いありません】

まさか、ホントに手に入るとはね・・・っと

「これかな？リオン、封印及び回収よろしく」

【イエス、マスター。ジュエルシード、封印及び回収します】

ふう、なんとか発動前に回収できたな。

さてさて、今回入手したのは何番かな？

「リオン、いま回収したのは何番になるの？」

【シリアルXになります】

え？シリアルX？

「ねえ、リオン。マジでX番？」

【マジです】

マジかよ、なのはの失敗フラグさり気なく折っちゃったよ。

「X番」っていえば、なのはが見逃したことで街が大惨事になるアレじゃないか・・・

まあ、アレはアニメで見ても悲惨な状態だったからな  
リアルで起きてしまったことを考えると大震災級の災害になってた  
ろう。

神様！！ありがとう！！

呼んだk「いや、呼んでないし」ピッ

だから、勝手に出てくるなと何度（ry・・・

カナタ side out

なのはside 場所：自宅、自室

高町なのはです。わたし、只今、魔法少女なるものをやっております

小学三年生のわたしですが一週間前に出会ったユーノさんと共に  
ジュエルシードの回収を行っています。そして現在は……

お部屋でちょっとバテぎみです……。

「なのは。今日はもうゆっくり休んだ方がいいよ」

わたしを心配してくれるユーノくん

「でも……」

「なのはのお陰で、もう4つも集まったんだし、今日はお休み。  
それに約束だつてあるんでしょ？」

「そうだね、じゃあ、

今日はちよつとだけジュエルシード探しは休憩つてことで」

それにしても、と思う。

二番目に封印するはずだったジュエルシード。

ユーノくんとお会った翌日に感じたジュエルシードの反応を追って神社に向かった日のこと。

あそこにあっただと思われるジュエルシードを回収したのは一体誰だったんだろう？

ユーノくん曰く、「他にも集めてる人物がいるのかも」とのことだ。

いつか出会う日が来るのだろうか・・・



第07話 『未来の雷帝にエンカウント』

カナタ side 場所：自宅マンション

あ、ありのままに起こったことを話すぜ！

二つ目のジュエルシードをGetして、

ホクホクな気分で買い物から帰ってきたら

俺の部屋の前に金髪の少女とスタイルの良いお姉さんが立っていた・  
・・。

何をいつているか分からないかもしれないが

俺もこの状況がわからない！！

どうしてこうなった。

「え、え」と。何かウチに御用ですか？」

戸惑っていても仕方がないので、金髪の少女に聞いてみた。

「えっと、その、何というか・・・」

困り顔で何か言いくそんな顔をしている金髪少女

すると、隣のスタイルの良いお姉さんが

「アンタ、何でフェイトの家に住んでるんだい!？」

などと理不尽なことを抜かしてくれやがりました。  
てか、やっぱりフェイトさんとアルフさんでしたか。

にしても、なのはに始まりこの世界の主人公は突然現れるのが好き  
だよね。

アポ取るうよ、アポ。大人の世界では常識ですよ、コレ。

（【マスターも大概に理不尽なこと言ってますよね】）

リオンさん、俺の内面を読まないで!？

「そう言われましてもココは祖父が住んでいた部屋で  
祖父が亡くなってからはそのまま僕が住んでいるんですが・・・」

そうなのだ、以前、俺の祖父としてここに居てくれた部下の人（名  
前は知らない）が

過労で倒れたから元の世界に戻ってしまったのだ。やはり、あの駄神の下では

労力が半端なかったらしい・・・つく、惜しい人を亡くした！！

（【いえ、病院で療養中なだけです。マスター】）

なん、だと・・・！？ 亡くなってないだと？！

コッチの世界では居なくなった都合上、死亡扱いになっているのにッ！

と、下らないことを思っている

「え？そうだったんですか？」

と驚くフェイト。だが

「アンタ、嘘言ってるんじゃないだろうね！  
デタラメ言ってるって頭からガブっといくよ？」

とアホ犬のアルフさん。てか、好きだね、その『ガブっ』ってフリーズ。

「アルフだめだよ、そんなこと言っちゃ・・・」

アホ犬を窘めるフェイト。ああ、やっぱりいい子だな、この子。

「だって、フェイト！ここはフェイトの」

「いいんだよ、アルフ。何か手違いがあっただろうし。どうも、すみませんでした。それでは失礼しますね」

ヤバイ、俺、その手違いに非常に心当たりがある・・・

『俺』だよ！！

恐らく神が部屋を用意する際にまたうっかりとか何とかいってミスったに決まってる

これはネタではなく、経験上、間違いない！！

なんだろう、そう考えると凄い罪悪感がある・・・仕方ない。

「あの、良かったらココに住みませんか？」

カナタ side out

フエイト side

母さんに頼まれた仕事

・・・ジュエルシード探し

それを行うための拠点となる住居へ向かったのだが  
既にそこには人が住んでいたようだ。  
どうしようかと扉の前で困っている

「え、え〜と。何かウチに御用ですか？」

と声が聞こえた。

振り返ると、そこには美しい銀髪と蒼い瞳が印象的な少女が立っていた。

ブルーサファイアを彷彿とさせる綺麗な瞳と整った顔立ち。私は見とれていた。

・・・はっ！／＼／＼と気が付くと私は返答に遅れ何て言おうか迷ってしまった。

すると、アルフが

「アンタ、何でフェイトの家に住んでるんだい！？」

と少しキツめの口調で聞き返していた。すると

「そう言われましてもココは祖父が住んでいた部屋で祖父が亡くなってからはそのまま僕が住んでいるんですが・・・」

と、彼女は言ってきた。突然の出来事に驚いていることから嘘は言っていないのだろう。しかし、またもアルフが

「アンタ、嘘言ってるんじゃないだろうね！デタラメ言ってるって頭からガブっといくよ？」

と相手を脅し始めていた。何処かで教育間違えたかな・・・？とりあえずアルフを止めよう。

「アルフだめだよ、そんなこと言っちゃ・・・」

「だって、フェイト！ここはフェイトの」

「いいんだよ、アルフ。何か手違いがあっただろうし。どうも、すみませんでした。それでは失礼しますね」

彼女が言っていることが本当なのならばココに長い意味はない。そう思い、踵を返すと彼女が声をかけてきた。

「あの、良かったらココに住みませんか？」

フェイト side out

カナタ side

「え？」

俺の言葉に振り向くフェイト。

何か後先考えずにやってしまった感があるけど仕方ないよね。

元々は俺が原因なんだろうし、それにこの時期での目標はプレシアとの接触。

ココで繋がりを持っておくのもタイミング的には悪くない。ジュエルシード鬼札もある。

何より、フェイトを「部屋に入れませんでした」何て理由で帰したら今のプレシアでは何をされるかわかったものじゃない。

管理局がネックになるが、それはまた後で考えよう。いまは

「幸い、部屋のスペースは余っていますし

僕は独り暮らしですから、そちらがよろしかったら一緒に住みませんか？」

フェイトを誘ってみることにしよう。断られればその時はその時だ。

「いいんですか？」

「構いませんよ。先ほども言いましたが、僕はココには独りで住んでいますし

スペースも余っていますから。独りでは少々広いかって思っています。たくらいです」



これは本当の話。

あの幼女神、何を思ったのか、かなり広い間取りの部屋を用意していたのだ。

だから、実際にフェイト達と共同生活になっても支障はないだろう。まあ、お互いが魔法関係者であることを明かすか否かで変わってくるが…

ふと、フェイトの顔を見してみる。かなり悩んでいるようだ。すると、  
またもアルフさん

「そうかい？じゃあ、そうしようよフェイト

今更戻ったってあの鬼ババアのことだ！何されるかわかったもんじやないよ！」

「アルフ、母さんをあまり悪く言っちゃだめだよ。不器用なだけだから・・・」

俺はココに来て初めてアルフに拍手喝采を贈ろうと思った！

ただのアホ犬じゃなかったんだね！

そして、フェイトさん、アナタはアレを不器用で済ませますか・・・。

狂った原因を知っているとはいえ、今の母親をそこまで想う姿を見せられると

確実に何とかしてあげたくなるな・・・と思案にふけているとフ

エイトさんが  
バツが悪そうに訪ねてきた。

「えっと、その、帰るようなことを言っておいてアレなんですがお願いできますか?」

俺はこの問いに対して笑顔で答えた。

「喜んで。これからよろしくお願いしますね」

閑話休題・・・

「じゃあ、荷物は適当に置いておいてね。

部屋はさっき言った場所以外なら好きに使ってくれて構わないから」

「あ、うん。ありがとう」

「僕はそのうちに夕飯の準備でもしておくよ。お腹空いてるでしょ?」

「肉はあるのかい!」?

「ア、アルフツ／＼／」

うん。この会話で分かるようにフェイトとは無事？一緒に住むことになったんだ。  
因みに会話が敬語じゃなくなっているのは、これまたアルフさんが発端だ。

「アンタたちさあ、子供同士で会話してるのに敬語はないだろう？」

ほんと、アルフには頭が下がる。人と人が持つ距離感を一気に無くしてくるのだ。

まあ、そのお陰でこちらも普通の話し方が出来るようになったから有難いのだが。

姐御肌っていうのはこういう人のことを言っただろう。

「はは、構わないよ、フェイト。ちゃんと肉もあるから心配しないで、アルフ」

「あ、ありがとう／＼／＼カナタ」

「さっすが、カナタ 良い仕事するじゃないか」

さっき、人のことを頭からどうとか言っていたのは誰だったんだろうか  
まあ、さっきの件があるから多くは言わないが。

「それじゃ、僕は作り始めるから部屋で休んでてよ。出来たら呼ぶからさ」

「うん。ありがとう」

お互いに笑顔でそういうと互いに行動を始めた。

カナタ side out

フエイト side

ふう、なし崩し的にお願いしちゃったけどいいのだろうか。  
も、もちろん、料理のことじゃないよ？部屋のことだからね！／／／

カナタ・アマギ

変わった子だった。

普通、初対面であつた人に一緒に住もうなんて言うだろうか。  
いや、彼女の善意を疑う訳じゃないんだ。彼女の言葉に嘘は感じられなかった。

恐らくは彼女の性分なのだろう。

自分も中々困つた性分だと思つが彼女もまた凄いと思う。

何せ、いくら独り暮らしだからと言っても見ず知らずの人間を二人

も招き入れるのだ。  
よほど優しい性格なんだろう。

「バルディッシュ、母さんは何て言うかなあ・・・？」

【私からは何とも。ですが、ココに住むことになったのは良かったと思います】

「そっか、アルフはどう思う？」

「いいんじゃないかい？カナタも何だかんだでいい奴そうだしさ」  
半分眠りそうになりながら答えるアルフ。きっと疲れているんだろう。

「そうだね。ただ一緒にいるならカナタには迷惑を掛けちゃうかもなあ」

そう、私が懸念しているのはジュエルシードの搜索である。  
私がココに居るのは全てこの為であり、それ以外の意味はない。  
だから、昼夜問わず動き回ることもあるだろう。そうなった場合  
自分たちを泊めるようなお人よしの彼女のことだ。恐らく心配させる  
だろう。

他人とはいえ、共に暮らす以上、出来る限り心配させたくはない。

そう考えていると

「フェイト、アルフ？夕飯出来たから、そろそろ来て貰えるかな」

！？

カナタが近づいてくる！！マズイ！！

今はアルフも寝ている状態だから耳や尻尾を隠せていない！！

「アレ、寝てるのかな、おゝい」

扉を開けてカナタが入ってくる

「待つ…！？」

ガチャ

遅かった。カナタに見られてしまった。

「なんだ、起きてるじゃん。いや、アルフは寝てるか。  
フェイト、夕飯出来たからアルフ起こしてこっち来てね」

「え、あ、うん。分かった。今行く・・・」

バレて・・・ない？

とりあえずアルフを起こし、食卓に着く。

黙々と食事をする私たち。カナタやアルフは何か会話しているようだったが

私には全然内容が聞こえてこなかった。

さっきの件がバレたかどうか気になって、それどころではないのだ。意を決して聞いてみることにした。

「あ、あのね、カナタ。さっきのことなんだけど・・・」

「さっきのこと？なんか、あったのかい？フェイト」

「うん、実はさっきアルフが眠っているときに耳と尻尾が出てる所見られちゃって・・・」

「あゝ、そ、そっかあ。見られちゃったかあ・・・」

自分が原因なだけにバツが悪そうに苦笑するアルフ

「でね、そのことなんだけど、実は・・・」

「魔導師なんでしょ？フェイト」

「「!？」」

カナタの突然の指摘に私は驚いた。それはアルフも同じようであった。

「え、つと、その、あの・・・」

混乱した私は上手く言葉を紡げなかった。そんな私に更に驚きの事実が告げられた。

『僕も分類的にはその魔導師つてのに当てはまるから気にしなくても大丈夫だよ?』

「「!？」」

彼女は、今なんといった? 魔導師?

私がパニックになっている間にもカナタは言葉を紡いでいく

「っそ、だから、別に気にしなくても大丈夫。



何なら僕のデバイスも紹介するよ？リオン、挨拶よろしく」

【初めまして、お嬢さん。私はハイペリオンといいます。以後お見知りおきを】

私はとうとう理解が追いつかなくなり、思わずそのまま挨拶を返していた。

「あ、どうもご丁寧に。フェイト・テストロッサです・・・」

と、そこで正気に戻ったアルフが

「何、呑気に挨拶してるんだい！フェイト！  
カナタ！アンタなに企んでるんだい！？」

「企むって失礼だね、アルフ。僕は事実を言ったまでだよ？」

「理由もなく魔導師が他の魔導師を部屋に入れるわけがないだろ！？」

「はは・・・理由ね、特には無いんだけどなあ・・・」

カナタがアルフに言いつめられて困っているのを見ている内に段々頭が冷静になっていった私は気になる言葉を思い出した。

「カナタ、さつき『分類的には』って言ってたよね？それってどういう意味なのかな？」

そう、カナタは魔導師と言わずに最初に「分類的には」と態々つけて言ったのだ。

ここに疑問を解くカギがあると私は思い質問した。すると

「うん、僕は魔導師ではあるけど、管理局とかの魔導師になった訳じゃないんだ。

亡くなった祖父が魔導師でね。様々なことを教わったよ。

その中に魔導師としての知識と技術があった。ただそれだけだよ」

「じゃあ、私が魔導師だと分かったのは・・・」

「そう、さっきのアルフの姿を見たときに気付いたんだ」

そうだったんだ。なんだかホッとした気がした。

（アレ？何で私はホッとしたんだろう？）

自分でも分からない感情に戸惑っていると、カナタが

「ほらほら、ご飯が冷めちゃうから後の話は食べてからだよ」

と言ってきたので、私もアルフも素直に従うことにした。

憂いが晴れた後のご飯はなんだかとても美味しく、温かく感じた。こんな風に誰かと食事をしたのは久しぶりかもしれない。

私は温かい気持ちを感じながら夕食を食べていった。

フエイトside out

「カナタ、ちょっといいかい？」

「夕飯の時のことなんだけど・・・」

「ん？」

「カナタが何処にも所属していない魔導師で、今は一緒に暮らす大事な人だから

言っておくね。私たちがココに来た目的を」

そういつてフエイトとアルフは自身の目的を俺に告げてきた。一応、知ってはいるけど、ここは知らない風を装った。

「そっか、それがフエイトとアルフの目的なんだね」

「うん」 「ああ」

この流れなら切り出しても問題はないだろう。

まあ、あるとすれば今後、確実になのはと管理局に敵対しなければならぬということだが

今となつてはどうでもいいだろう。既に、進路は決まったのだから。俺はフェイト側につこう。なのはには悪いけどね。

それに、コレはなのはの為でもある。理由は、追々・・・ね。

「それなんだけど、二人が探してるものってコレじゃない？」

俺はそういつて、リオンから二つのジュエルシードを取り出した

「「ジュエルシード?!」」

「なんで、アンタが持つてるんだい!？」

「う、うん」

やはり、気になるよな。フェイトもちやつかり頷いてるし

「拾つた」

だから、俺は簡潔に教えてあげた。

「「へ？」」

「だから、拾ったんだよ・・・道で。発動前だったから封印も簡単だったし  
二つ目に至っては犬の化物に襲われたから撃退して手に入った。それだけだよ」

そういうと二人は信じられないといった顔をしてくれました。ちくせう

「ああ、信じられないよね。僕みたいなひ弱そうな男が二つも入手したなんてさ」

そうやってイジけていると

「えっと、そんなことは・・・」

「いや、ちょっと待ってフェイト、それよりコイツ、いま変なこと言わなかったかい？」

「え？」

「さっき『ひ弱そうな男』って・・・」

「あー！」

こっちをみる二人。それに対し頷く俺……まあ、結果は分かるよね

「ええええええええええ？！」

「カナタ（アンタ）男の子だったの（かい）！？」

「こんなに可愛い顔してるのに……」

やっぱりね、いいですよ。もう、なのは達で慣れたもん。

ええ、『男の娘』ですけど何か？！……別に悲しくなんてないからね！！

・  
・  
・  
ぐ<sup>ん</sup>  
す  
ん

【ああ、とっても可愛らしいですよ マスター!!】

結果として二人から謝罪を受け、ジュエルシードを受け渡し今後の協力を

申し出た力ナタであつたとき（笑）因みにリオンはというと語るべくもない・・・。

「リオンは犠牲になったのだ！！？嘘です」

## 第08話 『確信に変わる疑問』

sideカナタ 場所：月村家上空

あれから、数日。フェイトに協力を申し出てから俺も探索に付き合うようになった。それなりには役に立ててると思う。

今日もフェイトと共にジュエルシードを回収しに来ているんだが（アルフはいないよ）

こっつて、すずかの家だよね。なんか、下の方の庭にぬこ達がたくさんいるし

何より、なのは達が居るんだよ。これには少し驚いたね。

こんなに早くこの場所の回収時期が来るとは……。

確か、なのはは初めてここでフェイトに出会って敗北するんだっとな。

なのはは友達だし、昔、世話になっていたこともあるから本当なら助けて

あげたい所だけど、なのはの為にもここで敗北を知って強くなつて貰わないとね

それに、ここでの闘いで俺が抱いている疑問がはっきりするかもしれないから。

だから俺は

「フェイト」

「なに？カナタ」

「悪いんだけど、今回、僕は静観させて貰うね。  
とはいっても基本的に戦闘に参加しないというだけで  
封印・回収自体のサポートはするから安心して」

「どうしたの？」

「いや、あそこにね、僕の友達が居るみたいなんだ。  
ほら、あのフェレットと一緒に居る栗色の髪をした女の子」

「……女の子」

そういつて、なのはの方に視線を向けるフェイト

「……………」

あの、フェイトさん？なして、そんなにBLACKなオーラを  
出しておられるのでせうか…………？

「フ、フェイト…………？」



「え？あ、いや何でもないよ。  
そっか友達なら仕方ないね。いいよ、今回は私一人で行く」

「ありがとう。それでね、ちょっとお願いがあるんだけど…」

「なに？」

「回収する際になのはに運悪く会ってしまつと、今は問題があるから仮面で顔を隠して行こうと思うんだけど、その時には『ベルゼ』って呼んで欲しいんだ」

「わかった」

ん？ベルゼの意味？

今のバリアジャケットが銀十字の文様が入った黒い二丁拳銃装備でバリアジャケットが、ほぼベルゼブモンを模した感じになっているんだよ。

勿論、あの仮面込みで。脱着自由だけどね。其処からままんま取つてベルゼ。

因みにティマーズとかで出てきた方だよ？機械的な方じゃないからね。

え？安直過ぎる？良いんだよ！！偽名なんてそんなもんだ！！

そんなやり取りをしていたら巨大ぬこが爆誕した！！

つか、デカ？！たしか大きくなりたいて願いがこうして叶ったんだっただか？

それにしたってデカくなり過ぎだろ、赤井さんもビックリだよ！

「ジュエルシールドも発動したようだし、僕たちも向かおうか。フェイト」

「うん」

カナタ side out

フェイト side

カナタに探索を手伝ってもらうようになり、大分探索が楽になった。この前など、わたしとアルフだけでは厳しいかなと思っていた相手を一撃で倒してしまったのだ。もしかしたらカナタの実力は私よりも上なのかもしれない。そんなカナタが今日は静観すると言ってきた。

理由を尋ねると、どうやら、友達がそこに来ているらしい。

そして、カナタは下を指し、教えてくれた。可愛い女の子だった。

女の子

カナタに女の子の友達が居るとわかると何故かモヤモヤした気持ちになってきた。

（なんだろう？この気持ち・・・）

すると、カナタが不安げに声を掛けてきた。

「フ、フエイト・・・？」

「え？あ、いや何でもないよ。

そっか友達なら仕方ないね。いいよ、今回は私一人で行く」

こうして確認を済ませるとカナタはそこで一つ頼みがあるのだという。

なんでも、その友達に姿を見られるのはマズイので仮面で顔を隠し偽名で呼んで欲しいとのことだ。特に反対する理由もないので私とはそれを了承した。

ただ、あの綺麗な顔を仮面で隠してしまうのは正気勿体ないと思う。拗ねたり、笑ったりしたときに凄く可愛いし／＼／＼

そういえば、一緒住むことになった時もよろしくって笑顔で頷いてくれたっけ。あのときの笑顔もさっき言ったのとは違う感じでよかったな／＼／＼

と、そんなことを思いながら思考に耽っていると、ジュエルシードが発動したようだ。巨大な猫がそびえたっていた。カナタの言葉に従って

私たちは現場に向かった。

フ  
エ  
イ  
ト  
s  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t

なのは side

すずかちゃん家の庭でみんなとお話をしていたら  
ジュエルシードの反応を感じました。  
だから、ユーノくんと一緒にみんなの居る場所を後にし  
現場に向かってみたんです。すると、そこには  
巨大な猫さんがいました……。

「ふえ ええええええええええ！？」

ユ一ノくん曰く、『この子の大きくなりたいという願いが正しく叶った』とのこと。

（それにしても、大きくなりすぎだよぉ?!）

と知っている猫さんに向かって金色の何かが当たりました。

飛んできた方向を見るとそこには黒い服を纏った金髪の綺麗な女の子と

紺色の仮面をつけた銀髪の黒い服の子がそこに立っていました。

彼女は私に

「同系の魔導師。ロストログアの探索者か。バルデッシュと同系のインテリジェントデバイス。・・・ロストログア、ジュエルシールド申し訳ないけど、頂いていきます!」

そういつてバルデッシュと呼ばれるデバイスで攻撃をしてきた。それを防ぎながら

「なんで、なんで急に、こんな・・・」

「答えても、たぶん意味がない・・・」

と私の疑問には答えず、攻撃を仕掛けてきた。  
仮面の人は動く気配はなく、ただ、こちらの動きを見ているだけで  
した。

そして、いま彼女と私はにらみ合う形で対峙しています。

（きっと私と同一年くらい。綺麗な瞳と綺麗な髪……だけど、  
この子……）

そう私が思索していると

「……ごめんね」

そう一言言い残し、攻撃を放った彼女。  
攻撃を受けた私はそこで意識が途絶えました…。

なのはside out

カナタside

（原作通り、負けたか。だが、この戦いで俺の疑問は確信に変わったな・・・。）

フェイトの闘いが終わったのでフェイトに代わって俺がいま回収作業をしている。

何故かって？アニメでぬこからジュエルシード取り出すとき電撃食らって

かわいそうだったからだよ。だから、俺が電撃よりは痛くないように魔力ダメージを与え

封印及び回収をしているという訳だ。

え？魔力ダメージ与えてる時点でお前も同罪だ？

・・・ゴメン、どうやってもそれしか方法が無かったんだよ。

全国の猫愛好家の皆様にここで陳謝いたしますです・・・orz

で、回収が終わったのでフェイトに声をかけ、その場を後にした。  
なのはの方も一応目だけ向けてみたがユーノもついてるし問題はないだろう。

ごめんね、なのは・・・。

そつえば偽名頼んだのは良かったけど、今回、俺空気だったよな・・・はあ。

次回頑張ろう。

カナタ side out

なのは side 場所：自宅の自室

今日のことを振り返れば、私はあのあと目を覚ましたのは

夕暮れで日が沈むころでした。ユーノくんがお兄ちゃんたちを呼んで月村家のベットまで運んでくれたそうです。

とりあえずユーノくんを探していて転んで気絶してしまったということに

しておきましたが、目を覚ました時にはみんな心配そうな顔していて…

なんだかごめんなさいの持ちでいっぱいです…

いまはユーノちゃんと自室であの戦闘でのことを振り返っています。

「あの杖や衣装や魔法の使い方。

たぶん、いや間違いなく、僕と同じ世界の住人だ」

「うん。ジュエルシード集めをしていると、あの子とまたぶつかったちやうのかな…」

（不思議なほどに怖くはなくて…）

けど、なんだか悲しいような、そんな複雑な気持ちで…）



それに、あの子の隣にいた紺色の仮面をつけた銀髪、黒服の子。  
性別までは分からなかったけど背格好からして  
恐らくあの子同様、私と同じ年くらいの子。  
あの子とも闘うことになるんだよね……。

（……銀髪の子。

そういえば数年前までウチで家族同然に暮らしていた男の子……）

彼はいまどうしているのだろうか。  
何故だか無性に会いたい気持ちにかられるのですた。  
カナタくん……。

## 第09話 『欠けているモノ、芽生えるモノ』

カナタside場所・温泉地

なのはがフェイトに負けた日から数日。

俺はいま、フェイト、アルフと共に温泉地に来ている。

ここにジュエルシードの反応があるのだ。

まあ、場所は原作知識で分かっているから

発動前に回収しようと思えば回収できるんだけど

今回はあえてそれをする気はない。

何故ならここで、なのはとフェイトの第二ラウンドが待っているからだ。

俺はこの戦闘に関しては参戦する心積もりでいる。理由？

それは始まってからのお楽・・・しくはないね。まあ、この世界に合った

言い方をするのなら、少しなのはを教導しようかと思ってね。

具体的な内容は時期が来ればわかるよ。それよりも・・・

「なあ、なあ、フェイト 一緒に温泉入ろうよ。気持ちいいぞ」  
「？」

「だ、だめだよ、アルフ。私たちは遊びに来たんじゃないんだから・

・・」

うん。見て分かる通りアルフがフェイトに駄々をこねているのだ。  
まったく欲求に忠実な所はまんま獣だな。

「いいじゃんか」。それにい……。」「（にやり

ん？なんか不穏な気配が……

「ここには混浴もあったから、カナタと一緒に入れるんだぞ」

「！？」（この時、フェイトに電流が走る！！

「ちよっ！？／／／／何言って……」

「カ、カナタとお風呂……。こ、ここ混浴／／」

「なあ？だから一緒に行こうよう、フェイト」

「あ、あうう／／」

「フェイト、惑わされるな！それは孔明の罠だ！」

「ん？カナタ？お前はアタシたちと一緒に入りたくないのかい

「？」

こいつ、ニヤニヤしながらトンデモナイ内容振ってきやがった!!  
振るのはその無駄にモフリがいのありそうな尻尾だけにしとけ! 駄  
犬め!!

俺だって一応男なんだぞ!! どんな反応するか分かってるだろうに・  
・!!

「う、うつう・・・／／／／」

「んゝゝ?」

「ぼ、僕は、ジュエルシードの探索してるから二人で入ってきな  
よ／／／／」

「え・・・?」

いや、フェイトさんそこで物凄く残念そうな顔しないでください!

「ほゝら、フェイトも入りたいってさ。カナタゝ?」(にやにや

つく!ここで負けたら!負けたらっ!!

・・・何か糸口は!?武器になるものはないのか?!

【マスター!!】

おお！！最近、出番がなくて空気になりかけてたリオンじゃないか！！

「なんだ、リオン?!」

俺は一縷の望みをリオンに託し聞いてみた。

【風呂に行く際は是非私も連れて行って下さい!!

マスターのお姿を刹那の瞬間までメモリーに焼き付けます!!】

望みは碎け散った・・・やはり、リオンはリオンだったか・・・  
つく。

「カ、カナタ・・・」

!?

こゝこれは数年前になのはが困った時の最終手段で使っていた手じゃないか!!

やめて!!そんな目で俺を見ないで?!俺のライフはもうゼロよ!?

「う、ゴメン!!//」

「あ、カナタ?!」

「あつちやく、弄りすぎたか・・・」

そつ言い残し、俺は脱兎の如く掛け出した!!

だって、このままいくと混浴コースまっしぐらだったんだもん！  
あと、アルフ！オマエ、後で覚えとけよ？  
お前の今日の晩飯から肉を抜いてやるからな！！

【随分と地味な仕返しですね・・・効果はありそうですが・・・】

その後、アルフがカナタに半泣きで謝罪してきたのは言うまでもない。

カナタ side out

フェイト side

行っちゃった・・・。べ、別に私はカナタとだったら一緒に入っても良かったのに／／／  
でも、カナタも何処かに行っちゃったし、私もジュエルシード探しをしないとね。

「アルフ、私たちはいいから、アルフは入ってきていいよ。  
ジュエルシードの探索は私とカナタでやっておくから」

「えゝ、でもさゝ「アルフ」ハイ。じゃあ、フェイト。  
アタシは行くけど何かあったら連絡すんだよ。アタシはフェイトの  
使い魔なんだから」

「うん、ありがとう。アルフ」

そういうと、私は何処かへ行ったであろうカナタを探しにここでアルフと別れた。

そして、しばらくして

腰を掛けられそうなくらい太い木の幹にカナタは座っていた。私はカナタの隣に腰をおろし話しかけた。

「カナタ」

「ん？ああ、フェイト。温泉には行かなかったの？」

「うん。流石にカナタだけ置いては行けないからね」

「そっか。それとジュエルシードの大体の位置は把握できたよ。あとは時間を待つだけって感じかな」

「すごい、もう見つけたんだ・・・」

「まあね、だから今はここで休憩中だよ」

カナタは疲れていたのか、それだけ言うと目を閉じ眠りについた。私もカナタに倣って目を閉じ、静かな時間を過ごしていた。

すると、アルフから念話が入った。

（「あゝ、もしもし、フェイト？こちらアルフ」）

私は目をあけ、返事を返し、要件を聞いた

（「ちょっと見てきたよ、例の白い子」）

（「どうだった？」）

（「うん、まあ、どうってことないねえ。フェイトとカナタの敵じゃないよ」）

（「そう。こっちもちょっと進展。次のジュエルシードの位置が  
分特定

出来てきたから今夜には捕獲できると思うよ。カナタも手伝ってくれたから」）

（「うん、ナイスだよ！フェイト！流石、私のご主人さまとカナタだね」）

（「うん、ありがとう。アルフ。夜にまたおち合おう」）

（「はい」）

そうして念話を終えた私は時が来るのをカナタと共に待っていた。



フェイトside out

そして、夜になり、ジュエルシードが発動した。  
カナタ達もそれを現場で確認していた。  
フェイトがそれに伴い封印を開始し封印が終わるタイミングに  
なのはとユーノが現場に到着した。

「あ、あれは・・・」

なのはは、フェイトがジュエルシードを回収する瞬間を目撃し声を  
発する。

そして近づいてくる、なのは。それに気付いたアルフが言う。

「あらあらあら、子供は良い子でって言わなかっただけか？」

それに対しユーノが問う。

「それをどうするさか」と。アルフは言う、「答える義理はない」  
と。

一通りの問答をした後、アルフが本来の姿に戻り、なのはに飛びか  
かる

それをユーノが防ぎ、なのはを守る。

だが、アルフはそれでは止まらず再び襲いかかろうとした。  
これに対し、ユーノは転移魔法を用いて自身とアルフを別の場所に飛ばした。

「強制転移魔法、良い使い魔を持っている」

そう言うフェイトに対し、なのはは答える。

「使い魔じゃないよ！私の友達！！」

そして、にらみ合う二人。フェイトが先に口を開いた

「で、どうするの？」

「話し合いでなんとかなるってこと、ない？」

「私はロストログアの欠片を、ジュエルシードを集めないといけない。」

そして、貴女も同じ目的なら私たちはジュエルシードを賭けて戦う敵同士ってことになる」

「だから！そういうことを簡単に決めつけない為に話し合いって必

要なんだと思う!」

「話し合うだけじゃ、言葉だけじゃ、きっと何も変わらない……  
伝わらない!!」

その言葉を皮切りに開始される二人の闘い。攻防を繰り返しながら  
なのはが言う。

「でも、だからって……賭けて。二人のジュエルシードを一つ  
ずつ」

なのはの言葉を断ち、フェイトは言う、己がジュエルシードを賭け  
ると……

戸惑うなのはを余所に攻防は続く。

場所は代わり森の中      二匹の獣が森を駆ける

「チヨロチヨロ、チヨロチヨロ、逃げんじゃないよ!!」

アルフは叫ぶ。これに対しユーノは問う。

「使い魔を作る程の魔導師が何故こんな世界に来ている！？  
ジュエルシードについて、ロストログアについて何を知っている！  
？」

「ゴチャゴチャ、うるさいッー！」

ユーノの問いを無視し、飛びかかるアルフ。こうして二匹の獣が争うさなか

二匹の友人であり、主である二人の魔道師の闘いも激化していた。

フェイトのサンダースマツシャーに対し、デイバインバスターをぶつけることで、それを呑みこみ、そのままフェイトを攻撃するのは。

そんな二人の闘いを自身も戦いながら見上げる二匹の獣。

「なのは・・・すごい・・・！ー！」

「でも、甘いね・・・」

「同感だ」

アルフの言葉に応えるように、その声は聞こえた。

カナタ side

はじまったか。

俺はフェイトがジュエルシールドを回収し始める前から

既にバリアジャケットを展開していた。今回は顔を隠す必要もある為前回同様の二丁拳銃装備の紺色の仮面をつけた状態で傍にいた。

フェイトとアルフには偽名の事や諸々の事情を話してあるので

正体がバレる心配はない。そして、俺は前回同様、二人の闘いを観察している。

「・・・そろそろだな」

二人が互いの技を放ち、気が逸れているところを見計らって、なのはに接近した。

そして接近する際に聞こえた二匹の言葉に応えるように俺はつぶやいた。

「同感だ」

カナタ side out

なのは side

私はいま金髪の黒い魔導師の子と戦っている。  
闘いが進むにつれ魔法の威力も次第に上がってくる。  
そんな中、彼女が先に技を放った。

「サンダースマッシャー！」

私も向かい打つべくレイジングハートで技を放った。

「デイベインバスター！」

すると、互いの技は拮抗した。

だが、私はそこから技の出力をあげ、彼女の技ごと呑みこんだ。  
そんなときに背後から声が聞こえた

「同感だ、戦闘中に周囲の警戒を怠るとは……」

！？

私は失念していた。相手は彼女だけではないのだ。

そして技の発動後で気が抜けていた私は

仕留めたと思った彼女に自分の更に上空から、こちらに急接近され背後に現れた仮面の子と挟み込むようにデバイスを突き付けられてしまった。

すると、私の危険を察知したレイジングハートが彼女にジュエルシールドを差し出した。

私は驚き、言葉を発していた。

「レイジングハート！？何を・・・」

「きっと主人思いの良い子なんだ」

彼女はそういうと自身のデバイスでジュエルシールドを回収した。

「っあ・・・」

彼女は回収し終わるともう一人の魔導師と自身の使い魔に声をかけた。

「帰ろう、ベルゼ、アルフ」

「ああ」

「つつつ、流石、私のご主人さまとベルゼだね　んじゃね、おチビちゃん」

私は彼女たちを引きとめていた。

「待って!!」

「私たちの前にもう現れないで、次に会ったらもう止められないかもしれない」

「名前、貴女達の名前は!!」

「フェイト、フェイト・テストロッサ」

「ベルゼ」

「あの、私は」

私が名乗ろうとした時、彼女達は飛び去って行ってしまった。ただ一人、仮面の子を残して・



・・。

なのはside out

カナタside

俺はいま回収を終え帰還するフェイト達を余所に、なのは達の前に立っていた。

そう、俺は今回の闘いを通してなのはに伝えたいことがあったのだ。だから、それを伝えるべく、なのはに声をかけた。フェイトには先に帰るように念話で伝えた。

「おい」

「ふえ？えっと、ベルゼくん・・・だよな？」

「ああ」

「あのね、ちょっと私とおh」お前、今日の戦闘で負けた理由が分かるか？」え？」

俺はO H A N A S Iフラグは勘弁願いたいので  
言いたいことを言う為に早々になのはの言葉を断ち、本題に入った。

因みに口調を変えているのはバレない為の自演であり  
仮面にかけている魔法で声も変えている。

「負けた、理由・・・」

「よく分からないって顔だな」

俺はそういうと自分のデバイスを、拳銃の銃口をなのはに向けた。

「!？」

驚く、なのは。それは当然だと思う。バリアジャケットを着ている  
とはいえ

デバイスを構えていない状態で行き成り銃を突き付けられているの  
だから。

ある意味、さつきフェイトと俺に負けた時の再現になっている。

「な、なにを!？」

ユーノが騒いでいるがいまは関係ない。このあとが大事なのだ。邪  
魔はさせない。

「バインド!？」

コーノを時限解除式のバインドで動けなくした後、再び、なのはに声をかける。

「お前、デバイスには非殺傷設定と殺傷設定があるのは知っているか？」

俺の問いに対して怯えながらも頷くのは。怯えている姿はあまり見たくないのだが

これが言いたいことに直結しているのだから仕方がない。  
肯定を確認した俺はさらに続ける。

「いま、お前に突き付けているコレはその殺傷設定になっている」

ビクッ

俺のこの一言にさらに恐怖を感じたようだが、どこか「冗談だろう」という

甘い考えが見てとれる。だから俺は構わず引き金を引いた

バン!!

そして、その銃弾はなのはすぐそばにあった木を貫通し粉碎していた。  
ペタンッと腰を抜かすのは。泣かなかっただけ凄いと思う俺がいる。

「嘘じゃなかったろ？これがお前の居る世界だ。

お前には圧倒的に覚悟が足りない。お前が何を思っこの世界に入ってきたのかは

知らないが、さっきの闘い、場合によってはこういうことで死ぬこともあるんだ。

もし、まだ、ジュエルシードを探すというなら、これを理解し覚悟しろ。

傷つけ、傷つけられ、場合によっては命を奪う。逆もまた然りだ。

それを覚悟しなければ、お前はいずれ命を落とす・・・言いたいことはそれだけだ」

それだけ言つと俺は腰を抜かし動けない、なのはとバインドで動けないユーノを

余所にその場を離れた。

カナタ side out

なのはside

私はいま恐怖している。自分のいるこの世界に・・・。

先ほどベルゼと名乗った子に話しかけられた時のことだ。  
突然、話しかけられた。

私は聞きたいことがあったから、質問しようとした。  
だが、それを聞く前にベルゼくんから質問を受けた。

「お前、今日の戦闘で負けた理由が分かるか？」

私は、最初、自分に技術がたりないとか、未熟だからとか  
そのレベルで考えていた。でも、実際に求められていた答えは違っ  
た。

もって根本的なものだった。

『覚悟』が足りない

自分が居る世界がどんな世界で  
自分の持つ力がどんなもので、どんな可能性があるのか。

それを、直に教えられた。怖かった。あまりの恐怖で腰を抜かしてしまった。

そしてベルゼくんは用は済んだと言わんばかりにすぐに何処かへ行ってしまった。

そして動けるようになった私は今日あったことを旅館に戻った後、思い返していた。

今回教わった『覚悟』。確かにこれは今までの自分に欠けていたものだったろう。

だけど、私はもう学んだ。実際に恐怖したことで理解もした。だから

（私はこれからもジュエルシードを集める、自分の意思で、自分の想いで……）

今回、こんなことをしたベルゼくんに恐怖を覚えたが、あの仮面から覗く蒼い瞳は

まるでカナタくんのように思え、もしかしたらと思い、そう思うと恐怖は消えていた。

最後に残っていたのは、新たな決意だけだった。

## 第10話 『思わぬ誤算』

カナタ side 場所：夜の市街地

温泉地での一件から数日がたった。

あれからも俺たちはジュエルシード探しを続けているが未だに当たりを引けず仕舞いになっている。

そこで、今夜はこの町の周辺に大規模な魔力流を打ち込んで強制発動させてしまおうという作戦に出た。

（強制発動ね、確か、その時、なのはが近くに居てフェイトと取り合いになって暴発させるんだったか…）

まったく以て面倒なことを・・・と思ってしまう。

まあ、原作と違い、ここには『俺』が居るんだ。

わざわざ、原作通りにフェイトに傷を負わせる必要もないだろう。

と、思考していたら、どうやら時間が来たらしい。

フェイトとアルフがやってきた。

「それじゃあ、予定通り、少し乱暴だけど魔力流を打ち込んで強制

発動させるよ」

「ああ、待った。それはアタシが、いや、僕がやるよ」え？」

「大丈夫、カナタ？コレ結構疲れるよ？」

「そうだよ、だからコレはアタシにまかせておきなつて。

カナタだってフェイトに負けないぐらい無茶してるんだからさ」

「大丈夫だよ、フェイト。それにアルフ、キミはフェイトの使い魔だろ？」

恐らくこの行動でジュエルシードは発動するだろうけど、同時になのはも

ここに向かって来る。その時、フェイトを効率よくサポートできるのは

キミの方だろう？だから、僕に任せて」

「カナタがそういうなら良いけどさあ、あんまり無理するなよ？」

「うん、本当無理しちゃダメだからね？」

「はは、二人とも心配性だなあ。大丈夫だよ。ただ代わりに、なのはの相手を

フェイトにお願いしたいんだけどいいかな？前回は目的があったから参戦したけど

なるべくなら戦いたくないんだ」

「わかった、まかせて。カナタは打ち込み終わったら休んでいていいからね」



「ありがとう。じゃあ始めようか」

俺はそういうと最近頻繁に使っている  
バリアジャケットを展開し、しつかり仮面も装備した。  
そして、藍色の魔力陣を展開させ、強制発動を開始した。  
すると変化はすぐに訪れた。

「見つけた！」

「ただアッチも近くにいたみたいだあねえ」

やはり、なのは達も近くにいたようで広域結界が張られていた。  
おそらくユーノだろう。

「早く片付けよう！バルデッシュ！」

【シーリングモード、セットアップ】

フェイトが封印体制にはいると

金色の光が放たれジュエルシードの所まで伸びていった。

封印は無事完了するように思われた。

だが、俺は知っている、この後の展開を……。

反対側からもピンク色の同系の光が伸びてくる。なのはである。

二人の魔力は拮抗していた。互いに出力を上げるがやはり拮抗した  
ままだ。

二人は回収を中断する。

「なのは！確保を！」

「そうはさせるかい！」

ユーノが叫び、アルフが妨害に出る。それをユーノが防ぎ、なのはを守る。

フェイトは動かず、なのはを見つめていた。

そして、なのはがフェイトに話しかけた。

「この間は自己紹介出来なかったけど・・・

私、なのは！高町なのは！私立聖祥大付属小学校3年生」

【サイズ・フォーム、セットアップ！】

なのはが自己紹介をするもフェイトはそれに耳を傾けず、なのはに迫る。

そして、暫く二人の攻防が続き、再びなのはが話しかける。

「フェイトちゃん！」

「！？」

突然の呼びかけに戸惑うフェイトを余所になのはは言葉を紡ぎ続ける。

「話し合うだけじゃ、言葉だけじゃ何も変わらないって言ってたけど……だけど、話さないと　言葉にしないと伝わらないこともきつとあるよ!!」  
ぶつかり合ったり、競い合ったりするのは、それは仕方ないのかも知れないけど  
……だけど！　何も分からないままぶつかり合うのは　私、嫌だ!!」

その必死な呼びかけはフェイトの動きを止めた。

「私がジュエルシードを集めるのはそれがユーノ君の探し物だから……ジュエルシードを見つけたのはユーノ君でユーノ君はそれを元通りに集めなোসないといけないから！  
私は、そのお手伝いで　だけど！  
お手伝いをする事になったのは偶然だったけど  
……今は自分の意思でジュエルシードを集めて  
自分の暮らしている町や自分の周りの人に危険が降りかかったら嫌だから!!」

これが、私の理由！！」

（どうやら、あの夜の一件は無駄にはならなかったようだね。言葉  
だけなら

原作と同じだけど、その瞳に宿る光の強さが違う。強い意志を持つ  
た良い眼だ）

自身のジュエルシードを求める理由を述べ、フェイトにも自身の理  
由を訪ねるなのは。

「私は・・・」

「フェイト！ 答えなくていい！ 優しくしてくれる人たちのところ  
で

ぬくぬく甘ったれて暮らしているガキンチョになんか何も教えなく  
ていい！

アタシ達最優先事項はジュエルシードの捕獲だよ！！」

答えようとするフェイトをアルフが止める。アルフの言葉で目的を  
思い出したように

フェイトがジュエルシードへ迫る。それを見たのはも負けじと向

かう。

そして、二人は同時に封印を施そうとデバイスを交差させ

ジュエルシードは暴発した

なのはとフェイトは暴発に巻き込まれたが何とか無事であった。

互いのデバイスを除いては

そう、先の暴発で互いのデバイスがかなりの重傷を負ってしまったのである。

バルデツシュの状態を見て、待機状態に戻るよう促すフェイト。

そして、原作通り単体での回収を試みた。

だから、俺はフェイトの手を取りそれを止めた。

「え？ベルゼ？」

「デバイスなしでは危険だ、ココは俺がやる」

俺はそう言つと戸惑うフェイトを余所に回収を開始する

「リオン、回収を頼む」

【了解です、マスター】

そして、回収を行っているのがリオンの様子がおかしい

「どうした？リオン」

【・・・申し訳ありません、マスター。現在の魔力量では回収は不可能のようです】

なに？・・・って、そうか今ランクA A +で止めてるから魔力流を打ち込んだ影響で魔力残量が厳しいことになってるのか。魔力流にかける配分を間違ってたかな？

仕方ない、ここで少し設定を調整しなおすか。なのは達がA A A クラスだったよね。

なら、俺は全体をその上のSくらいにしておくか。どれ。

「これでどうだ？リオン」

【問題ありません、回収します】

そうして、俺は回収を終え、フェイトの傍へと駆け寄ろうとし

フラッ

あれ？体が・・・

「回収完了した・・・ぞ・・・」

そのまま意識を失った。

カナタ side out

フエイト side

バルデッシュが私のせいでかなりのダメージを負ってしまった。  
だけど、母さんの為にもアレはここで回収する！  
私はそう思い、単体での回収を試みたが      ベルゼに止められ  
た。

「え？ベルゼ？」

「デバイスなしでは危険だ、ココは俺がやる」

そう言っただけは私の代わりに回収作業を行ってくれた。  
途中、様子がおかしかったが何かあったのだろうか？  
回収を終え、ベルゼがこちらに戻ってくる。

ふらつきながら

え？

「回収完了した・・・ぞ・・・」

言い終わると同時に倒れそうになるベルゼ

「ベルゼ!?!」

私は急いでベルゼに駆け寄った。アルフも異変に気付きやってくる

「アルフ!ベルゼが!!」

「お、落ち着きなよ、フェイト!とにかく回収は終えたんだ。  
ベルゼの様子も気になる。いまは早く撤退するんだよ!」

「う、うん」

そうして私は急いでアルフと共にベルゼを連れてその場を後にした。



## 第11話 『邂逅、そして切なる想い』

side 場所：カナタの自宅

ジュエルシードの回収後、突如、倒れてしまったカナタ。フェイトとアルフは急ぎ、自分たちが拠点とするカナタの部屋へと戻った。  
今はバリアジャケットは解除され、自室のベットにカナタは横たわっている。

「カナタ！しっかりして、カナタ！」

「落ち着くんだよ！フェイト！  
叫んでいたって意味がない！まずはカナタの容体を調べるんだよ！」

「で、でも、どうやって？」

「あ………」

言葉に詰まるアルフ。確かにアルフがフェイトに言った事は正論なのだが

フェイトの言葉もまた正論なのである。自分たちに医療の知識は無い。

病院へ行こうにも、この近くに病院はない。容体が分からない以上下手には動かせないのである。すると声が聞こえた。

【私ならマスターの容体を調べることが出来ます】

声の主はリオンであった

「え？」

「リオン、アンタ、調べることが出来るのかい！？」

「はい。私にはそういった機能が備わっておりますので」

アルフの言葉を肯定するリオン。

リオンは曲がりなりにも神が造ったデバイスである。  
その為、他機には無い多様な機能が搭載されており  
その中に『神査』という機能がある。

これは、自分や相手の状態を検査する機能であり  
調べられる対象に例外は存在しない。

まさに『検査における神』といえる機能である。

カナタ自身もフェイト達と行動する間にこの機能の存在に気付き  
定期的に検査をしていた。

「じゃあ、早く調べておくれよ！」

「お願い、リオン……」

【了解しました。

ではフェイト嬢、私をマスターの所まで運んで頂けますか？】

「わかった」

リオンの言葉に頷き、ベットに横たわるカナタのもとへとリオンを運ぶフェイト。

すると、リオンによって無数の環状物が形成され、カナタを包むようにして

神査が開始された。すると結果はすぐに判明した。

「リオン、カナタの容体は……」

「どうなんだい!？」

【……疲労です】

「へ?」「」

【ですから、疲労と申し上げました。

マスターはこの所、神査を怠っており、日々蓄積された疲労に気付かず

それに加え今回の広域魔力流放出、ジュエルシードの回収。

それらが、自身の、子供の体の限界を超えるものだったので倒れてしまったということです。療法としては重度ではないのでそのまましっかり休ませておけば心配はいらないでしょう】

「よかった……」

「まったく、心配させるんじゃないよ。

てか、やっぱり無理してたんだな、カナタのヤツ」

カナタの容体がただの疲労と知り

涙ぐみながら安堵するフェイトと心配しつつも若干呆れ顔なアルフ。

その後、二人はカナタを起こさないよう

静かにカナタの個室から退出していった。

カナタ side

翌日・自室

「……んっ」

（「見知った天井だ・・・」）

【起きて早々、馬鹿なことを念話で言わないでください】

「あ、おはよう。リオン」

【おはようございます、マスター】

「ん？ここは俺の部屋？なんで・・・」

【昨夜のことをお忘れですか？】

「昨夜？昨夜ねえ・・・」

あ、そっか・・・俺、回収を終えた後に行き成り意識を失って、それで・・・」

【はい。その後、フェイト嬢達によってここまで運んで貰ったのです】

「あゝ、やっぱり二人とも・・・？」

【マスターが突然倒れたので、お二人とも大変心配していましたよ】

「そっか、二人には悪いことをしたなあ・・・」

【そう思うならもう少し御自愛ください。

マスターは日々の疲労が原因で倒れたんですよ？】

「あはは、面目ない・・・」

【謝罪なら私にではなく直接御二方へ言ってください】

「そうだね。でも、リオンにも心配かけたからね。ゴメンね、リオン」

【・・・はい／／／】

カナタが心配をかけたことに対し、改めてリオンに謝罪を述べた後カナタの部屋に二人の訪問者が来る。フェイトとアルフである。

「おお、やっと目が覚めたのかい、カナタ」

「カナタ、体の調子は大丈夫？」

「うん、お陰さまで、もうバッチリだよ。  
今日もジュエルシード探し行くんだよね？」

「ダメだよ、カナタ！しっかり休まないと！  
無理しないでって言ったのに倒れるまで無理して・・・  
本当、心配したんだよ？」

「そうだね」  
確かにフェイトの「あの」慌てっぷりは凄かったもんねえ？」（ニヤニヤ

「ア、アルフ／／／」

「そっか、ゴメンね、二人とも。心配掛けたね」

「全くだよ、そう思うなら、もっと自分を大事にしな」

「はは・・・さっき、リオンにも言われたよ。

で、ホント、今日はどうするの？探しに行く？」

「そのことだけど、今日は母さんの所へ報告に行く日なんだ」

手にケーキの箱を持ったフェイトが言う。

（母さん、報告・・・？　っは！・・・プレシア・テストロッサ！）

「だけど、カナタはここだ「僕も一緒に行っていいかな？」え？」

「僕も行ってみたいんだ」

「でも　」

「いいじゃないか、フェイト。カナタも一緒に連れてってあげようよ。」

アタシ達が住んでる部屋の家主様だしさ　」

「でも、カナタは体が　」

「ダメ、かな・・・？」（無自覚の上目遣い

『！？・・・わかった、一緒に行こう／＼／＼／』

そして、三人は『時の庭園』の主、プレシア・テストロッサの元へと向かった。

カナタ side out

side 場所：「時の庭園」

「じゃあ、私は母さんに報告に言ってくるからカナタとアルフはここで待ってて」

「うん、わかった」

「・・・アルフ？」

「・・・ああ」

「うん、それじゃあ、行ってくるね」



そういつて、大きな扉の向こうへと消えてゆくフェイト。  
しばらくしてアルフが口を開く。

「なあ、カナタ。アンタならフェイトを救って      ！？」

アルフが最後まで言い切る前に扉の奥から悲鳴が聞こえた。  
フェイトの声だ。  
すると、カナタがすぐに行動に出た。

「リオン！セットアップ！」

【セットアップ】

カナタはバリアジャケットを展開し  
既に恒例となった仮面を装備しアルフへ命令する。

「アルフ、俺と共に中へ来い！  
そしてフェイトを回収次第、お前は部屋へ先に戻っている！！」

「あ、ああ。でも、アンタはどうするんだい？」

「俺は中の奴に用がある！」

そう言つて二人は扉の奥へと入つていった。

すると、そこには傷つけられたフェイトの姿があつた。

「「！！！」」

「フェイト！！！」

「ア、アルフ？それにベルゼも・・・」

アルフが叫び、フェイトに近寄る。

フェイトは帯状のモノに自由を奪われていたが、カナタによつてそれから解放される。

解放されたフェイトを見てカナタがスキルを用いて回復魔法をかける。

『ケアル』

幸い、そこまで深い傷は負わされていなかった為、

『ケアル』程度の呪文で対応出来た。

フェイトの傷が完全に治つたのを確認してアルフに告げる。

「・・・フェイトを連れて、先に戻っている」

「わ、わかった！すまない！」

カナタの怒気に気圧されたか、短く礼を述べ、  
フェイトを連れてその場を後にするアルフ。

それを横目で確認しながら、目の前の大魔導師に向き合う。  
そして、一言

「デメエ、何してやがる！？」

カナタ side

俺はフェイトの叫び声が聞こえた瞬間、  
分かつてはいたことだったが、アルフを連れ、  
急ぎフェイトの元へと向かった。  
すると、そこには両腕を縛られ、傷つけられたフェイトの姿があった。

俺はすぐさまフェイトの両腕を封じているものを排除し、  
フェイトに回復魔法をかけた。

幸い、まだ、そこまで重傷を負っていなかったので  
初級呪文で治すことが出来た。

だが           それと同時に俺の怒りは頂点に達した。

だから、アルフ達が無事ここを離れるのを確認したら俺の目的の人物である大魔導師に言った。

「テメエ、何してやがる!？」

俺の一言に対し、大魔導師、プレシア・テストロッサが答える。

「他人<sup>ひと</sup>の住処に

勝手に入ってきておいて、随分な言い草ね。貴方、何者？」

「質問に質問で返してんじゃねえよ！

俺は何してるって聞いてんだよッ!!」

「何って、出来の悪い人形に躑をしていただけよ・・・」

（人形？コイツ、いまフェイトの事を指して人形って言いやがったのか!？）

「おい、その人形って

「フェイトの事に決まっているでしょう?」ッ!」

コイツ、何の戸惑いもなく言い切りやがった！  
フェイトはあんなにコイツを想っているのに！  
母親だと慕っているのに！

コイツもある意味被害者かもしれないが  
ココだけは許すわけにはいかない！！

「フェイトはアンタを母親だと思って  
あんなに慕っているんだぞ！？それを  
」

「私はあの子を娘だと思ったことは無いわ」

俺が言い切る前に、そう言い切ったプレシア。  
上等だよ、なら、こっちにも考えがある。  
俺は頭を落ち着かせ、プレシアへ言った。

「私の娘はアリシアだけってか？」

「！？ 何処でそれをッ！？」

瞳に狂気の色を纏わせ、驚くプレシア。  
そして、同時に雷撃の魔法を放ってくる。  
俺はそれを回避し、更に言葉を紡ぐ。

「へえ、その反応、凶星か……」

「ッ!？」

プレシアは自分の失態に言葉を失った。

俺が実際知っているかどうかは置いて置いたとしても先の発言にプレシアが過剰に反応すれば、それは無言の肯定となる。すると

「アリシアは渡さない!!あの子は私が蘇らせる!!」

そして帰るのよ!!あの失われた時間へ!!アリシアと二人で!!だから私は行くの、忘れられし都 《アルハザード》へ!!」

そう叫びながら、先程とは比べ物にならない量の電撃を放ってきた。俺はまたも回避しようとするが何分、思っていたより、量が多い。全ては回避できず、幾つかの電撃を食らってしまった。

「ッガ!？」

(病んでいるとはいえ

条件付きSSランクは伊達じゃないということかッ……!)

「死になさい!!」

そう言ってプレシアは俺に止めを刺そうとするが

突如、血を吐き、咳き込み始めた。

「っぐ、ゴホッ、ゴホッ!？」

俺は態勢を立て直し、再度プレシアへと向く。  
そして言葉を紡ぎ、切り札を使う。

当人達しか知り得ない約束を  
遠い日のアリシアとの約束を

・  
・  
・

「仮に、アルハザードへ到達出来たとして  
フェイトは　アリシアとの約束はどうなる？  
約束したんだろ？彼女と、彼女の誕生日に。  
そして、頼まれたはずだ

妹が欲しい、と」

「!？　　あ、貴方、一体何処まで知って　　ッゴホ、ゴホッ!」

俺に質問しようとするが

余程、身体の具合が酷いらしく最後まで言い切ることなく咳き込むプレシア。

そして少し落ち着いたのか、プレシアが言う。

「・・・そうね、確かに私はアリシアと約束したわ。アリシアの妹をプレゼントするって。

でも、そのアリシアは、もう

「現実を見る！プレシア・テストロッサ！！」

俺はプレシアの言葉を断ち、伝えた。

死者は蘇らないと、不可能であると。

ならば、アリシアの妹とも言えるフェイトを見ると自身に残されたもう一人の大事な娘を愛してやれと。

「・・・娘、か。そんな風に考えもしなかった。

いや認めたくなかったのかもしれないわね。

フェイトを娘と認めることでアリシアが何処か遠くに行ってしまった  
そうね

そんな気がして。でも、確かにフェイトも私の娘ね。

アリシアの妹なんですもの。だけど

「私にはそんなことを言う

資格もなければ、時間も残されていない・・・と？」



「!? 貴方は本当に何でも知っているのね」

「何でもは知らん。知っていることだけだ」

「ふふっ、不思議な子ね、貴方」

「良く言われる」

「名前を聞いても？」

「カナタ・アマギ。」

仮面を付けている時だけは訳あって『ベルゼ』と名乗っている」

「そう、なら今はベルゼと呼んだ方がいいのかしら？」

「好きに呼べばいい。」

ただ、人前で仮面を付けている時はベルゼと呼んでくれ」

「わかったわ。」

さて、今は時間が惜しい。

私には母親としての資格もなければ時間もないけれど  
せめて最期の後始末ぐらいは、きっちり自分で済ませないとね」

「最期まで演じるつもりか？」

「ええ、それがあの子に出来る唯一の罪滅ぼしになるから。  
逝くのは私と・・・アリシアだけでいいわ」

「・・・そうか」

俺はそう言っただけでプレシアと別れた。

場所：カナタの部屋

俺はいまプレシアと別れ、自分の部屋へと戻ってきている。  
そして現在、プレシアから受け取ったあるものをフェイトへと渡していた。

「・・・え？母さんから、私に？」

戸惑いながらも、何処か嬉しそうな表情のフェイト。

「何て書いてあるんだい？」

中身を聞いてくるアルフ。ここまでで、大体分かったかな？  
そう、プレシアから手紙を預かったんだ。そしてその中身は

「・・・うう・・・」

「フエ、フェイト！？何て書いてあつたんだい！？  
何か酷い事でも言ってきたのかい！？あの鬼ババアは」

「違う、違うよ、アルフ。逆だよ・・・」

そういつてフェイトが見せてくれた手紙にはこう記されていた。

フェイトへ

『お土産のケーキ美味しかったわ、ありがとう』

其処に綴られてのは凄く短い言葉。

手紙というには余りに粗末なモノ。

だけど、コレはフェイトが母親に言っただけだった言葉。

出来れば直接聞きたかった言葉だが

コレは手紙とはいえず母から娘へと贈られた言葉

だからこそ、フェイトは喜び、涙した。

短い言葉の中に確かな母の愛情を感じたから・・・

（これで、今日のフェイトは少しだけでも報われたのだろうか・・・）

今回の結末は彼女が望んだことに比べれば、程遠いモノだったろう。けど、それでも・・・。

今はこの小さな幸せをこの瞬間だけでもいいから感じて欲しいと思う。

彼女<sup>フェイト</sup>がHAPPYENDへ至る

その瞬間までの支えとして・

・。

俺が至高のHAPPYENDへと

この物語を導くまでの、せめてもの救いと

して……。

## 第12話 『執務官とのO H A N A S I』

side 場所：海鳴市 市街地 （4月27日PM4時  
10分）

カナタはあの日から更なるやる気を出し始めたフェイトと共に海鳴市、市街地の  
とある屋上に居る。フェイトはバルデッシュにコンディションの状態を聞きながら  
次のジェルシードの存在を感じていた。その傍にはアルフもあり、それを肯定した。

直に発動すると・・・。

そして、ジェルシードが発動する。その気配をカナタ達は勿論のこと、  
未だちゃんとした再開を果たせていない友人、なのはもユーノと共に感じていた。  
二組の魔導師たちは現場である同市内の「海鳴臨海公園」へと集結した。  
すると、そこにはジェルシードを取り込み暴走する強大な樹の化物。  
示し合わせた訳ではないが、なのはとフェイトは同時にに互いの射撃魔法を  
樹の化物へと放ち、コレを撃退する。それに伴い、現れるジェルシード。

二人は封印・回収を試みたが、やはり互いのタイミングは同じ。前回の件もあるので強制回収は無理と判断し、結果、二人は一騎打ちで白黒つける

ことを決める。そして二人の戦闘が開始されようとした。その時、黒の魔導師服に

身を包んだ少年、管理局執務官クロノ・ハラウンがソレを止める。

「ストップだ！ここでの戦闘は危険すぎる！  
時空管理局、執務官、クロノ・ハラウンだ！  
．．」

突然の管理局の介入に戸惑う二人の魔導師。  
二人の使い魔<sup>アルフ</sup>と友人<sup>ユノ</sup>も突然の事に驚きを隠せないでいる。  
そう、唯一人を除いて。

カナタ side

俺はいま物陰から、二人の闘いを観戦している。  
え？サボリ？そんな訳ないでしょ、違いますよ？  
警戒という仕事をちゃんと引き受けていますよ。

（決して、二人の一騎打ちが見たいが為にこの役を名乗り出た訳じゃないからね？ホントだよ！？）

警戒って言葉から分かると思っけど、俺はここに来る前に時空管理局が来る

可能性をフェイト達に指摘しておいたんだよ。恐らく前回の暴発で管理局に

目を付けられているとか何とか言っで。

でも、あの様子だと、信じてなかったんだね。二人とも……。  
本当だったのに……。

でまあ、予想通りというか原作通りクロノくんが来ちゃった訳だけど  
実を言うと俺はそんなに彼が嫌いじゃないんだよね。

一騎討ちを邪魔したことにKYと言わざるをえないけど  
彼自身に関しては悪い印象を持つてはいない。

まあ、頭が少々残念な気はするけど……

（自分の母親の言葉の矛盾に気付けない所とかね……。

彼は良く言っで真面目すぎるんだよ。俺も人の事言えないけどさ。  
で、今回はコレを機に少し接触してみようかと思ひまして、現在  
）

「クロノ・ハラオウンだ！話をk……お前がストップだ」誰だ



!？」

クロノくんの背後を取っちゃたりしちゃってます（笑）

いやさ、遠くからロツクンの兄貴並みに狙い撃つても良いんだけどさ

ライフル持ってるし。

だけど、クロノ、さり気なく魔導師ランク空戦AAA+なんですよ。凄くね？地味なくせに・・・。

因みにこの知識は劇場版DVDの特典から得ている。

死ぬ前に見といて良かったよ、ホント。

で、射撃しない理由はこういう所から来てたりする。

そんな奴、狙い撃つても回避されて即・捕縛ですよ？

まあ、俺のステータスを解放すれば瞬殺出来るだろうけどさ。

前回みたいに疲れてないから平気だし。だけど、倒しちゃ意味がない。

こちらから手を出してはダメなんだよ。悪魔（誤字に非ず）で向こうが先。

だから、今は銃口を彼に向けているだけに留めている訳ですよ。

仮面はしっかりつけてます。

…っと、そろそろ、フェイトとアルフに念話しないとね。

因みに念話漏れはしないように注意してるよ？では、では

（「フェイト、アルフ、聞こえる？」）

（「「!」?・・・聞こえてるよ」「」）

（「僕が彼の注意を引き付けておくから今のうちに多重転移魔法で帰還して」）

（「！！・・・ジュエルシードは、カナタはどうするの？」）

（「ジュエルシードに関しては管理局が出てきた段階で、もう回収は無理だよ。

諦めよう。僕に関しては心配ないよ。捕まっても単身で脱出する術を持ってるし、

あとでまた会おう」）

（「・・・」）

（「アルフも良いよね？」）

（「ああ、プレシアの一件もあるし、アンタの実力に関しては心配してないよ。

撤退に関しても賛成だ。だけど、カナタ。必ず戻ってくるんだよ？アンタだって大事な仲間なんだ」）

（「ありがとう、アルフ。・・・フェイト？」）

（「ジュエルシードは何としても手に入れたい所だけど、いま無理に動いたらカナタが危険に晒されるもんね。

私も良いよ、撤退する。でも絶対帰ってきてね？ここで別れは嫌だよ？」）

不安と寂しさ、様々な感情が入り混じったそんな声。  
だから、俺はさも当然なことのように答える。

（「帰るよ、フェイトの居る所に。必ずね！もちろん、アルフの所にもね」）

（「・・・うん！」）

（「なんか、取って付けた感じが気に入らないけど、  
アタシ達は撤退するよ！行こう！フェイト！カナタも気を付けるんだよ！」）

（「ああ、また後で！」）

そうして、念話を終え、再びクロノに向きあう俺。

「そんなことはどうでも良い。俺はお前に止まれと言っただけだ」

フェイト達が逃げる用意をするのを確認しながら俺は言った。

カナタ side out

クロノ side

僕はいまロストログア、ジュエルシードをめぐつて

まさに闘いを始めようとしている彼女達の元へ割って入った。

「クロノ・ハラウンだ！話をk「・・・お前がストップだ」誰だ！？」

すると、僕や金髪の少女と同じ黒いバリアジャケットを身に纏い紺色の仮面を携えた銀髪蒼眼の魔導師が僕の背後に突如現れた。

（僕がいきなり背後を取られる！？コイツは一体何者なんだ！？）

そう思い、反射的に叫んでいた、誰だ、と。すると仮面の魔導師は言った。

「そんなことはどうでも良い。俺はお前に止まれと言っただけだ」

銃口をこちらに向けた状態で。だから、僕は公務執行妨害として応

戦を開始した。

すると、不思議なことに回避こそするが、こちらに攻撃を加えてこない。

おかしいと思った僕は周囲を見渡す。しまったと思った。

コイツはあの金髪の魔導師の仲間だったんだ。

既に転移魔方陣を整え、転移しようとしている金髪の魔導師とその使い魔。

白の魔導師もそれに気づくが止められないだろう。

だから、僕は牽制の意味で魔力弾を放った。

すると、白の魔導師が突然、金髪の魔導師の前に現れ、叫ぶ。

「駄目！！撃たないで！」

！？

マズイ、まさか魔力弾の軌道上に飛び出してくるとは！

だが、既に弾は放たれた。白の魔導師に当たってしまう。

そう思った瞬間、仮面の魔導師が間に割って入り文字通り盾になった。

その様子に金髪の魔導師も驚いていたが、使い魔に促され、転移してしまった。

僕は、とりあえず仮面の魔導師をバインドで捕縛した。

人助けをした者を拘束するのには抵抗があつたが、これも仕事と割り切り

頭を切り替えた。白の魔導師、彼女の方をみると

突然のことに驚いたのか呆然としていた。

幸い、仮面の魔導師が盾になったお陰で怪我はないようだ。少し安心した。

問題の仮面の魔導師の方をみる。

綺麗な銀髪に優しい色合いをした蒼い瞳が仮面の隙間から見てとれた。

その瞳から感情を読み取ろうとしたが、敵意は感じられなかった。大人しくするつもりようだ。それにしてもと思う。

あの軌道にあった弾と白の魔導師の間に飛び込み

彼女の無事を確認した時に見せたあの様子。

仮面を付けているから表情的には分からなかったが、

安心したような、申し訳なさそうなそんな複雑な感情が見てとれた。本当にコイツは何者なんだろうか？

そんなことを思考していると艦長から連絡が入った。

艦で直に事情聴取をするので僕は白い魔導師とその使い魔拘束した仮面の魔導師を艦に連行した。

クロノ side out

クロノによって艦へ案内されるカナタとなのは達。

途中、ユーノが元に戻ったことでひと悶着あったが、それは割愛しよう。

これは淫獣の仕業である。淫獣ならば仕方ない。

時が進み艦長室へと通される。

そして、この艦の艦長たるリンディ・ハラウンと共に現状の説明、及び確認が行われた。因みにカナタの拘束はクロノの判断と

リンディの許可の下、解除されている。どうやら、なのはを庇ったことで

危険視はされていないようだ。

仮面に関しては顔に火傷を負っているから等と下手な言い訳をし、それを通し、今は仮面を付けた状態で会談に臨んでいる。

そこで述べられたのは、なのはやユーノの責任感ある行動を称賛しつつも

危険であるという管理局員らしいもつともな発言。

カナタ自身に関してはまだ触られていないので

カナタはなのは達と若干距離を置き、部屋の隅で傍聴中である。

途中、なのはが助けて貰ったお礼やら、フェイト達に関しての事やら色々聞いてこようとしたのでなのは達の件に意識が向くように

自身の事は後で話すと言って、なのは達の件について先を促した。  
そして、現在

カナタ side

「では、なのはさんたちの件はこれでいいとして、次は貴方ね」

そういつて、俺について聞いてこようとするリンディさん。

「リンディさん」というのは本人がそれで良いと言うからそう呼んでいる。

そして、その先をクロノが引き継ぐ。

「まず、キミは一体何者だ？あの金髪の魔導師とはどういう関係がある？」

といった感じに質問が次から次へと飛んできたので  
ありのままを話した。・・・一部ぼかしながら。

「俺自身については詮索するな。  
で、彼女に関しては俺の友人だから手を貸しているにすぎん」



「彼女の目的とはなんだ？」

それと、キミ自身の事に関してもしっかり話して貰うからな！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「答える！！」

俺の沈黙に苛立ちを覚えたのか、怒鳴りつけてくるクロノ。

こいつは頂けないな・・・・。

少しO H A N A S Iしようか・・・・。

「あれしろ、これしろ、仕舞に黙秘をすれば命令・・・

お前、何様のつもりだ？俺は罪人としてココに居る訳じゃない。

重要参考人としてここにいる。であるなら、当然、黙秘権もある。

・・・・違つか？クロノ・ハラウン「執務官」殿」

「な！？だが、お前は僕に銃口を向けて公務執行妨害を」

「妨害？俺は、唯、お前に止まれと言っただけだが？」

「だが、管理局員に銃口を向けただけでも十分それに該当する！」

「面白い事を言っな、お前？俺はその時お前が局員などと知らなかったし

友人の邪魔をしたから警告の為、銃口を向けたに過ぎん。

その証拠に俺はお前が自身の名を名乗った所しか聞いていない。

役職名など知らん。さっき知ったばかりだ。

なんならモニタで確認でもしたらどうだ？」

俺がそういうと何処にいたのかエイミィさんが出てきて  
確認を取り始める。すると・・・

「あゝ、クロノくん、どうやらその子の言っている事、本当みたい  
だよ？」

「なんだって!？」

そう言っつて音声付き画像をクロノに見せるエイミィさん。  
そして、その音声画像。

「クロノ・ハラオウンだ！  
話をk「・・・お前がストップだ」誰だ!？」

「な、な、な!？」

音声画像に対し言葉を失うクロノ。  
だが、流石、執務官。まだ食らいついてくる。

「だ、だが、お前は攻撃を「何時、俺が攻撃をした？」・・へ？」

クロノの言葉を途中で断ち事実を告げる俺。  
これに対しクロノは間抜けな声をあげた。

「だから、何時、何処で、誰が、お前に攻撃した？」

自衛の為、回避こそし続けたが唯の一度も攻撃をしてないだろう？」

「あ・・・・・・・・」

思い当たる節があるのか、何かを思い出したように言葉を発するクロノ。

「思い出したようだな。」

なら、もう良いだろう？これ以上、俺が話すことはない」

「つく！」

見事、クロノを文字通りO H A N A S Iで言い負かした俺は少し優越感に浸りながら内容を振り返る。

よくよく考えれば穴だらけなのに何で気付かないかね？  
やっぱりリンディさんとは違うタイプだな。

あの人は何か感心しながらも俺の言葉の穴の多さに気付いていたよ  
うだし。

相手がクロノで良かったよ。

まあ、言うべきことは言ったし、あとは  
そう思っていると  
リンディさんから声がかかる。

「今回は貴方の負けね、クロノ」

「ぐう……」

「ベルゼくん、だったわよね？」

「ああ」

「確かに貴方も重要参考人で黙秘権も持っているわ。  
でも、こちらとしても都合があるの。

悪いんだけど、貴方もなのはさんと同じように  
後日改めて来てもらえないかしら？」

こんなことを言ってきましたよ。リンディさん。

まあ、言い分としては間違っていないよね。

相手の意見を受け入れた上で、自身の意見を相手に受け入れさせる。

こういう狡猾な所を意識的に身につければクロノもさつき見たいな  
ことにならないのに・・・とか考えながら

俺はもう面倒になったので、あの事について指摘しようと思う。  
このまま、なのはが良いように利用されるのは嫌だしね。  
だから俺はこの場で楔を打ち込む。この一言で

「高町の様にか？そうやって俺も利用するのか？」

「「え！？」」

「艦長！？」

「！？」

俺の発言に驚くのはとユーノ。

クロノも気付こうよ、仮にも執務官だろ。

まあ、これで俺の言わんとしている事は伝わっただろう。

あの人は賢しいからね。

今の俺の発言とリンディさんの反応を見れば、なのはも警戒するだ  
ろう。

あとは徐々に手助けしていくさ。だから、今はこの隙に帰ろう。  
彼女達の下へ。

俺は、三人に詰め寄られるリンディさんを余所に多重転移で帰還し

た。

因みにリオンにはスキルを使って時限式の多重転移魔法を掛けてあるから心配ない。実は押収される前に

ぱぱっと細工しておいたのだ。だから、今頃部屋へ着いている頃だ。え？デバイスなしでお前は転移できるのか？楽勝ッスー！俺、チートだし！

カナタ side out

リンデイ side 場所：メインルーム、艦長席

やられた。本当にそう思った。

子供と思って油断していたとしか言えない。

いや、それは言い訳に過ぎないか。

彼に指摘されたことでなのはさん達が要らぬ警戒心を私たちに抱いてしまった。元々、こちらには、そんな思惑は無かったがまったく無いかと問われれば否定は厳しい。

だからこそ、反応してしまった。させられてしまった。そして逃げられてしまった。

彼のデバイスはいったん預かるという形で押収したはずなのに

それもいつの間にか無くなっていた。

あの仮面の少年、ベルゼと言ったか。

彼は一体何者なのだろうか？

こちらが揺さぶりを掛ける前に逆に揺さぶられ  
こうして彼を逃がしてしまった。

クロノとの戦闘を開始するタイミングの巧妙さ。

クロノとの口論では穴が多々あったが

もっともらしい言い分で丸めこむ狡猾さ。

一見、我関せずを決め込んでるようदैいて

周囲の状況はしっかり把握する周到さ。

どれもが容姿に似合わずズバ抜けている。

だからと言って危険視しなければならぬ人物かと言えば  
それは「No」だろう。

クロノも言っていたが、彼の行動に悪意が感じられないのだ。  
まるで、何かを守るようなそんな行動。

なのはさんを庇った件にしてもそう。彼は一体……

「本当、興味が尽きない子ね……」

そう一言呟き、私はお茶を啜った。

リ  
ン  
グ  
イ  
ン  
g  
s  
i  
d  
e  
o  
u  
t



## 第13話

### 『最後の大舞台』

カナタ side 場所：カナタの部屋、自室

前回、クロノを負かした（口論で）カナタです。

いま、俺は大変退屈しております。理由は簡単です。

フェイトさんです。いやさ、クロノとの一件でなのはを庇ったですよ？

アレをフェイトさんも見ていたらしく、帰ってからO H A N A

SIされました。

大変怖かったです。何故かオーラに黒いものも感じたし……。で、現在、日々の様々な前科（行動）によってK I N S I N を食らっています。

なんでも、

「カナタはどうしてそんなに無茶するの！

私がどれだけ心配しても分かってもらえないし

それに（中略）だから、カナタには暫く休暇を

取って貰います。拒否権はありません！」

などと言われ、只今、絶賛暇してます。

誰かと喋ろうにも誰もいないし、フェイトはアルフと共に

ジュエルシードの探索に行ってるからココにいないし。

俺も行きたかったな、探索……。

まあ、じっとしていても勿体ないので

今回はこのK I N S I N期間を有効活用しようと思います！！

そう、俺の修行（力の調整）にあてるのさ！

今でこそA A +で何とかなっているけどみんな基本A A Aクラスなんだもの。

いくらチートな俺でもついていけません！

漫画とかの魔法は、やっぱりまだ上手く扱えなくて危険だし。

そうすると俺自身の強化が必須になるんだよ。

まあその場、その場で必要に応じてステータスを上げ下げすればいいんだろうけど

各ランクでの自身の実力が分からないとおいそれと出来ないんだよ。これまた危険だから。なので……

やってきました！エヴァの別荘！！

フェイト達と暮らすようになってからは一人になる時間が

無かったから使ってなかったけど、やっぱり良いねココは！

どれだけ暴れても問題ないし、バレないし！

という訳で現在絶賛修行中です！！

で、修行を終え……ん？何をしてたか？修行なんだから、そのまんまだよ。

ただ具体的にグダグダ言ってもツマラナイじゃん。だから力ツトします。

それで、現在の俺の実力だけどA A +からA A AランクにUPしたよ！！しかも全体で。

ん？何で、A A Aにしたか？それはね、なのは達との共同回収作業もとい6つのジュエルシードを同時に強制発動させるイベントがこれから来るからさ！

この時、俺が強すぎて全てを終わらせたら、なのはとフェイトの友達（決闘）フラグが

立たなくなるじゃん。だから、二人と同じランクにしたんだ。

よって暫くはコレで固定するつもり。まあ、これでも十分イケるでしょ。

プレシアの雷撃を防げるかは微妙な所だけだね。

それとね、技も幾つか開発できたよ。まあ、殆ど模倣だけど……。

でも威力は俺の方が上のはず！

あとは射撃能力も上がったよ！某翠の兄貴もビックリな程の腕前さ！！

これでクロノも狙い撃てる！！

そんなこんなで修行を終え、K I N S I N も解かれました。

何でも残り6つのジュエルシードのある場所に目星が付いたらしい。

まあ、俺は原作知識で知ってるけどね。

そついう訳で現在フェイト達と海に來ています。

場所：海鳴市の海上 上空

「この辺りでやるの？フェイト」

「うん、この周辺に私が魔力流を打ち込むから、カナタは下がって  
いて」

「いや、僕も一緒にやるよ。独りで広範囲に魔力流を打ち込むのは  
骨が折れるからね」

「え、でも「仲間なんだからさ」う、うん／／／．．．じゃあ一  
緒にやるう」

「うん。アルフはサポートよろしく!」

「了解!任せときな!」

で、原作の広域魔法は無かったけど二人で一緒に強制発動させた。  
すると．．．

クロノside 場所：アースラ艦内

「緊急警報 エマージン・シー !!! 捜査海域で大型の魔力反応を  
感知!」

「何てことしてんの!?!あの子たち!」

警報が鳴り響く中、映し出される現場の映像、そこには

「呆れた無茶をする子たちだわ！」

「無謀ですね、間違いなく自滅します。」

アレは、個人が出せる魔力の限界を超えている！」

「フエイトちゃん、ベルゼくん！」

あの、急いで私現場に 「その必要はないよ」「」

「放っておけば、彼女達は自滅する。」

仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たした所で叩けばいい」

「でも……」

「今のうちに捕獲の準備を」

「了解！」

僕は、彼女らを心配するなのはを余所に指示を出す。  
なのはは映像を見ながらなにか考えているようだ。  
すると、艦長が言う

「私たちは常に最善の選択をしなければいけないの。  
残酷に思えるかもしれないけど、これが現実……」

「でも……」

やはり、納得は出来ないか。まあ僕も納得はしていない。  
だが、理解はしている。ならば、僕は職務を果たすだけだ。  
そう考えているとなのはが動き出した

「え？」

「！！」

「ごめんなさい、高町なのは、指示を無視して勝手な行動を取りま  
す！」

そういうと、なのははユーノの手引きで現場へ向かってしまった。

クロノside out

カナタside

あゝ、しんど！こんなに厳しいのを原作ではフェイト一人でやって  
いたのか・・・  
これじゃ、アルフも心配するよね。などと考えていると、空から

悪戯天使<sup>いたずらてんし</sup>が舞い降りた！！（嘘です、なのはさんとユーノです）

彼女ら曰く、闘いに来た訳ではないとのこと。要約すると「手伝います」だって。

それで、ただいま共同作業中。なのはさんから魔力を貰いました。三人で仲良く分け合いたいらしい。やっぱり、なのははなのはだね。良い意味で。その優しさが心にしみます。

で、今はなのはさんの掛け声の下、三人の魔法が放たれる所です。

「せえの！」

「サンダー……」      「ディバイン……」      「エア……」

「レイジー！」      「バスターー！」      「ブラスト！」

三人の技が放たれ、無事に6つのジュエルシードの封印が完了する。因みに「エアブラスト」は俺の技ね。オリジナルの砲撃魔法。なのはのディバインバスターをイメージしてる。

だから見た目的には藍色のディバインバスターだね。

それで無事封印を終えると6つのジュエル ドがなのはとフェイトの所に現れた。

そして、あのセリフをなのはがフェイトに言う。

「友達になりたいんだ・・・」

「！！」

その様子を見守る、俺とアルフ、ユーノの三人。

すると空から 雷撃が来た。プレシアだ。

来たかと思い、フェイトを守る為に傍に向かう。

「母さん！？」

驚くフェイト

そして、そのフェイトに電撃が降り注ぐがフェイトを突き飛ばし俺が喰らう。

防げれば良かったんだけど、やっぱりAAAじゃ厳しかったです。条件付きでもSSはバネエッス・・・俺涙目。

「ぐっぐっぐっぐっ！！」



「ベルゼ!?」

雷撃を受けた俺は海へ落下するが

アルフさんが助けてくれました。後でお肉をあげよう。

そのまま、ジュエルシードを回収しようとアルフが向かうが  
クロノに阻まれる。(いつ来たんだ?お前)

アルフが原作通りクロノを吹き飛ばすが6つ中3つしか手に入れられなかった。

フェイトがアルフの傍にやってくる。

そして、アルフが自身の魔力弾を海に叩きつけ

目晦ましをした所で俺たちは撤退した。プレシアめ!痛かったぞ!

そして、俺がプレシアの電撃を食らってから数日。

フェイトとなのはの決闘が始まるうとしている。

現場には俺、アルフ、ユーノの三人が居る。

うん。なんか、俺が療養してる内に決闘フラグが

立っていた。で、現在なのはとフェイトが闘っている。

そして、なのはの、あのシーン

「コレが私の全力全開!!!スターライトブレイカー!!!」

.....こええええええ!!!フェイト、生きてるかな!?

なんかアニメで見るよりヤバイよ、コレ!?

なんかもう光が対象を呑みこんでるんだもん、

まさに全力全開、いや全力全壊の威力だよ……。

トラウマにならないと良いな、フェイト。

で、現在、フェイトと俺、アルフはアースラに連行されており、すると、メインルームに通され、その中央画面では管理局員がプレシアを

とらえようとしている所だった。そして管理局員によって発見されるアリシア。

しかし、局員はプレシアに「私のアリシアに触るな」とあっさり撃退されて

しまっていた。それはそうだろう。病んでいるとはいえ彼女は大魔導師だ。

すると、どうやら始まるらしい。最後の大舞台が…。

「もう駄目ね、時間がないの。この程度の数のロストログアではアルハザードに辿り着けるかわからないけど……でも、もういいわ、終わりにする。」

この子を失ってから暗鬱な時間を…。

そして、この子の身代りの人形を娘扱いするのを……」

その言葉に反応するフェイト。そしてプレシアの言葉は続く

「聞いていて? 貴女の事よ、フェイト。」

せっかくアリシアの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけ。役立たずでちつとも使えない、私のお人形」

この言葉を聞いていたアースラではプレシアの過去がエイミィさんによって明かされる。その内容に皆驚き、沈黙する。

「そうよ、良く調べたわね。だけど、ダメね。ちつとも上手くないかなかった。

造り物の命は所詮造り物。失った物の代わりにはならないわ。アリシアはもつと優しく笑ってくれたわ。」

そして、アリシアとフェイトの違いを思い出すように述べていくプレシア。

その言葉になのは「やめて」とつぶやくが止まることは無い。プレシアの言葉に動揺を隠せないフェイト。

そして、最後の一言をプレシアが言おうとするが……

「ふっふっふ、良い事を教えてあげるわ、フェイト。貴女を造り出してから、ずっとね……私は貴女が……貴女が……っ」

言葉に詰まり、涙を流すプレシア。やはり、母親と言うことだろう。原作では言えた一言が言えなかった。それも、そうだ。彼女は元から狂気に満ちていた訳ではない。

元来は優しく、仕事によって娘との時間が取れなくなっている事を気にしたりする家庭的な女性なのだ。

だが、それを彼女の所属する研究機関が許さなかった。

そして悲劇は起こった。上からの命令による危険を無視した強制実験。

それにより、アリシアは事故に巻き込まれ、実験の失敗は彼女によるもの

とされ、居場所を失った。それが、今までの彼女を変えてしまった。だが彼女は取り戻したのだ。本来の自分を。フェイトを娘だと認識することだ。

プレシアの突然の涙に驚く、アースラ。フェイトも驚いている。

「ごめんなさい、フェイト。最期まで貴女を巻き込んでしまつて。私がこんなことを言えた義理ではないけれど、これからの人生は貴女の為に

生きて頂戴。ベルゼ、そこにいるのでしょうか?」

「ああ」

「フェイトの事をよろしくね。この子はアリシアと違って、真面目すぎるから心配なの。でも、私は傍に居てあげられないから・

・  
今までありがとう、フェイト。そして さようなら」

その言葉に涙するフェイト。

すると、プレシアの屋敷内から多数の魔力反応が起こる。そして、現れる傀儡兵。

その様子を見ながらリンディさんは言う。

「プレシア・テストロッサ、一体何をするつもり!?」

「私たちの旅を邪魔されたくないのよ、私は逝くの、アルハザードへ、  
アリシアと共にね。そして、全てを取り戻すの。失われたあの時間を!」

「!?!」

そしてジュエルシードによって引き起こされる次元振。  
プレシアの表情から言葉の意図を理解したリンディは  
次元振への対応を指示しながら更に指示を下す。

「各員、至急持ち場について現場へ急行して下さい!  
私も現場に出ます!何としても彼女を連れて帰るのよ!」

そこからの対応は実に迅速なものであった。  
原作通りの割り当てでプレシアの居る場所まで辿り着く。  
ただ、違つとすれば最初の傀儡兵の群れを  
俺がエアブラストで屠つてクロノの見せ場を奪ってしまったこと

くらいだろう。だが、そのあと同じように団体さんが来たので今度こそクロノに譲った。

そして俺たちはクロノと別れ別行動をとる。

するとデカイのが数体現れた。だが、ココには既にフェイトが居る。原作と同じく合わせ技で難なく撃退。勿論俺も参加したよ？

そして、フェイトとアルフ共に奥へと進む。

すると、クロノが叫んでいた。あのシーンである。

そしてフェイトがプレシアに歩み寄り言葉を紡ぐ。

「母さん」

「何をしに来たの？

消えなさい、フェイト。もう貴女は関係ないのだから」

「貴女に言いたいことがあってきました。私は       アリシアにはなれません。       」

貴女が造った人形なのかもしれません        だけど私はフェイト・テスタロッサは        」

貴女に生みだして貰って、育てて貰った貴女の娘です」

「・・・・・・・・・・」

「だから、私は世界中の誰からも、どんな出来事からも貴女を守る私が貴女の娘だからじゃない、貴女が私の母さんだから！」

「・・・・・・・・ッ！

こんな私をまだ母と言ってくれるのね。こんなことなら、もっと早く  
く  
ー

フェイトが、言葉を述べながら手を差し出す。  
その言葉に対し言葉を紡ぐ、プレシア。だが

突如、『時の庭園』が崩壊を始めた。

そしてフェイト達の居る場所にもすぐに影響はあらわれた。

彼女達の　プレシアとアリシアの生体ポットがある足場が崩壊した。

落ちていくプレシアとアリシア。だが、ココには俺が居る。そうはいかない！！

そういつて俺は行動を開始した。

カナタ side out

フェイト side

母さんが何かを言おうとした時、母さんと  
アリシアが入った生体ポットの足場が崩壊した。  
落ちていく母さん。私は叫んでいた。

「母さん!!」

私は手を伸ばそうとするが、アルフに止められて届かない!!  
嫌だ!!こんな所で私は母さんを失いたくない!!

まだ、直接、母さんの口から正式に娘だと認めてもらっていない!!  
誰か、誰でもいい!!母さんを助けて!  
そう思っていると、私の横を駆ける人影

いつも、私を助けてくれた人

いつも、無茶をして私を困らせた人  
いつも、私の傍で微笑んでいた人

その彼が母さんへ向かって駆けていく

「ベルゼ!!」

「アルフ!今から生体ポットをそっちに飛ばす!しっかり受け取れよ!!」

そういつてベルゼは完全に落ち切る前に母さんを抱え、  
自身の魔力変換資質である風を用いてこちらにアリシアが入った生体ポットを



飛ばして寄こす。それをアルフが受け止める。

そして、母さんを抱えながら、ベルゼがこっちに歩み寄ってくる。

「母さん!!」

私はすぐさま母さんの傍に駆け寄った。

「ゴメンね、フェイト。」

私をもっと早く貴女を娘だと認められていれば、こんなことには  
ッ!？」

突然咳き込む母さん。吐血している!?

私は驚いた。母さんは体を病んでいたのだ。

だが、治療しようにもココでは出来ない。

余程、酷かったのかその後母さんは倒れてしまった。

私たちは崩壊に合わせてこちらにやってきたのはと共に

母さんたちを連れて、崩壊していく『時の庭園』を後にした。

第14話 『よろしくね』 【無印編 完】

side

『時の庭園』の崩壊後、ジュエルシード事件も終息を迎えつつあり今はその事後処理にアースラの管理局員達は動いている。

フェイト達の処遇については、まだ決まっていない。

プレシアも身体を病んでいることからアースラの医務室で治療を受けている。

医務官に言わせるともう手遅れでプレシアの死期も近いうちに訪れるだろう

との見解を示した。アースラ内で軟禁状態で身柄を保護されているフェイトは

母に会う為に艦内の医務室を訪れていた。

フェイトside

私はいま母さんのいる医務室にいる。

「フェイト、こっちへいらっしやい」

母さんに呼ばれ、近くに寄った。すると母さんからこんなことを言われた。

「私はもう長くはないわ。本当なら私の娘である貴女ともっと一緒に・・・」

親子として生活したかったけど、無理みたいね。御免なさい、フェイト」

「え？母さん、いま 私の娘 って・・・」

私は、驚きつつも聞き返していた。

「ええ、私にはもうこんなこと言う資格は無いのだろうけどまだ呼ばせてもらえるのなら、貴女は私の娘よ。」

アリシアの妹で、私のもう一人の大事な娘。フェイト・テストアロツサ」

「ッ！！」

そう、優しく微笑んで言ってくれた。嘗ての記憶に重なるくらいの優しい顔で。

私は嬉しさのあまり母さんに抱きついて泣いていた。やっと母さんに娘だと家族だと

認めて貰った。でも、現実是非情だ。母さんにはもう時間が残されていない。

だが、ふと背後から声が聞こえた。ベルゼだ。

「よう、お二人さん。母娘の和解は済んだか？」

「ええ。お陰さまで。これでもう、思い残すことはないわ」

「そうか・・・」

そう言うと同時に仮面を外すべし。いや、もう外しているならカナタか。

「だけど、僕は認めませんよ、プレシア・テストロッサ。貴女にはまだ生きて貰います。フェイトの為に、そして、アリシアの為に」

「でも、私には時間が・・・」

「僕には貴女が治せます、アリシアの事に関しても心配いりません」

「!?!?・・・私を治せるの?それにアリシアの事って・・・」

カナタの言葉に驚く母さん。私も驚いていた。母さんが治ると聞いて。

だがカナタの事だ。嘘ではないだろう。

そしてカナタは教えてくれた。アリシアはまだ死んでいないことを。

「それで、貴女はどうしたいですか?」

「・・・生きたいわ。フェイトと共に、アリシアと一緒に」

「分かりました。それでは先ず貴女の方を先に治しましょう」

そういつて、母さんを治療し始めるカナタ。  
よかった、これで母さんは死なずに済むんだ。  
ありがとう、カナタ……。

フエイトside out

カナタside

今回の結果だけを言えばプレシアは事件の首謀者として逮捕される  
ことになったが  
事の発端を突き詰めれば管理局上層部の一部の人間が原因である為、  
プレシアには  
減刑処置が施され、無罪放免とまではいかないだろうが、フエイト  
の件と合わせて  
悪いようにはしないとのクロノ執務官のお言葉を頂きました。まあ  
彼なら大丈夫だろう。

で、その際に突如死んだと思われていたアリシアが普通にアースラ  
艦内で発見された  
ことなどを受けて詰問されてしまった。もちろん、俺の事も込みで。

なので、その時に全てを明かした。まあ、その時に起きた騒動はあえて割愛しよう。

で、今回、正体を隠しながらも犯罪の一端を担ってしまった俺はというと

何故か、無罪でした。どうやら、リンディさんやクロノが今回の事件解決の功労者

として事件に関与していたことは不問になるように色々と働きかけてくれたらしい。

ホント、ありがとうございます。

そして月日が流れ、連絡を受けたなのはと共に、あの感動のシーンの場所に来ており  
現在はクロノ達と一緒に少し離れた所で腰を下ろし、二人を見ながら喋っている。

「まったく、キミには驚かされっぱなしだな」

「そんな驚かせるようなことをしたかな？」

「自覚ないのか、キミは・・・」

プレシアの病を治したり、死んだと思われていたアリシアの仮死化を見抜いて、

それを治療するなど挙げればキリがないだろう。ソレに何だ！？E  
Xランクって！？

キミはバグか何かか！？他にも特殊なレアスキル持ちだし、もう口ストロギアだろ

「キミ!!」

声を荒げながら失礼なことを言ってきたクロノ。

「失礼な奴だね、クロノも。だから身長が伸びないんだよ?」

「何故、身長の話がそこで出る!?それに少なくともキミよりは大きい!!」

「というか、頭を撫でるな!!コレでも年上なんだぞ!」

「え、じゃあ、お兄ちゃんって呼んだ方がいい?」

「な、何で、そうなる!?」

「なんとなく?」

「はあ、もういい。なんか疲れたよ・・・。  
だが、形はどうあれ、キミには結果的に助けられた。ありがとう」

「うん。でも、僕もそっちに事件後で助けられているからお互い様だよ。」

それに僕たち、もう友達でしょ?だから、気にしないでいいよ」

「そうか、そうだな・・・」

そんな、やり取りをしながら笑い合っていると俺に声がかかる。  
なのは達だ。傍に行く。

「どうしたの？」

「カナタくんも私たちのお友達だから三人で改めて友達になろう？  
私はなのはだよ！」

「私はフェイト」

「僕はカナタ」

「」「よろしくね」「」

三人とも笑顔での握手。そして俺たちは友達になった。

その後やって来たフェイトとの別れの時。

「フェイトちゃん、また会えるよね？・・・」

「大丈夫、また会えるよ。そうだよね、フェイト？」

「うん、必ず・・・！」

再会を誓い、再度笑顔で別れを済ませた俺たち。すると、なのはが・  
・・



「そういえば、カナタくん」

「ん？」

「フェイトちゃんと一緒に暮らしていたんだよね？……」

ゾクッ！

「カナタく「ご、ゴメン、なのは！僕、急用を思い出したから帰るね！！」」

「あっ！待ってよー！！私と楽しいO H A N A S I Iしようよー！！！」

これで僕の目指す至高のEDは見れたかな。  
でも、まだ、僕にはまだ改変したい未来があるんだ。  
だから！こんなことで！俺は

ガシッ

！？

「捕まえたの 今日はずちでお泊まりしながらO H A N A S Iなの」

引きづられながら、連行される、俺。ユーノが憐れみの目を向けている。

（つく・・・自身の運命を改変できないとは！コレが世界の抑止力か！？）

抑止力は全く関与しておりません

カナタ side out

果たしてカナタの運命はどうなるのか、それは神（作者）のみぞ知っている。

## 番外編

『ある日のカナタくん!』  
(前書き)

番外編です。今後の展開の布石になります。

## 番外編

### 『ある日のカナタくん!』

? 『衝撃の事実?』

『時の庭園』 崩壊後、リオンとの会話 第13話でのお話

リオン【マスター。私の率直な疑問を聞いても構いませんか?】

カナタ「うん。なに?」

リオン【マスターは危険ということだ】

御自身のスキルをあまり活用しませんでしたよね?】

カナタ「そうだね、十二全のスキルが邪魔したからね」

リオン「・・・マスターは御自身のスキルを

調整・封印・解除することが出来るんですよね?」

カナタ「そうだよ。解除には条件があるけど・・・」

リオン【では、十二全のスキルを封印してしまえば良かったのでは?】

カナタ「・・・あ! その手があったか!」

幼女神のうっかりスキルはカナタにしっかりと伝染していた

ようだ。

？『カナタくんは弟フラグが立ちました』

士朗が治ってからの高町家にて

大体第三話辺り

桃子 「ねえ、カナタくん。男の子なのは分かったけど歳はいくつなの？」

カナタ 「えっと、なのはちゃんの一つ下ですね」

桃子 「あらあら、そしたら、なのははお姉さんね」

なのは 「お姉さん？」

士朗 「そうだぞ、なのは。この家で末っ子に当たるのはカナタくんだからな。」

家族同然に暮らしている以上、なのはがお姉さんだぞ」

なのは 「うん！なのは、カナタくんのお姉さんになる！」

カナタ 「え？あの、ちょっと?!」

なのは「よろしくね！カナタくん」（二二）

カナタ「あううう／＼／」

リオン【ああ！！恥ずかしがるマスターも何て可愛らしい！！】

カナタがクロノ達管理局から逃れた時の話  
降の話  
第12話以

フェイト「もう！心配したんだよ？転移する際にカナタは撃たれるし」

カナタ「はい、申し訳ないです……」（正座中）

アルフ「何だか、こうしているとフェイトがお姉さんで  
やんちゃな弟を心配してるって感じだねえ」

フェイト「え、そ、そうかな……？／＼／＼／＼」

リオン【確かに見えますね】

フェイト「……お姉さん……」

カナタ「あ、あのフェイトさん？」（嫌な予感がする……）

フエイト「・・・カナタ、お姉ちゃんって呼んでみて？」

カナタ「え・・・」

フエイト「・・・お願い・・・」（上目遣いで）

カナタ「つく！・・・お、お姉ちゃん／＼／＼／」

フエイト「！！！？！？」（フエイトに電流がry）

カナタ「お、お姉ちゃん？」（心配で上目遣いになってる）

フエイト「！！・・・ブシャアアアアア！！」（鼻から忠誠心もとい何かが溢れだした！）

カナタが全てを明かした後の雑談にて  
の話  
14話の中で

クロノ「大体、キミは最初会ったときから」

カナタ「なんだよ！クロノだって」

ユーノ「まあ、まあ・・・」

リンディ 「ふむ、なんだかこうしていると  
兄弟喧嘩を見ているみたいで面白いわね」

ク・ユ・カ 「兄弟ですか？」

エイミィ 「そうですね。年齢的なもので言えば

長男がクロノくん

次男がユーノくん

末っ子がカナタくん

と言った感じでしょうか」

なの・フェ 「ああ、なんとなく分かるかも」

クロノ （長男か、確かに弟が居ればこんな感じかも）

ユーノ （兄弟か、僕一人っ子だから少し嬉しいかも）

ク・ユ 「カナタ、試しに兄さんって言うてみてくれないかな」？」

カナタ 「兄さん？」（首をかしげながら）

ク・ユ 「……ああ、なんか、納得した！」

こうして、各地で弟フラグを乱立するカナタであった。（笑）



？『カナタくんに養子フラグが立ちました！』

高町家にお泊まりした際のお話

第14話の後

士朗 「そうか、既にお祖父さんは亡くなったのか・・・」

桃子 「ねえ、アナタ・・・」

士朗 「ああ。カナタくん。良かったらウチの養子にならないか？」

カナタ 「・・・え？」

桃子 「カナタくんさえよければ、どうかしら？」

昔は一緒に暮らしていた訳だし・・・」

なのは 「うん！それ良いと思う　ね？カナタくん！」

美由希 「私も良いと思うよ。」

カナタくん、前から弟みたいなものだったし」

恭也 「俺も賛成だ。無理強いはないが、どうだ、カナタ？」

カナタ 「あ・・・」

士朗「まあ、返事は急がなくていい。考えておいてくれればいいさ」(なでなで)

カナタ「あ、ありがとうございます／＼／＼／」

アリシア復活後、しばらくしてのお話 第14話にて

プレシア「ねえ、カナタ？貴方良かったらウチに養子に来ない？」

カナタ「はい？」

プレシア「フェイトから貴方の話を聞いたわ。

貴方には私たち家族全員が助けて貰ったし、それに若返らせて貰ったし」

(もう身寄りが居ないんですってね。だからお礼がしたいの)

フェイト「母さん！？本音と建前が逆です！」

プレシア「あ、あら、やだ、私ったら・・・／＼／

でも、養子の話は本当よ、どうかしら？」

アリシア「わたしはいいよ！

お兄ちゃんには助けて貰ったもん フェイトも良いよね？」

（何だかフェイトはお兄ちゃんと一緒に居たいみたいだしね）

フェイト「うん、私もいいよ！」（もうっ、アリシア！／／／／）

アルフ「アタシも賛成だ！カナタの飯は美味いからな」

カナタ「みんな……。 （アルフ、お前の中では俺＝飯なのか！？）  
」

プレシア「すぐには言わないわ。でも、考えておいてね」（にっこり）

カナタ「はい／／／／」

因みにカナタによって治療と同時に若返らせたため現在のプレシアはなのはの母親と同じ年くらいに若返っている。

正体を明かした後のアースラ艦長室にて  
第14話の  
中で

リンディ「貴方の件に関しては

こちらで良いようにやっておくから心配なくていいわ」

カナタ「はい。ありがとうございます。

お手数をお掛けしますが、よろしく願いします」

リンディ「うん、素直でよろしい・・・ところで、カナタくん？」

カナタ「はい？」

リンディ「貴方、情報によると既にお祖父さんを亡くして独りなのよね？」

カナタ「はい、そうですね（実際は入院してるだけだけど・・・）」

リンディ「よかったらウチに養子に来ない？」

クロノも何だかんだで貴方を気に入ってるみたいだし、どうかしら？」

カナタ「あ・・・」

リンディ「私もあと一人くらい子供が欲しいなって思ってたのよ」（カナタくん、女の子みたいだから弄りがいがありそうだし）

カナタ「えっと・・・」

リンディ「直ぐにじゃなくて良いわ。でも考えておいてね？」（ニコ）

カナタ「わ、わかりました／＼／／」

こうして、酷く個人的な理由を  
含んだ人物もいたが色々養子フラグが立ったカナタであった。

？『カナタくんはやはりチートでした』

#### クロノとの会話

#### 第14話以降の未来のお話

クロノ「カナタ。キミ、それだけの能力を

持っているなら何か資格でも取ったらどうだ？」

カナタ「もう、持ってるよ？」

クロノ「へ？」

カナタ「いや、なのは家を出てから暇だったから（第五話参照）

祖父の伝手でデバイスマイスターから執務官資格まで取れ  
そうなの全部」

クロノ「・・・は？」

カナタ「いや、だから

」

クロノ「はあああああああああ！？全部！？ウソだろ！？」

僕でも執務官資格は苦労したんだぞ！？」

ありえない……」

カナタ「クロノ、良い事教えてあげるよ。

『この世にありえない、なんてことは、ありえない!』」

クロノ「何、満ち足りた顔して語ってんだよ!?

その顔ム力つくからやめろ!! やっぱりバグキャラだよ、キミは!」

カナタ「失礼な奴だね、クロノも」

リオン【マスター、流石に私もどうかと思いますよ?】

こうしてクロノの苦勞を無視するチートパワーを

発揮するカナタであった。頑張れ、クロノ! 負けるなクロノ!

もっと、熱くなれよ!! by 岡 造

主人公設定 その2 【A・S時】（前書き）

本編は来年の一月中旬予定。卒論とシュウカツの影響で・・・orz  
早くラクになりたい、今日このころ。

## 主人公設定 その2 【A・S時】

### 主人公設定 【A・S時】

〈日常編〉

名前 カナタ・アマギ

性別 男

年齢 8

身長 なのはよりやはり少しだけ小さい。

（フェイト＞なのは＞カナタ）

（クロノ ≡ ユーノ＞カナタ） ユーノにも勝てないw

体重 身長とのバランスは取れている

容姿 銀髪蒼眼で髪は肩にかかるくらいの長さ。ストレート。男の娘（笑）

性格 基本的に無印と同じ。ただ、最近、精神が肉体に引っ張られていて

言動が子供っぽくなってしまっている事が小さな悩み。  
幼女神の「うっかり」スキルが感染してしまっている。

特技 無印と同じだが、色々と資格を持っている。（随時作中で拳



がる)

趣味 無印と同じ。A・S序盤では事件解決後、暇になったのでまた始めている

一人称 ・前述が原因で「僕」で統一している。キレると戻る。

好きなもの・無印と同じ。

嫌いなもの・無印と同じ。

家族構成 ・祖父は既に他界。( 実際は神の部下で、現在療養中  
なだけw)

備考 ・高町、テストロッサ、ハラオウンの三家から養子の話  
が来ている。

弟属性アリ。なのは達を姉や兄と呼ぶようになる。(

番外編参照)

本来なら無印時点でかなり頭が良くなっているので  
学校に行く必要はないが、なのは達の強い要望により  
飛び級扱いで同じクラスに通うことになる。

特技の関係で翠屋の仕事を手伝ったりしている。

〈戦闘編〉

カナタ・アマギ（本来の実力） 能力で調整した状態

|        |      |   |
|--------|------|---|
| 保有魔力量  | （EX） | S |
| 魔導師ランク | （EX） | S |
| 魔力制御能力 | （EX） | S |
| 魔力運用能力 | （EX） | S |
| 魔力収縮能力 | （EX） | S |
| 魔力変換効率 | （EX） | S |
| 瞬間最大火力 | （EX） | S |

魔力光 藍色（紺に近いかな？綺麗な色ではある）

仕様術式 近接では古・近代ベルカ式、遠距離ではミッド式で戦う。

レアスキル 魔力変換資質【炎熱】【電気】【凍結】【風】

所持デバイス【ハイペリオン】

愛称：リオン AI：女性人格 待機形状：銀の剣  
十字ネックレス

詳細は無印編参照。今回はなのは達が姉と呼ばれるようになった事で

付き合いが以前よりも濃くなった。今まで取ったデータ（カナタの）を

なのは達に提供している様子がしばしば見受けられ

る。

一人称は私。カナタはマスターと呼ぶ。マイスターは幼女神。

登録済み装備：古、近代ベルカ式対応騎士甲冑、剣、槍、双剣、ガントレット

外見は黒の騎士甲冑に銀の装飾を施したシンプルなデザイン。

イメージとしては『FF?』のセフィロスの姿に近い。

ミッド式バリアジャケット、二丁拳銃+仮面（脱着自由）

（近接用にダガモード、遠距離用にライフルモード有り）

イメージとしては『デジモンテイマーズ』のベルゼブモンの姿に近い。

備考—————

無印の後半でAAAランクに固定したがシグナムとガチで戦っていたという理由でA'sではオールSランクに設定している。戦闘では同じ理由で基本は騎士甲冑で戦う。

【チートスキル一覧】（詳細は無印編参照）

- 1 Ⅱ 変化なし
- 2 Ⅱ リオンに引き継がれている
- 3 Ⅱ スキルで「調整中」
- 4 Ⅱ 使えるが基本的に使う気はないようだ。（状況によっては使う）
- 5 Ⅱ 使えるが基本的に使う気はないようだ。（状況によっては使う）
- 6 Ⅱ 変化なし
- 7 Ⅱ バリバリ使っている
- 8 Ⅱ 使っている
- 9 Ⅱ 備考の理由で「封印中」（番外編も参照）
- 10 Ⅱ 変化なし

一度、封印すると解除しようと思っても直ぐには解けない。

夜神 「A・Sではこんな感じだな」

カナタ「へえ、こんな感じになるのか」（よし！性別の欄が男にな  
ってる）

リオン（・・・恐らく、性別の欄が男になって喜んでいるんでしょ  
うが

甘いですよ、マスター。容姿の欄が男の娘（笑）になっ  
てます！

教えるべきでしょうか・・・いえ、このままでいいですね  
）

夜神 「前はチート過ぎるお前の扱いに手を焼いたが、コレなら

！  
」

カナタ「大丈夫だと？」

夜神「多分……。」

カナタ「おいおい……。」「（汗

夜神「変更が必要になったら随時変えていくさ！」

カナタ「それで読者が納得するとでも？」

夜神「……すみません、素人なんで許してください。orz」

カナタ「僕に言っでどうするよ……。」

夜神「うるさいよ！所詮、自己満足作品だから良いんだよ！」

カナタ「うわっ……ぶちゃったよ。読者が離れても知らないよ？」

夜神「すみませんしたあああああ！！（ジャンピング土下座中）  
」

カナタ「まったく……。こんな作者と作品ですが今後とも

魔法少女リリカルなのは　　転生者はHAPPY　END  
を至高とする」

をよろしく願います。では本編でまたお会いしましょう！  
」

## 第15話 『新たな出会いと闘い再び』

side 場所：風芽丘図書館

フェイトと別れ、なのはから解放されたカナタはというと・・・

「・・・・・・・・・・」

図書館で本を読んでいた。

カナタside

（おお、これも何か美味しそう！あ、でもこれも捨てがたい…）

僕はいま図書館に来ている。

最近は事件が終わったことで時間が有り余っているのだ。

そこで、最近ご無沙汰になっていたお菓子作りに挑戦しようかと料理本を読んでいるのだが、実にけしからん見栄えだ。

余りのふつくしさに目移りしちゃうじゃないか。

喫茶翠屋のお菓子も美味しいけど、これも又なんとも…………。最近、作ってなかったから知らなかったけど

今はこんなにバリエーションがあるのかと感心していると背後から声を掛けられた。

「お菓子、好きなん？」

その声に振り返る。

すると、そこには茶髪と関西弁が印象的な少女が居た。

八神はやて、その人である。

だが、僕は既になのはやフェイトとの出会いで学習したんだ。

だから、もう、こんな突然のエンカウトに戸惑ったりはしないのさ！  
みさらせ！僕の華麗な対応を！！

「へう！？あ、えっと、その・・・」

・・・ちくせう。無理だったorz

今までの言動からも分かるように最近精神が肉体に引っ張られているせいか子供っぽくなって駄目だ。前までリオンと居る時だけは素で「俺」と言っていたのに今では「僕」だ。どうして、こうなった…。

と、はやての存在を忘れ思考に耽っていると、はやてが。

「ああ、ごめんな？急に話しかけたら、そら驚くわな」

若干苦笑まじりの笑顔で謝罪してきた。

ふむ、良い子だ。飴をあげよう、持っていないけど。

「いや、大丈夫だよ。ちょっと驚いただけだから」

「そうか？」

うん。ホントにちょっと。ちょっとだけ、驚いただけですから。もう、この世界の主要メンバーは突然現れるって知ってるからね。なのはとフェイトで学んだんだ！ホントだよ？嘘じゃないよ！？

「で、質問の答えだけど、お菓子は好きだよ。食べてると幸せな気分になるからね」

「そうなんか。その本見てるってことは自分で作ったりするん？」

「たまにね。最近は忙しくて作ってなかったけど」

「そっか。ウチもな、たまに作ったりするんよ。」

この前も　　あ！ウチとしてはな、ソレもお勧めやで？」

「どれどれ・・・おお～～！」



「な？美味しそうやる？この前、ウチも作ってみたんよ。  
少し大変やったけど、レシピ通りに作ったら中々美味かったわ」

「へえ、色々挑戦してるんだね。」

あ！じゃあさ、もしかしてコレも作ったことあったりするのかな？」

「ん？ああ、それは先月作ったなあ。ポイントとしては」

こんな感じでお菓子作りで盛り上がる僕たち。しばらくして

「あ、そう言えば自己紹介がまだやったな。」

ウチは八神はやて言います。よろしゅうな。えっと・・・」

「僕はカナタだよ。カナタ・アマギ。よろしくね、はやて」

「・・・うん！よろしゅうな、「カナタちゃん」」

「・・・うん。まあ、平気だよ・・・。」

もう慣れたもん。大丈夫、僕は乗り越えたんだ・・・ぐすっ」

（【マスター、泣いてる時点で乗り越えてませんよね？

・・・見てる側としては大変可愛らしくて良いのですが】）

（「・・・リオン、他に言う事ないの？慰めるとかさ！！」）

（【いえ、ここは敢えてその様子を鑑賞・記録した方が良くかと思  
いまして。

ですが、マスターの言うことにも一理ありますね。では  
元気出して下さいマスター、こういう扱いはいつもの事なんですか  
ら【】)

(「そうだね。キミの言動は確かにいつも通りですね!!  
そんなリオンを持った僕は幸せ者ですよ!この駄バイスめ!!」)

(【そんなに褒めないでください。照れるじゃないですか／／／  
／】)

(「え!?アレを褒め言葉として捉えるの!?悪口だよ?!」)

(【勿論、知ってますよ】)

(「・・・燃えないゴミの日って何時だったかな?」)

(【!?!? 愛してます!マスター!!

ですから、それだけは御勘弁を!?!】)

(「え!?命乞いで愛の告白!?・・・冗談だよ、リオン」)

(【・・・私を逆に弄るとは腕を上げましたね、マスター。

ですが、これはこれでアリかもしれませんね／／／／／／  
／】)

リオンは別の高みへ逝っていた(笑)by天の声

こんな感じではやての言葉をきっかけにリオンと少々念話を

していると、はやてさんが何かに気づいたように言ってきた。

「え？あ！もしかして男の子やった！？ごめんな、カナタくん」

「いや、いいよ。良く間違われるしね」（アイツ 駄神のせいだね！）

「・・・ホンマに？」

不安げに聞いてくる。はやて

「うん、それに僕の友達も最初は間違っていたからね。いや、今は姉達か」

「ん？カナタくん、お姉さんおるん？」

「まあ、血の繋がりは無いけどね。」

僕が一番年下で家族のような付き合い方しているから、それでね」

そうなのだ。

あの後フェイトと別れを済ませ、なのはの家に（強制的に）泊って士朗さん達に養子の話をした後、何を思ったか、話が保留になると分かるや否や、なのはがこう言ってきたのだ。

く回想入りますく

「えゝ、保留なの！？」

「カナタくんだったて

心の整理つてものが必要でしょうし、仕方ないわよ。なのは」

と桃子さん。やっぱり大人はその辺の事が早くて助かります。

「えゝ、でもゝゝゝあ！

それなら保留の代わりに私のことを『お姉ちゃん』って呼んで欲しいの」

「ゝゝゝ何故に、お姉ちゃん？」

「昔、一緒に暮らしていた時に

私がカナタくんのお姉さんになったからだよ」（番外編参照）

（あゝ、まだ覚えてたんだゝゝでも、この流れでいくとゝゝゝ）

そう思つて、なのはを見る。やっぱり「あの」目だよゝゝはあ。  
といった感じで押し切られてしまった。更にフェイトも。

「そ、それなら私もカナタの『お姉ちゃん』だよ！？だつて」

といった具合に、どうやって知ったのか・・・あ、なのは経由か。僕もフェイトと連絡取ってるから、この前のビデオメールで言ってきましたよ。しかも、なのはと「同じ手」で。流行りか？

だとしたら僕にとっては嫌な流行りだな。断れないじゃないか！小悪魔め！

二人とも可愛いだけに反則級の威力を誇るんだもの！勝てる気がしない。

アレか？僕には弟属性でもあるのか？みんなして僕を弟にしたがるし・・・。

と思いながら、はやてとの会話に戻る。

ここで僕は経緯を説明しながら、なのは達の年齢も一応伝えておいた。

『神は言っている』 』 的な電波を受信したから。

「へえ、ええなあ。なんか楽しそうやわ」

「・・・・・・・・まあ、否定はしない」

「なんや、メツチャ間があつたな・・・何かあるん？」

「いや、何もないよ。「まだ」ね・・・」

「辛い事あったら『はやお姉ちゃん』に相談するんやで？」（なでなで）

「うん・・・／／／／」

頭を撫でられてしまった。

はやてには撫でスキルがあるのか和む／／／／  
撫でられる際になんか気になるフリーズを言っていた気もするが・・。

その後、話題を変える為か、明るい声で話し始めるはやて。

「そうそう！

家族って言えばな、ウチにも家族みたいなんがあるんよ。

ウチらも血の繋がりは無いんやけど今じゃ大事な家族やねん。  
今度、カナタくんにも紹介するな。みんなええ子らやで」

「そうなんだ、それじゃあ楽しみにしてるね」

「う、うん／／／／」

はやてが嬉しそうに言ってきたから僕もつられて笑顔で返した。  
恐らくヴォルケンリッターのことだろう。

もうそんな時期か。『大事な家族』ね…。  
なら、そろそろ僕も準備しないとね。

僕の家族の為に。はやての家族の為に。

「じゃあ、はやて。僕は用事があるからそろそろ行くね」

「ん？そうか。ほんならカナタくん」

「うん。また今度お話ししようね。はやて」

「あつ・・・うん！またな力ナタくん」

そう言つて僕達は笑顔で別れた。

力ナタ side out

はやて side

今日も私は本を借りる為、図書館へと足を運んでいた。

「うゝん、今日は何を借りようかなあ」

そう言いながら、今夜読む本を探していた。

すると近くの席で熱心にお菓子の本を読んだる女の子を見つけた。

私はココに良く通ってるけど、初めて見る顔やった。

外見から察するに同じ年くらいやろう。整った顔立ちで肩までかかる綺麗な銀髪に澄んだ蒼空みたいな瞳をしまった。

（外国の子か、何かやるか？）

私はそう思いながらも彼女から目が離せへんかった。

（なんちゅうか、メツチャ可愛ええねん お菓子の本を  
真剣に眺めながらコロコロと表情を変える、その様は！  
私はその姿に心を奪われた！抱きしめたいなあ！ガ ダム！！）

私は気づいたら彼女に声をかけとった。

「お菓子、好きなん？」

「へう！？あ、えっと、その・・・」

突然、声をかけたせいか、驚かせてしまったようや。

「ああ、ごめんな？急に話しかけたら、そら驚くわな」

私はそう言つて苦笑混じりの笑顔で謝罪した。  
知らん人が突然話してきたら、そら驚くやろうなと思って。  
せやけど・・・

「いや、大丈夫だよ。ちょっと驚いただけだから」



と笑顔で返してきた。

その後は彼女が見ていた本を話題にして盛り上がった。  
そつえば…と思い、私は彼女に自己紹介をした。

「あ、そう言えば自己紹介がまだやったな。  
ウチは八神はやて言います。よろしゅうな、えっと…。」

（しまった。名乗ったんはええけど、相手の名前知らんわ…）

そう思っていると彼女が

「僕はカナタだよ。カナタ・アマギ。よろしくね、はやて」

と名前で呼んでくれた。

正直、同じ年くらいの子に他人行儀に名字で呼ばれるのは  
好きやないから最初から名前で呼んで貰えたのが私は嬉しかった。

「…うん！よろしゅうな、『カナタちゃん』」

すると、何かぶつぶつと呟きながら涙ぐんでいた。

（それが、また可愛えかったんやけどな）

そこで自分の間違いに気付いたウチは急いで謝罪した。  
嫌われてしまったやろうかと不安になったけど許してくれた。

「うん、それに僕の友達も最初は間違っていたからね。いや、今は姉達か」

カナタくんはどうやら良く間違われるらしい。それにしても姉がおるんか。  
興味が湧いたからそのことについて聞いてみた。

話が終わる頃には何故か少し哀愁が漂ってたから、私もそのお姉さん達に倣って

さり気無く自分を『はやてお姉ちゃん』と言いながら頭を撫でてみた。

一つ違いで姉って呼べるなら私もええんちゃうかなと思って。  
そしたら和んだ顔が凄く可愛かった。やっぱり最高や、この子

カナタくん曰く、姉達と血の繋がりはないが

「家族のような付き合い方をしているから」とのことやった。

（なんや、ウチと似てるなあ）

そこで自分にも血の繋がらない家族が居る事をカナタくに話した。  
そして、いずれカナタくに紹介する事を約束した。

すると笑顔で「楽しみにしている」と言ってくれた。

（その時の笑顔は可愛いというより、むしろ・・・／＼／）

私がカナタくんの笑顔に内心ドキドキしていると  
カナタくんが「用事があるから、もう帰る」と言ってきた。  
せやから私は -

「また今度お話しよな、カナタくん」

そう言おうと思ったら先に言われてしまった。

（同じように思ってたんやなあ・・・なんか嬉しいわ）

互いに笑顔で別れを済ませ、カナタくと別れた。

（カナタくんか、ええ子やったなあ。また会いたいわあ・・・。  
そして、やっぱり抱きしめたい。てか、確認も兼ねて揉ませろ！！  
あんなに可愛くて男の子の筈がない！！絶対、確かめたる！！）

はやてside out

なのはside 12月2日海鳴市、市街地 夜 ビル屋上

私は大規模な結界に閉じ込められたのを自分の部屋で感じた。  
レイジングハートによるとその結界を張った人がコッチに接近して  
るという。

私は少し不安を感じたけど、自分から相手に向かってみることにし  
た。

現場付近に着くとレイジングハートの警告とともに攻撃を受けた。

誘導弾と近接の同時攻撃を受けて私はビルの屋上から落されてしま  
った。

私はすぐにバリアジャケットを展開し、応戦態勢に入った。  
そして襲いかかって来る赤い服の少女に言う。

「いきなり襲いかかれる覚えはないんだけど！どこの子！？  
一体なんでこんな事するの！？」

返答はなく、返ってきたのは攻撃の意思だけだった。

その後、私はフォトンスフィアで彼女に攻撃を返したら  
更に攻撃を加えようと襲いかかってきた。

「話を……聞いてってば!」

そういつて放った私のバスターが彼女をかすめた。  
すると彼女の様子が豹変した。

「グラーファイゼン、カードリッジロード!」

彼女がそういうとデバイスの形状が変化した。

「ラケーテン……ハンマー!」

私はプロテクションを張ったが、それも破られ、レイジングハートに  
ダメージを与えられた後、そのままビルへと吹き飛ばされた。

吹き飛ばされた後も彼女の攻撃が来たのでプロテクションで  
防ごうとしたが、やはり防ぐことは叶わず破られてしまった。  
その際に受けたダメージは大きく、窮地に陥ってしまった。

（こんなので終わり?

嫌だ、ユーノくん、クロノくん、カナタくん、フェイトちゃん!）

そう思い、目を閉じる。しかし、彼女の攻撃が私に届くことは無か

った。

なのはside out

カナタside

ヤヴァイ！出遅れた！！

今夜はヴィータが襲撃してくる日じゃないですか！！  
結界張られるまで、そのことを忘れてたよ（汗

なのは達、大丈夫かな。カートリッジシステムはまだ搭載してないから

原作通り苦戦してるんだろうなあ・・・。

【マイスターの「うっかりスキル」がマスターに感染したようですね】

「そんなスキルいらんわ！とにかく急ごう、リオン！セットアップ！」

恒例のバリアジャケットに身を包む。仮面は付けていない。  
そして、転移魔法でなのは達の居る場所まで跳んだ。

辿りついてみるとそこには傷ついたなのはとなのはに回復魔法をかけているユーノ、そして戦闘態勢に入っているフェイトの姿が目に入った。

どうやら原作通りフェイト達が助けに入ってくれたようだ。しかし、心配ではあったので二人に無事を聞いてみる。

「なのは！フェイト！大丈夫！？」

「……………」

声をかけるが返事が無い。  
まるで屍の（ry・失礼。どうも意図的にやっているようだ。  
そこで僕は一つの可能性に気づく。そして、言ってみた。

「……『なのは姉』に『フェイト姉』大丈夫？」

「うん！大丈夫だよ、カナタ（くん）」（満面の笑み）

「なのは姉に、フェイト姉え？！」

状況についていけないユーノ。  
この二人、思いのほか余裕だね。僕の心配は何だったんだろう。  
なのは姉達のすぐ近くに赤い服の少女がいた。恐らくヴィータだろう。

突如、現れた僕を危険と感じたのか攻撃を仕掛けてきた。

僕はそれを防いだ後、二丁拳銃をダガ モードに切り替えて応戦した。

フェイ姉もそれに続いた。これで二対一になった。

ヴィータは分が悪いと感じたか、ビル内から場所を空へと移し出した。

僕達はなのは姉をユーノに任せ、ヴィータを追った。

そして、繰り広げられる攻防。そこへ、アルフも参戦し、暫くしたのち

バインドでヴィータを拘束する。これで終わったかに思えたがヴィータの方にも増援が。

ピンクのポニーテールが印象的な女性とアルフに似た感じの褐色の男性が

やって来てフェイ姉とアルフに攻撃をした。

その二人の登場にヴィータは言った。

「シグナム？それにザファイラも・・・」

まあ、原作通りでいけばそうなるよね。

シグナムはそのままフェイ姉に更なる攻撃を加えた。

「カートリッジロード！紫電一閃！」



「つく！」

それをフェイ姉は防ぐが、ヴィータ同様、やはり威力が高い。バルディッシュは折られ、下へと吹き飛ばされる。

アルフはフェイ姉を追おうとするがファイラに行く手を阻まれる。その間にシグナムはヴィータを開放した。その後ヴィータと別れ、こっちに戻ってきた。

「フェイ姉！！」

僕は叫びながらも、シグナムから目を逸らさない。警戒しながらフェイ姉に念話を送る。

（「フェイ姉、大丈夫！？」）

（「大丈夫だよ、いまユーノが  
傍に来てくれたから回復したらすぐにそっちへ」）

（「この人の相手は僕がするから回復が終わったら  
フェイ姉はユーノと一緒に赤い服の子の相手をお願い。  
いま二人の方に向かったようだから」）

（「え？でも、カナタ一人じゃ無理だよ！？私も一緒に」）

（「僕は彼女達と張り合えるだけの装備があるからいいけど、  
今のフェイ姉達の装備じゃ、一人で相手をするには厳しすぎる

よ。

ユーノも良いよね？フェイ姉と一緒に彼女の相手を！」

（「わかった！」）

それだけ確認すると僕は一方的に念話を切った。

フェイ姉は僕の突然の申し出に驚いていたがココは譲れない。何より、僕自身が一度彼女と戦ってみたいと思っていたから。

男として、一人の騎士として……。

（【まあ、「男」というより「男の娘」ですね】）

ちよっ！？リオンさん！地の文に介入してまで水を差さないで！？もう少しで、カッコよく決まりそうだったのに！！

こんなやり取りをしているとフェイ姉達は既にヴィータと戦闘を開始していた。なので、気を引き締め直して目の前の騎士に一言。

「じゃあ、僕らもはじめようか。騎士のお姉さん」

その言葉と同時に僕は自身のバリアジャケットを魔力陣と共にこの場に相応しい物へと変更した。

カナタ  
side  
out

## 第16話 『剣の騎士と名も無き黒騎士』

カナタ side

「じゃあ、僕らもはじめようか。騎士のお姉さん」

そう言って僕はリオンに指示を出す。

「リオン、僕の騎士甲冑よろいと剣を・・・」

「・・・何だと？」

【セットアップ】

驚くシグナムを余所に変更されるバリアジャケットとミッド式の魔力陣。

展開されるのは全身、黒を基調とし、銀の装飾を施した一組の騎士甲冑。

その手には僕の瞳と同じ色の剣が一振り握られている。

術式は勿論、古代ベルカ式になっている。

準備が整ったから僕は彼女に言う。

「初めまして、騎士のお姉さん。

僕はまだ騎士としては未熟の身だけど、お相手願うよ。はあっ！」

そういうと同時に僕はシグナムへと斬りかかる。

先ずは小手調べと袈裟斬りに剣を振るう。

「ック！」

「やはり防がれるか・・・なら！リオン『双剣』に変更だ！」

【イエス、マスター】

「！！！」

予想通りの結果だから別段驚きはしなかった。

目の前にいるのは歴戦のベルカの騎士だ。

ステータスを調節しているとはいえ、僕とは踏んできた場数が違う。

成り立ての、独学のための僕ではスキルをフル活用でもない限り

彼女を一撃で倒すのは難しいだろう。

ならばと、僕はシグナムから距離を取り

装備を双剣に切り替えて乱撃を開始した。

シグナムもこれに応戦し、仕掛けてくる。

剣戟の応酬によって独特の金属音が二人の間で鳴り響いていた。

何合か打ちあった後、互いに距離を取る。

どちらも乱撃の影響で息が少し上がっていた。

流石、ヴォルケンリッターの烈火の将にして剣の騎士か。

はやてとの会話の後、シグナム達との戦闘を想定して例の別荘で剣の修行を重点的にしてきたから僕も強くなった・・・筈なのだが決定的な一撃をなかなか決められない。

恐らくシグナムの剣の实力は僕と同等か、それ以上だったのだろう。そうなると戦局的にマズイ状況なのだが、僕の心境は違っていた。

(・・・いいね、それでこそ闘<sup>や</sup>りがいがあるっ！！)

やはり、僕も男だったということだろう。

修業の成果を実感できる彼女との闘いにある種の快感を覚えていた。

もっと彼女と戦いたい！

剣を競い合いたい！

そして自身を高めたい！！

もっと！もっと上を目指したい！

そんな想いが自然と芽生えていた。  
するとシグナムが自身の名前を名乗ってきた。

「はあ、はあ、・・・強いな。私はヴォルケンリッターが一人。  
烈火の将、「剣の騎士」シグナム。コイツの名はレヴァンティン」

「はあ、はあっ・・・貴女も強いよ、シグナム。僕はカナタ・アマ  
ギ。」

残念ながら騎士名は持ってないんだ。彼女の名はハイペリオンだ  
よ」

「そうか」

「うん」

そう言つて笑みを漏らす僕達。

（まさか、シグナムの方から名乗って貰えるとはね・・・。  
実際、名乗られると彼女に僕の実力を認めて貰ったようで嬉しいか  
も。

・・・いや素直に嬉しい！）

だから僕も乱れた呼吸を整えたあと、彼女の実力を称賛したうえで  
名乗り返した。騎士名を名乗れなかったのは少し残念だったけどね。  
・・・。

正規の騎士でもないし、自分で考えてもいなかったからなあ。

互いに名乗り終わると再び剣を構える。

彼女から伝わる雰囲気が変わった。恐らくこれで決着を着けるつも

りなのだろう。

まだ闘いたい気もするけど確かにそろそろ頃合いか。

ならばと、僕も装備を『剣』に戻し、技を放つ為の構えをとる。  
目の前の騎士がそれを望んでいるのが伝わったから。

「いくぞ！紫電一閃！！」

「来い！焰龍一閃！！」

ガキンッ！！

「っ　っぐ！？　」

威力が互角！？なら・・・

ギギギッ・・・

あとは気合いで押し切るッ！！

「っ　ウ、オオオオオッ！！」



互いの雄たけびが周囲に響く。

僕らの技は拮抗したのち、互いを弾き飛ばす。勝敗は

シグナム side

私の目の前にいる、銀髪蒼眼の魔導師。

コイツが私に対し、宣戦布告をしてきた。  
その直後

「リオン、僕の騎士甲冑と剣を……」

「……何？」

【セットアップ】

私は自身の耳を疑った。

（コイツはいま何と言った？ 騎士甲冑だと？ そんなバカな……。  
先程、コイツが使っていた魔法はミッド式。ベルカ式ではない。な  
らば……）

あり得ない。

そう考えていると、ヤツは先の言葉通り騎士甲冑と剣を携えた状態で再び現れた。

魔力陣もミッド式からベル力式に変更されていた。

そのことで様々な疑問が生まれたが、それよりも私はヤツの姿に見とれていた。

私自身、過去に騎士として幾人もの騎士や魔導師を目にしてきたが目の前にいる黒騎士ぐらいの歳でこれ程の存在感を持つ者を私は知らない。

姿こそまだ幼い子供だが、それ程の存在感を持つ騎士が私の目の前にいる。

佇まいからも、奴の実力が伺える。

（気になる事は多々あるが、相手が相手だ。そうも言ってられんか・・・。）

そう思い、私は気を引き締める。すると同時に奴が袈裟斬りに斬りかかってきた。

「ック！」（見かけによらず、重いつ。それに速さもあるっ！）

「やはり防がれるか・・・なら！リオン『双剣』に変更だ！」

【イエス、マスター】

「！！」

私の予想は間違いではなかったようだ……。

まったく、これで未熟の身とは言ってくれる。

すると、ヤツは小手調べは済んだと言わんばかりに

装備を変更し、攻勢に出た。何合打ち合っただろうか。

どちらが先という事は無く、互いに攻撃を止め、同時に距離を取る。

(……何か力を隠している感があるが、さっきの乱撃から察するに  
現状での実力は私と同等といったところか                      ツフ、面白  
い！！)

私は先ほどの疑問など忘れ、今はただ一人の騎士として目の前にいる  
コイツと闘いたい。そんな想いしか残っていなかった。

だから、私はそんなヤツに敬意を表して呼吸を整えて名を名乗った。

「はあ、はあ……強いな。私はヴォルケンリッターが一人。

烈火の将、「剣の騎士」シグナム。コイツの名はレヴァンティン」

「はあ、はあ……貴女も強いよ、シグナム。僕はカナタ・アマ  
ギ。

残念ながら騎士名は持っていないんだ。彼女の名はハイペリオンだ  
よ」

「そうか」

「うん」

私の名乗りに対し、ヤツも名乗り返す。自然と互いに笑みが漏れた。しかし、これ程の実力を持ちながら騎士名が無いとはな……。いや、そんなことは些事に過ぎんか。

一度、戦いが始まれば個人の騎士名など余り意味を持たんからな。

（で、あれば私も今は名を忘れ、只の騎士として貴様を迎え撃とう！この一撃をもって！貴様はどう出る！？アマギー！！）

私は時間が押してきている事もあり、名残惜しいとも思ったが勝負に出た。

願わくば私の技に真っ向から挑んで欲しい。

そして、もっとお前の力を私に魅せてくれ、と想いながら

僅かな期待と必勝を胸にカートリッジをロードし、この一撃をアマギへと放つ！

「いくぞ！紫電一閃！！」

「来い！焰龍一閃！！」

私が技を放つと同時にアマギも技を放ってきた。  
どうやら、こちらの想いが伝わったらしい。

（アマギも撃ちに来たか！だが、私も負ける訳にはいかん！！）

相手が真っ向から挑んできたことに歓びを感じながらも負けじと力を込める。  
力は互角だった。ならばと互いに雄たけびを上げ、気合いで押し切るうとした。

「ウ、オオオオオッ！！」

だが、互いの力に耐えきれず私達は吹き飛ばされてしまった。  
急ぎ、態勢を立て直し、再び剣を振るおうとしたが

「ッグ！？」

「ッッ！？」

どうやら、痛み分けをしたようだ。あちらも痛み顔に顔を歪めていた。

だが、私もアマギもまだ闘える。  
あちらも同じ考えなのか眼から戦意が消えていない。  
私はその事を嬉しく思いつつも再び決着をつけるべく動こうとした。

すると

シグナム side out

side

少し前に、離れた場所にいるのはから戦闘中の各員に念話が入った。

戦局を見て芳しくないと感じたのか、自身がスターライトブレイカーで

結界を破壊するから脱出するようにとの内容だった。その言葉になるのは  
を心配しながらも頷く各員。そして、多少のロスはあるが宣言通りなのはがスターライトブレイカーを放とうとした時、それは起きた。

「スターライト・・・ブー　っが!？」

なのはがスターライトブレイカーを放つ寸前でなのはの胸部を何者かの腕が貫いた。そして、その腕は魔導師の魔力の源たるリンカーコアを剥き出しにし、なのはの魔力を蒐集し始めた。ヴォルケンリッターが一人、シャマルである。

「あ、あああつ・・・!!」

「なのは!!」

「!!」

なのはの異変に逸早く気づき、叫ぶフェイト。それによって気づき、振り向く仲間達。

丁度この頃、カナタはシグナムと最後の技の打ち合いにより吹き飛ばされたところだった。魔力の蒐集に苦しむ、なのはしかし、なのはは蒐集されながらも自身の役目を果たした。

「つく! スターライトお、ブレイカああー!!」

震える手で何とか技を上空に放ち、結界を破壊するなのは。それに伴いヴォルケンリッターも撤退を開始した。

カナタ side

「どうやら、今日はこれまでのようだな、アマギ。

貴様との決着はいずれつけるとしよう。次は倒す」

僕は、なのは姉を心配しつつもシグナムの言葉を肯定する。

「うん、僕も負けないよ。シグナム・・・」

「・・・スマンな」

僕の表情から感情を読み取ってくれたのだろう。

シグナムは短くも、謝罪を述べ、この場を離れる。

どうやら彼女もこういう行為は好ましく思っていないようだ。

だが、僕は彼女らの事情を知っているから「彼女ら」を責める気は無い。

そしてヴォルケンリッターは撤退していった。

去っていくヴォルケンリッターを見ながら

僕はなのは姉達の元へと戻った。



苦しそうな表情のなのは姉を見て僕は自身の取った選択を悔いていた。

（僕は最低だ・・・）

そう、僕はこの結果を知っていた。知っていたが、敢えて防がなかった。

何故なら、この場でなのは姉が魔力を蒐集されるのは今後の展開上必要不可欠なものだったからだ。

だが、実際に姉と呼ぶ者の辛そうな顔を見ると自身の選択に疑念が残る。

この選択でよかったのか？

他に手は無かったのか？

僕が蒐集対象となれば良かったのでは？

そんな様々な疑念と自責の念が行動した後自身へと降りかかる。僕は思いを振り払うかのようにして、なのは姉の傍へと向かう。

「・・・なのは姉」

「・・・カナタくん。にやはは、・・・私、油断、しちゃったみたい・・・」

なのは姉は僕の選択によって、このような結果に巻き込まれたというのに

心配させまいと、己のちょっとしたミスであるかのように笑って言った。

しかし、だからこそ、その言葉は僕には辛かった。

僕は「起こりうる事態を知る者」だから。

「もし、あの時自分が」と、そう思ってしまうから。

だから、僕は偽善と自覚しつつも、せめてもの償いとして行動に出た。

「今、治してあげるから、ジツとしてて」（ごめんね、なのは姉）

「カナタ、なのはを治せるのかい？」

「そうか、母さんやアリシアを治せたカナタなら・・・」

各々が思った事を口にする中、僕は呪文を紡ぐ。

「ケアルガ（全体化ver）」

「あ、私達の傷まで・・・」

「凄い・・・僕以上の回復魔法だ・・・」

「んっ・・・」

僕は今回の戦闘で負傷を負った全員に回復を施した。

「ケアル」の最上位だけあって、なのは姉もすぐに回復した。

回復が終わり、アースラへと帰還する面々。

そんな中、心の内でつぶやく。

（こうした後悔はこれから先、何度も味わうことになるだろう。  
それでも、僕は  
）

自身の偽善ともいえる行為を自覚しながらも  
自らが至高とするHAPPYENDへと辿りつく為  
決意を新たにする一人の黒騎士の姿がそこにあった。

## 第17話 『お引越しと改変の時』

side 場所：管理局本局

あの闘いの後、なのははカナタに回復して貰ったことで問題ないと言っていたが、周囲の心配を受け、念の為、本局で検査を受けていた。

レイジングハート、バルデッシュも戦闘で破損した為、現在修復中である。

その後、前回の事件の関係者である

なのは、フェイト、カナタ、アルフ、ユーノ、クロノの六名は改めて再会を喜び合った。その際にユーノから「そういえば」と、ある事なのはとフェイト、カナタの三人に聞いてきた。

267

「そういえば、カナタ。」

なのは達のことを『姉』って呼んでいたけど、どういうこと?」

「ああ、それは」

「「カナタ（くん）」が私達の弟だからだよ」

「そ、そうなんだ・・・」（ちょっと羨ましいかも）

全然説明になっていないが、二人の迫力に押し黙るユーノ。  
するとアルフが

「へえ、結局、二人を姉って呼ぶようになったんだなあ。カナタ」

「まあね」

「それなら、ユーノやクロノも

『兄さん』って呼んでやった方がいいんじゃないかい？」（にやり）

「はゐ？」

「！！！！」（ナイスだ！アルフ！！）

突然の発言に呆けるカナタ。しかし当事者二名の反応は違っていた。アルフは二人の表情から気づいていたのだ。だからきっかけを与えた。  
すると

「あゝ、あのさ、カナタ？／／／／

良かったらでいいんだけど僕の事も、兄さんって呼んでくれないかな？」

「キミがそう呼びたいなら、べ、別に僕は構わないぞ？／／／／／」

「……………」

男、二人が恥ずかしそうに、そう言ってきたのだ。

言葉とは裏腹に期待の眼差しを向ける二人。

何処かに『兄』という立場に対する憧れでもあったのだろう。  
対するカナタはというと

「クロノ兄とユーノ兄で良い？」

「……………ああ（うん）」

割とあっさり受け入れていた。

最早、そう呼ぶ事に対して抵抗感というものが無くなったようだ。  
にしてもこの二人、実に嬉しそうである。顔が緩みきっているではないか。

その後、カナタ達は雑談を切り上げ本題へと話を移した。

その中で、クロノから襲撃してきたシグナム達が、今では余り使用  
されていない

ベルカ式という近接特化の魔法を使っていると同時に、カートリッ  
ジシステムと

いうものを自身のデバイスに搭載している事などが伝えられた。

また、これらを扱うものを「騎士」と呼ぶことも付け加えて言って

いた。

それを聞きつつ、カナタは

。

（僕もソレを使ってただけだね。

カートリッジシステムは使ってなかったけどさ。誰か気付かないのかな？）

などと、割とどうでもいい事を思っていた。

すると、フェイトとなのはが機敏にそれを察知し、質問した。

姉と呼ばれて日が浅いというのに、凄まじいお姉ちゃんパワーである。

「そういえば、カナタもあの剣士の人と同じ騎士甲冑ってのを着てたよね？」

「そうそう、カナタくん、魔力陣なんかも変わっていたから驚いたの！」

「あ、二人は気づいたんだ」

この質問をきっかけにカナタは自身がその技術と力を持っている事を伝えた。

当然は驚かれたが、そこは「カナタだから」という理由で落ち着く面々であった。

こんな話をしている内にクロノが「面接の時間だ」といって話を切

り上げた。

その際、カナタもなのは達と共に同行した。理由は言うまでもなくその面接の相手

ギル・グレアムである。カナタは今後関わるであろうこの事件で暗躍するこの男を

見ておこうと思ったのだ。

そして、面接を受けながらカナタは判断した。この男の説得は自分には無理だと。

身に纏う雰囲気から何か自分に似たものを感じたのだろう。それ故の判断だった。

だから、これは原作通りクロノに任せようという考えに至った。

面接の際にカナタも色々聞かれたが、ぬらりくらりとかわしながら当たり前障りのない受け答えをして面接を終えた。

面接も終わって窓を眺めながら休憩していたカナタだが

フェイトと喋っていたクロノから声をかけられる。傍にはリンディもいた。

「カナタ、キミはどうする？」

フェイトは囑託魔導師として今回の件に関わると言っていたが・

・

「ん？僕も参加するよ」



「しかし、キミは民間人「クロノ兄、コレなぐんだ？」・・・へ？」

そういつてカナタが見せてきたのは 嘱託魔導師の認定

証だった。

「！！ ちよつと待て！？何でキミが嘱託の資格を持つてるんだよ！？」

「ふむ、どうやら、本物みたいね・・・」

「え？クロノ兄に言ったじゃん、暇だから取れそうな資格全部取ったって」

「あの話、本当だったのか！？」（番外編参照）

「マジです」（満面の笑み）

そういつて笑顔で自分が現在持っている資格を全てクロノ達に見せるカナタ。

その中には前述の物とデバイスマイスターから、執務官資格など様々あった。

「カナタ、凄い！」（凄い笑顔が可愛いよお／＼／＼／＼）

「そんな・・・馬鹿な・・・」 or z

「ココまで来ると何でも屋さんって感じねえ」

大体、話が纏まったようなのでリンディが言う。

「じゃあ全員の行動も決まったわけだし、行動に移しましょうか」

そういつてリンディは部下やなのは達を集め告げた。

「事件となのはさん達の保護も兼ねて拠点を移動します。」

場所はなのはさん達のいる場所、海鳴市です」

カナタ side

海鳴市：マンション

僕は、現在リンディさんの言葉を受け、海鳴市に戻ってきている。  
引越しがあるからだ。何でも囑託として手伝う以上一緒にいて欲しい  
という事で事件の間はクロノ兄達と同じ部屋で暮らすことになったのだ。

で、いま僕はこうして一足先に新しい住居へと足を運んだんだけど・  
・

「何故、貴女方が居ますか・・・プレシアさんにアリシアちゃん」

「あら、久しぶりに会うのに冷たいわね。寂しかったのかしら」

「そうだよ！冷たいぞー！お兄ちゃん」

そういつて、僕に近付き、しゃがんで抱きしめるプレシアさん。  
そして伝わる女性特有の感触。

ムニユ

「な、なななな！？／／／／／」

「あら、赤くなちゃって可愛いわね」

「あゝ、お母さんズルイ！アリシアもお兄ちゃんをぎゅっとする！」

プニ

更に増える感触。

「へうっう！！！！？？／／／／／／／／」

「母さん！アリシア！何やってるんですか！？」

「そうですよー！私も抱きしめたいです！！」

恥ずかしがっている所にお姉ちゃんズが現れた！

・・・なのは姉の発言は聞かなかったことにしよう。

「あら、何って家族のスキンシップじゃない。ねえ、アリシア？」

「ねえ」

さも当然の様に言うプレシアさんとアリシアちゃん。  
そして更に強く抱きしめてくる母娘。それに伴い感触も強くなる。  
すると、タイミング良くハラオウン一家もといアースラの面々が到着。

「あら、あら、カナタくんは、もう着いちゃってましたか。

プレシアさんも駄目よ？まだカナタくんに手を出しちゃ・・・」

「あ、そういえば、そうだったわね。ごめんなさい」

何かを思い出したようにそう言うと、解放される僕。

「リンディさん、これは一体・・・」

「戸惑うのも無理は無いわね・・・でも、詳しい話はあとでね？  
簡単な説明だけしておく、プレシアさん達テストロッサ家の方々も私達の協力者として隣に越してきたのよ」

「へ？」

戸惑いながらも状況を整理する僕。つまりはこういうことらしい。

プレシアさんは前回の事件の処分を受けて管理局に勤務。勿論、暫くはリンディさん監視の下という条件付きだが。それに伴い今回の協力を申し出たのかなんとか。

そして、解放された僕はユーノ兄とアルフを触りながらまったりしていた。

二人とも獣モードで小型化しているから、触り心地がとてもいいのだ。

凄くモフモフしてます

しばらくしてお姉ちゃんズもこっちに来た。

「わあ、アルフ小ちゃい……。」

「可愛いだろ？」

「ユーノくんもフェレットモード久しぶり」

「つきゅ」

そう言って二匹を触りだす二人。すると……

「なのは、フェイト、友達だよ」

とクロノ兄。

二人は返事をして友人を出迎える。アリサとすずかである。  
何となく僕もついていく。

「こんにちは」

「来たよ」

「はじめましてっていうのは変かな」

「ビデオメールで会ってたもんね」

二人の言葉にフェイ姉も応じる。

「それでも会えてうれしいよ。アリサ、すずか」

「ところで、なのはちゃん、フェイトちゃん。後ろの子は・・・」

「私達の可愛い弟だよ」

「へ？」

驚く友人二人。「そりゃ驚くよね」と思っていると背後から  
プレシアさんがやってきた。

「あら、フエイト、お友達？

こんにちは、アリサさんにすずかさんよね？」

「あ、はい。あの私達の事は・・・」

「フエイトのビデオメールと一緒に観てたの

そうだね。せっかくだし、皆でお茶でもしてきたらどうかしら？」

「あ、それならウチで」

と、なのは姉がいう。すると、リンディさんも登場。

「それじゃあ、全員で挨拶に行きましょうか。ちょっと待っててね」

「そうね、それじゃあ私も・・・」

そういつて部屋へ戻る大人二人。アリサとすずかが尋ねる。



「さっきの人、フェイトのお母さん？どっちの人がそう？」

「二人とも綺麗な人だったよね」

「あ、えつと、その・・・」

最初に声をかけてきた方が私のお母さん／／／／／

少し恥ずかしげに言う、フェイ姉。

実にうれしそうである。僕も頑張った甲斐があったよ。

場所：喫茶翠屋にて

「まあ、」丁寧にも

「いえ、そういう訳ですので今後ともよろしくお願いしますね」

「こちらこそ、どうぞ御贔屓に」

などと、大人は大人で挨拶を交わしていた。

僕達かというと外に備え付けてあるテーブルでお茶をしていた。その際に「弟」発言やら何やら色々聞かれて大変だったよ。で、やっと質問責めから解放されるとアースラの局員さんが来た。何やら箱を二つ持っているではないですか。

(ん？二つ？…まさか？)

どうやら、僕とフェイ姉宛らしい。

(いや、まさかね？)

そう思つてフェイ姉と一緒に中身を確認。

(・・・。)

場所：翠屋室内にて

「「あ、あの、コレ・・・」」

フェイ姉と僕は二人して箱を差し出す。すると、そこには制服があつた。

なのは姉達が通う学校のものだ。

「おーフェイトちゃんとカナタくんも聖祥へ通うのか」

「ええ、なのはちゃんもいますから」

「じゃあ、フェイトちゃんは同じ学年ですか。いいですねえ」

士郎さんの言葉に頷くプレシアさん。うん、此処まではいい。  
此処まではね……で？

「カナタくんのは私達で用意したんですよ」

「そうだったのか、よかったなあ。カナタくん」(なでなで)

「あう／＼／＼／＼」(最近、良く撫でられるな……)

リンディさんの言葉に頷きながら僕を撫でる士郎さん。

撫でられるのは嫌いじゃないけど、少し恥ずかしい／＼／＼／  
でも、僕には重要な質問があるから恥ずかしがりながらも二人に尋  
ねた。

「あの、リンディさん、プレシアさん

フェイト姉は分かるんですが、なんで僕の制服まで？」

「カナタくんを預かる者として、学校には通った方が良かった  
の」

（お祖父さんの知り合いとして現在貴方を預かってることになるのよ）

「それにカナタも同世代くらいの子達ともっと関わりを持たないかね」

（学費とかに関しても心配いらないわ。こちらで手続きしておいたから）

ということらしい。どうやら今回の件は二人で既に決めていたようだ。

だけど、僕は学校に行く必要もない学力を身につけているので断ろうと・・・したんだよ？でも解るよね？うん。お姉ちゃんズ再来。

なんで、このタイミングで来るかね・・・誰かの差し金か？

「どんなに頭が良くっても学校には行かないと駄目なの！カナタくん！！」

「そ、それに、それだけ頭が良いなら飛び級だって出来るだろうし」

確かに、なのは姉達の言うように学校に通うのは大事なことだし

飛び級だつて、その制度が聖祥にあるなら可能だろう。  
僕は根負けして学校に通うことになってしまった。

（やったの！これでカナタくんと居られる時間が倍増なの　／／／  
／／／）

（カナタの制服姿、初々しくて可愛いんだろうなあ。  
いつそのこと、私の制服を着せてみるのも良いかもしれない／／／  
／／／）

（【ふふっ、彼女達をけしかけたことで、見事、誘導できましたよ！  
チョコ甘です　これでマスターの制服姿は私のものです！！／／／  
／／／】）

まさに「計画通り」というヤツである（笑）boy天の声

場所：自宅（ハラオウン邸）

夜、クロノ兄、エイミィさんと一緒に今回の事件について  
話し合いをしていたら何処からか連絡が来た。

どうやら、修理に出していたデバイスの件のようだ。  
話を聞くと原作通りレイジングハートとバルディッシュが

カートリッジシステムの搭載を望んでいるという。

（・・・頃合いかな。なら、ここから「改変」を始めようか）

僕はそう考えて、エイミーさんと画面の向こうにいる人に告げた。

「その話、僕も混ぜて貰っていいですか？」

カナタ side out

## 第18話 『学校と誓いと新たな名前』

side

前回、学校に通う事が決まったカナタは現在なのは達と同じ学校の制服を着てフェイトと共に教室の前に立っている。  
そして、声がかかった。

「突然ではありますが、皆さんに  
今日は転入生のお友達を二人紹介します。二人とも中へ入って下さい」

その言葉を受け、カナタとフェイトが共に入ってくる。

「フェイト・テストロッサです」

「カナタ・アマギです」

二人の容姿と名前からか、紹介が終わるや否や質問がバンバン飛んできた。

カナタに至っては飛び級である為、必然的にその量も更に増える。

「どこから来たの？出身は？」

「日本語上手だね！」

「勉強はどうしてたの？」

「趣味は？」

「二人とも、こっちには何時来たの？」「飛び級って凄いね！」

「カナタちゃん！一目惚れしました！！僕と付き合ってください！！」

など様々であつた。一番最後の勇者は未来の魔王と死神によつて屠られたとだけ述べておく。その後、既に顔合わせしてあるアリサ達の仲介でその場は落ち着きを取り戻した。

-  
時は過ぎ、昼休み

二人の姉とその友人二名に囲まれてカナタは昼食を取っていた。

「にしても、さっきは凄かったわよねえ」

「そうだねえ、カナタくんもフェイトちゃんも質問責めだったし」

「しかも、その質問の際にカナタに告白する奴がいたから驚きよ」



「確かにねえ」

「・・・・・・・・・・。」

アリサとすずかはその時のことをシミジミと思いだしていた。

その発言を聞いた姉二人が本当の魔王と死神が居れば裸足で逃げ出す程の

オーラを纏いながら、その勇者とO H A N A S Iを開始したのだ。

アリサやすずかが止めに入らなければ、とても子供にお見せ出来ない惨劇が最後まで行われていたことだろう。

そして、そのカナタはというと

「ふえっ、えっぐ、ひっく、ううっ・・・」

マジで泣いていた。

年相応以下の幼子の如く。それもそうだろう。

あの時の勇者の顔はまさに変態のソレであったのだから。なのは達の攻撃を受けつつもカナタに迫り来るその姿は勇者というよりアンデットと呼んだ方が相応しい程だった。

それにカナタは今まで性別を間違われることはあっても同性にあそこまで執拗に告白されたことは無かったのだ。大抵は男だと解ると、すぐにその精神的ダメージで引き下がってくれたのだが・・・流石、アンデット。

逆にカナタに精神的ダメージを与えていた。その威力は計り知れないものがあつた。故に現在・・・二人の姉に慰められていた。

「ほら、カナタ。泣きやんで」

「怖い人はお姉ちゃん達がやっつけたの」

「えうつ、ひつぐ・・・ふえ・・・？」

姉達の言葉に泣き止み、耳を傾けるカナタ。その様子をアリサ達も昼食を取りながらすぐ傍で見ている。

「つぐす、ほんとう・・・？」（ウル目&上目遣い）

「！！！！」（全体に不可視の衝撃！！）

この時、四人の中に眠っていた母性本能が最速で叩き起こされた！  
クーガーの兄貴もビックリな速さである。

まさにラディカル、いや、リリカル グッド スピードである。

「ほ、ホントよ！だからアンタも

泣きやみなさいよね！男の娘でしょ！？」（な、何て顔するのよ！）

「うんうん

何も怖くなんてないよ、私達がついてるんだし」（ジュルッ）

「だから、カナタくんは絶対安全なの」（とっても可愛いの）

「そ、そうだよ、だから安心して。ね？」（可愛すぎだよあ、カナタ）

すると、その言葉に安心したのかカナタは

「う、うん！ありがとう！『お姉ちゃん』（にぱ）

「「「「！！？」（四人に電流が奔る！！）

滅多に聞けない、もとい、言わない台詞を言っていた。

普段、カナタが二人の姉を呼ぶ時は『なのは姉』、『フェイ姉』である。

本人達は『お姉ちゃん』を望んでいたが、カナタが恥ずかしがって呼んで

くれなかったのだ。だから名前の後に姉をつけることで妥協していた。

だが、もし、それが『お姉ちゃん』に変わった時、最近ブラコン気味な二人と

先程のような反応をしていた友人二人はどうなるだろうか。

言うまでもないだろう。それも安堵した可愛い笑顔付きとくれば、尚の事。

鼻から愛？を溢れさせる者【フェイト】「ブシャアアアアア／／／」

限界を天元突破し悶える者【なのは】「あああんっ 可愛すぎるの／／／」

完全に捕食者の眼になる者【すずか】「お持ち帰り…お持ち帰りい…／／／」

顔を真っ赤に染め上げる者【アリサ】「っ／／／／／／／／／／／／／／／／／」

反応は様々であった。だが、そんな彼女らにも共通点があった。そ

れは

「『『カナタ（くん）は私達で守ろう！』』」

この瞬間、新たな同士と共に一つの誓いが立てられたのであった。

そして、放課後。

この時にクロノからなのは達へ今後の方針や破損したデバイスの修復状況などが  
なのはの携帯を通して知らされていた。この頃にはカナタも復活していた為、  
クロノから

「しばらくは自由に過ごしてもいいが、夕飯までには戻るように」

と兄なのか母なのか分からないような台詞を聞かされていた。  
カナタを家族として気にかけてくれているということだろう。  
カナタもそれを感じ取り、内心嬉しく思っていたのは秘密である。

また今回の件がきっかけとなり、お願いという名の押し切りでアリサもすずかも、なのは達同様『姉』と呼ぶことになった。

その後、アリサ達と別れ、なのはの部屋でフェイトとカナタの三人で先の闘いで感じた事を話し合った。そこで導き出された答えは『話を聞かせて貰う為に闘う事が必要なら迷わず闘う』というものだった。

そこから数日。

side 管理局本局

現在、なのは、フェイト、カナタ、ユーノ、アルフの五人は本局を訪れていた。以前の闘いで破損した二機のデバイスも無事に修復が終わったので受け取りに来ていたのである。これで準備万端かと皆が思っていた矢先、タイミング良くアラートが鳴り響く。

そして管制室から届いた知らせは、以前戦ったヴォルケンリッターを発見したというものだった。これを聞いた、なのは、フェイトの二人は

現場へ向かう。既にクロノは部隊を引き連れて現場に向かっている。

その後、現場に助っ人として現れるフェイトとなのは。カナタも既に騎士甲冑を装着した状態で二人と共にいた。なのはとフェイトのデバイスの出来を確認する為だ。

目を向けると、結界を張られ局員に囲まれたヴィータとザフィーラの姿があった。

三人の登場に反応するヴィータとザフィーラ。

なのはとフェイトは戦闘態勢に入る為、デバイスを起動させる。

だが、デバイスの反応が以前と違っていた。戸惑う、なのはとフェイト。

そこにエイミーから通信が入る。

その子達の新しい名前を呼んであげて。と

その言葉を受け、なのはとフェイトは生まれ変わった相棒の名を紡ぐ。

「レイジングハート・エクセリオン！」 「バルディッシュ・アサルト！」

【トライ・エディション】

新たな名前と共に展開される、新たなデバイスとバリアジャケット。ここにカードトリッジシステムを搭載した新デバイスが誕生したのである。

## 第19話 『ヴォルケンリッターの願い』

l l l s i d e 場所：結界内部、ビル群屋上

新たな名前と共に進化を遂げた二機のデバイス。  
そのデバイスを以て再び闘いに臨む、なのはとフェイト。  
対するはヴォルケンリッターのヴィータとザフィーラ。  
フェイトが先に口を開き、なのはもそれに続く。

「私達は貴女達と戦いに来たわけじゃない。まずは話を聞かせて」

「『闇の書』の完成を目指している理由を！」

「あのさ、ベルカの諺に  
こういうのがあんだよ。『和平の使者は槍を持たない』ってな」

ヴィータの言葉に首を傾げるなのはとフェイト。  
カナタはオチを知っているから顔が笑っている。  
それを見かねたヴィータは挑発も兼ねて自分の  
デバイスを三人に突きつけながら意味を教える。

「話し合いをしようってのに武器を持って



やって来る奴がいるか、馬鹿！つていう意味だよ！バゝカ！！」

この言葉にコケそうになった、なのはは言う。

「な！？いきなり

有無を言わずに襲いかかって来た子がソレを言う！？」

まあ、間違いではない。更に意外なところから横槍が

「それに、それは諺ではなく小唄のオチだ・・・」

ザフィーラである。実にクールなツツコミだった。

「うつせ！良いんだよ細かい事は！

つてか、その黒騎士！！笑うんじゃねえ！！」

【そうですよ、マスター。失礼ですよ・・・つぶ

「つくつく、いや、ゴメン、ゴメン。

悪気はないんだ、悪気は。でも・・・ぷっ」

「だ〜！！笑うな！オマエら！！／＼／＼／」

なんとも締まらない空気になってしまった。  
すると、上空からおっぱい魔人・・・失礼。

ヴォルケンリッターが将、シグナムが結界を抜けてやって来た。  
なのは達がいるビルの屋上の向かい側に降り立つ。  
シグナムの登場に反応するフェイト。なのはも同じである。  
ヴィータを見ながら、なのはが言う。

「クロノくん、ユーノくん、カナタくん！  
手を出さないでね。私、あの子と一対一だから！！」

「マジか・・・」

「マジだよ」

「二人とも前回の借りがあるからねえ」

なのはの言葉に反応する三人。続いてフェイトも言う。

（「アルフ、カナタ。私も・・・彼女と」）

（「ああ。アタシもヤロウにちよいと話がある」）

（「僕も今回は構わないよ、フェイ姉」）

フェイトの言葉に頷きながらファイラを見るアルフ。

カナタも今回の目的はデバイスの性能確認だから、これを承諾する。そして張りつめられる場の空気。そこでクロノが言う。

「ユーノ、カナタ。

それなら丁度いい。僕達で手分けして『闇の書』の主を探すんだ」

「『闇の書』の？」

「連中は持っていない。恐らく、もう一人の仲間が、主かが何処かに居る。僕は結界の外を探す。キミ達は中を」

「うん」

クロノの言葉に頷くユーノ。しかし、カナタは

「いつてらっしゃい」

軽やかに見送った。爽やかな笑顔付きで。その言葉にコケる兄二人。クロノが叫ぶ。

「キミも来いよ!？」

「いや、だって

デバイスの性能を間近で見たいし。今回、僕も関わってるからさ」

クロノ問いに笑顔のまま答える弟分。

ここでもう一人の兄が助け船を出してくれた。

「はは……。いいよ、クロノ。

カナタも関わっていたのなら気になるだろうし、僕だけで構わないよ」

「流石ユーノ兄、話が分かる　クロノ兄にも見習って欲しいよね」

「ぬなっ!?!?.....はあ、まあいい。ユーノが良いなら構わないさ」

「やった!ありがとう、お兄ちゃん」

そういつて、屈託の無い笑顔を二人の兄に向けるカナタ。

天然とは恐ろしいものである。効果は抜群だった。

「「!!」」

「ぼ、僕たちはもう行くからな。キミも残るなら気をつけるんだぞ!!!」

「な、なのは達の方も何かあったら頼むよ！／／／」

照れながら、それだけ言うと二人は足早に行動を始めた。  
二人を見送りながら、視線をなのは達に向ける力ナタ。

（本当は僕もシグナムと戦いたかったけど今回は諦めるしかないか。  
今日の目的はなのは姉達のデバイスのチェックだからね。次にしよう）

何処か、バトルマニアに成りかけていた。

なのはがカートリッジをロードしたことでフェイトもそれに倣い  
ロードを行う。そして魔力が強化される魔導師二人。  
それを見てザフィーラが油断するなとヴィータに告げる。  
それに頷くヴィータ。シグナムも剣を構え、気を引き締める。  
そしてほぼ同時に皆が上空へと上がり、それぞれの闘いを開始した。

シグナム side

二人の魔導師がカートリッジをロードし臨戦態勢に入った事で私達は自分の相手と共に上空へ上がり、それぞれ散っていった。

私の今回の相手は前回叩き伏せた金髪の魔導師のようだ。アマギが来るかと思っていたが、どうやら違うらしい。

少々残念に思いながらも、私は金髪の魔導師に目を向ける。良い眼をしていた。恐らく、前回の借りを返そうといった所だろう。ヤツ自身も前回と違って、デバイスを強化してきている。甘く見ない方がいいな。

私たちは地上から上空へと飛び交いながら攻防を繰り返す。そして上空へ辿り着くと、そこから互いに距離を取って構える。

私が構えると同時にヤツが魔法を展開し始めた。

プラズマランサーと呼ばれた魔法がこちらに飛んてくる。

私はそれを横薙ぎに斬り伏せたが、どうやらそれだけでは駄目らしい。

再び襲い掛って来るヤツの魔法。更に上空へ逃れても追尾してくる。

ならばと、私はカードリッジをロードし、剣に炎を纏わせソレを薙ぎ払う。

その隙にヤツがこちらの高さまで迫り、デバイスを変形させて振り下ろしてきた。

だから、私もレヴァンティンの形状を変化させ、迎え撃った。

【シュランゲフォルム】

そしてぶつかり合う武器と魔力。私達はその衝撃によって軽く飛ばされる。

互いを見合う。どうやら互いに攻撃が通っていたようだ。

私は胸部に、ヤツは腕部に傷痕がついていた。

（ツフ・・・アマギといい、コイツといい、私がこうも手こずるとはな）

だから私はアマギの時と同様、コイツの実力に敬意を表し、名を名乗った。

相手もそれに応じた。そして、私は武器の形状を元に戻しながら言った。

「強いな、テストロッサ。それにバルデッシュ」

【センキュ】

「貴女とレヴァンティンも、シグナム」

【ダンケ】

「この身に為さねばならぬ事が無ければ、アマギの時と同様、心躍る闘いだった筈だが、仲間達と我が主の為、今はそうも言ってもらえん」

私はそう言いながら剣を鞘へと納め、抜刀の構えをとる。

「殺さずに済ます自信は無い。この身の未熟を許してくれるか？」

「構いません。勝つのは私ですから」

私はその言葉に小さく笑った。嘲笑ではなく純粹に面白いと感じたからからだ。

自分が勝てると思っている。それは構えと瞳の力強さから伝わってきた。

（本当に面白い。アマギといい、テストロッサといい・・・）

こんな強敵と心ゆくまで闘いたいと思っている自分に気づくが私情は挟めん。そう思っているとテストロッサも小さく笑っていた。

シグナム side out

----- side 場所：同ビル群、地上



ここでは二匹の獣が人の形をとって闘っていた。

アルフとザフィーラである。攻防をし合いながらもアルフがいう。

「デカブツ、アンタも誰かの使い魔か！」

アルフの攻撃を防ぎながら牙を剥き出しにし、叫ぶザフィーラ。

「ベルカでは主に仕える獣を

使い魔とは言わぬ！主が牙、そして盾！守護獣だアツ！！」

「！！・・・同じようなモンじゃなかよオ！！」

アルフの言葉と共に魔力が爆ぜる。それと同時に距離を取る二人。そして、その間にザフィーラが周囲の状況を確認し念話を送る。

（「・・・状況は余り良くないな。シグナムやヴィータが負けるとは思わんが此処は引くべきだ。シャマル、何とか出来るか？」）

結界から離れた場所にいるシャマルは仲間の問いに答える。

（「何とかしたいけど、局員が結界を維持しているの。私の魔力じゃ破れない。」

シグナムのファルケンかヴィータのギガント級の魔力を出せなきゃ・  
・。。」

「二人とも手が離せん。止むを得ん、アレを使うしか・・」

「解ってるけど、でも」

「

ジャキッ

「!」

「シャマル? どうした、シャマル!？」

ザフィーラの言葉も空しく、ここで念話が途切れる。  
シャマルの背後にはクロノの姿があった。

クロノが『闇の書』を所持したヴォルケンリッターの一人を確保した  
ことで、モニタで現場を見ているリンディ、エイミィは事件の終了を  
確信した。だが

突如クロノが攻撃を受け、横跳びに吹き飛ばされた。  
仮面をつけた男が攻撃してきたのである。

見知らぬ男の出現に戸惑うシャマルに男は言う。

『闇の書』の力を使って脱出しろと。

対するシャルはソレは頁の魔力消費が激しいからと拒むが男は更に言う。

「減った頁は後で増やせばいい。仲間がやられてからでは遅いだろう」と。

シャルも暫く逡巡したが、これに納得し使う事を決意する。

そして、シャルは仲間にな話を送り、『闇の書』の力を使う事を告げる。

一同はそれに賛同し、各自闘いながらも脱出の機を待つ。

結界が破壊される前にクロノが止めに入ろうとするが、仮面の男に阻まれる。

「今は動かず、時を待て」と。その後、シャルと魔導書の力によって

宣告通り結界が破壊された。

その際に凄まじい威力の砲撃が空から降り注いだが、カナタも近くで待機していた事やアルフがザフィーラから「仲間を守ってやれ」と助言を

受けた事、異変に気付いたユーノが迅速に対応したことで局員側の被害は

最小限に留められた。なのは達も無事である。

しかし、その間にヴォルケンリッターには逃げられてしまった。

こうして、この夜の一件は幕を閉じた。

ヴォルケンリッター side 場所：「闇の書」の主の家

彼女らが管理局から逃れ、主の元へと戻ると主の姿はそこに無かった。

今夜は最近出来た主の友人が遊びに来るので、みんなで食事をしようという話になっていたのだ。部屋には一つの置手紙があった。それは今夜はその友人の家で共に過ごすというものだった。

その手紙を読み、主と連絡を取るシャマル。すると受話器から女の子の声が聞こえる。以前、カナタと図書館で知り合い、友達となった

「八神はやて」である。

「すみません、はやてちゃん。遅くなっちゃって・・・」

「ええよ、別に。すずかちゃんと二人で鍋も、ちょお寂しいかなって思ってたし」

「でも・・・」

「ええから、ええから。鍋は温めれば食べれるようになってるし、皆で食べてな」

「はい。本当にすみません・・・はい、はい・・・いま、ヴィータと

代わりますね」

「はやて？もしもし・・・」

どこか元氣なく尋ねるヴィータ。恐らく、はやてとの約束を守れなかったことへの罪悪感からだろう。シャマルはヴィータと代わるとシグナムと共に庭へ向かう。  
シグナムが口を開く。

「寂しい思いを、させてしまったな・・・」

「うん」

「それにしても、お前を助けた男は一体何者だ？」

「解らないわ。少なくとも当面の敵では無さそうだけど・・・」

「管理局の連中もこれで益々本腰を入れてくるだろうな」

「あの砲撃で大分頁も減っちゃったし・・・」

「だが、余り時間もない」

「うん・・・」

「一刻も早く主はやてを、『闇の書』の真の所有者に」

「そうね・・・」

そう呟く二人の言葉は夜の闇へと消えゆくだけだった。

主を『闇の書』の真の所有者として

覚醒させ、『闇の書』の呪縛から主を解き放ちたい

そして願わくば、その主と、仲間と共に静かに暮らしたい

その願いだけを己が胸に残して・・・。

s  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t

## 第20話 『油断』

side 場所：ハラオウン邸

ヴォルケンリッターとの二度目の闘いを終えたなのは達は新しいデバイスの説明をエイミーから受けていた。

因みに原作ではカートリッジシステムは未完成だったため爆発的な力を得られる代償にデバイスと使い手に多大な負荷が掛るとされていたが、カナタが開発に関わった事でこれらのデメリットは解消されている。

その後、クロノから『闇の書』とヴォルケンリッターに関して会議が行われた。

内容を要約すると

。

「現在の彼女達はプログラム体にしては感情が豊か過ぎる」とのことだった。

この件に関しては原因が解らないことから多くは語られなかった。

しかし、ヴォルケンリッターの行動範囲からみて『闇の書』の主が自分たちの周辺にいることは確実であるとされ、場合によっては『闇の書』が完成する前に

主が捕まって事件が解決することもあり得るだろうという事が結論として述べられた。

会議の後、クロノからユーノに声が掛った。

なんでも、頼みがあるとのことだった。

頼みごとの内容は明かされなかったが、ユーノもコレを引き受けた。

話が終わり、なのはがユーノと喋りながら帰宅しているとすずからメールが届いた。

「友達が今夜泊りに来ている」との内容だった。

メールには、はやてと一緒に映っているすずかの姿があった。

なのははそのメールを見ながら、今度、すずかがはやてを紹介してくれることを

ユーノに話していた。

会議から数日経った頃、クロノはユーノとエイミィを連れ、自分の師匠にあたる

グレアムの使い魔、リーゼロッテとリーゼアリアに会いに行っていた。

そして、その二人にユーノを無限書庫へ案内し、

可能なら『闇の書』の調査を手伝って欲しいという旨を伝えていた。



僕はいま携帯のカタログを眺めている。  
うん。訳が解らないね。説明すると、フェイ姉携帯持っていない。  
そういえば僕も持っていない。どうしよう。買っちゃいなよ、you  
という訳である。

学校の放課後にそういう話になったから  
現在フェイ姉と一緒にカタログを眺めている所なのだ。

「な、なんだかいつぱいあるね。カナタ」

「そ、そうだね」

僕達の反応に対しアリサ姉、なのは姉、すずか姉が意見を言ってきた。

「まあ、最近はどれも  
性能は一緒だし色やデザインで決めちゃって良いんじゃない?」

「でも、やっぱりメール性能の良いヤツが良いよね」

「カメラが綺麗だと色々楽しいんだよ」

「うん」

更に悩む僕とフェイ姉。すると更に発言が増える。

「でも、やっぱり色とデザインが大事でしょう?」

「操作性も大事だよお」

「外部メモリー付いてると色々便利で良いんだけど」

「そうなの?」

フェイ姉が反応する。

「うん。写真とか音楽とか沢山容れておけるし  
そうそう、メールに添付してお友達に送ることもできるの」

「ああ、そうだよねえ」

「結構使えるわよねえ」

三人は言うだけ言うのと勝手に盛り上がり始めた。  
隣のフェイ姉は何か目線が定まっていたので  
どうやら決まったようだ。僕はどれにしようかなあ……。

そして、現在、携帯を購入する為にショップへと足を運んでいた。メンバーは、僕、姉四人組、リンディさん、プレシアさんである。

「ありがとうございます」

「はい、どうも。カナタくん、はい」

そういつて、リンディさんは僕に携帯を渡してくれた。

僕はリンディさんにお礼を言つて、みんなの所へ向かう。フェイ姉の分はプレシアさんが買ってくれている。

向かう途中、フェイ姉も買い終えたようなので一緒に向かった。

「お待たせ！」 「待った？」

「ううん、大丈夫よ。良い番号あった？」

「うん」 「あったよ」

「えゝ、何番？」

「えつとね」 「たしか」

「「これ」」

「「「わああ」」」

その後は新たに手に入れた携帯を話のタネに  
キヤツキヤツ、ウフフツとみんなで盛り上がった。  
勿論、全員と番号などは交換してある。

こうして僕の学校生活は緩やかに過ぎていった。

余談だが、たまたま僕が選んだ機種がフェイ姉と一緒にだった事で  
なのは姉から O H A N A S I という名のお仕置きをされてし  
まった。なんですか。

## 数日後

場所：ハラオウン邸、カナタの部屋

現在、僕はなのは姉からアリサ姉達の習い事の話聞いていた。  
フェイ姉も一緒である。

（ヴァイオリンか・・・。  
きつと二人の事だから上手なんだろうなあ。今度聴かせて貰おう  
かな）

そう思っていると明るい声と共に玄関が開く音がした。  
エイミイさんが帰ってきたようだ。

「たっ だいま〜」

エイミイさんを出迎えた後、そのまま荷物を出しながら会話を  
するのは姉達も手伝いながら会話に参加する。

「艦長、もう本局に出かけちゃった？」

「うん。アースラの武装が完了したから試験航行だつて。アレック  
ス達と」

「武装つてえと、アルカンシエルか」。

はあ、あんな物騒なモノ最後まで使わずに済めばいいんだけど・・・

「

「クロノくんも居ないですし

戻るまではエイミイさんが指揮代行だそうですね」

「責任重〜大」（はむはむ）

アルフ、肉類張りながら言っても説得力ないよ？

「うっ、それもまた物騒な・・・」

カボチャを撫でながらそんな事をいうエイミィさん。

（何でエイミィさんが指揮代行だと物騒なんだろう？）

気になったから聞いてみよう・・・と思ったけど止めた。

だって、エイミィさんのカボチャを握る手がカボチャを砕きかけてるんだもん。

その彼女の眼は「何も聞くな」と訴えてくるし・・・。僕、怖い。

「ま、とはいえ、そうそう非常事態なんて起こる訳が・・・」

それを世界がフラグと取ったのか、無情にも警報が室内に鳴り響いた。

場所：未開惑星、砂漠地帯

現在、原作通りにメンバーを割り振ってフェイ姉と無人の砂漠地帯に来ている。

現場につくと、龍もどきに体の自由を奪われているシグナムの姿があった。

このままだとシグナムが危ない気がしたのでフェイ姉と一緒に龍もどきを攻撃した。

「【サンダーブレイド】ブレイク！」 「【ライトニングスピア】ブレイク！」

因みに『ライトニングスピア』は雷の変換資質を用いた僕のオリジナル魔法だよ。

オリジナルと言っても見た目が剣から槍に変わっただけで

フェイ姉の『サンダーブレイド』と能力は変わらないけどね。

で、僕とフェイ姉の技を喰らって龍もどきは難なく撃破。

シグナムも無事に解放された。すると、エイミーさんから通信が。

<フェイトちゃんもカナタくんも助けてどうすんの！捕まえるんだよ！>

「あ、ごめんなさい。つい・・・」

「ごめんなさい、エイミィさん・・・」

<え？あ、うん。別に怒ってる訳じゃないから落ち込まないで、カナタくん

・・・って、なのはちゃんレイジングハートを構えないで！？アツ  
————！？>

「・・・。」（落ち込んだカナタも可愛いよお／／／／今すぐ  
慰めてあげたい！！）

最後に断末魔が聞こえた気もしたが気のせいだろう。・・・生きて  
！エイミィさん！

「礼は言わんぞ、テストロッサにアマギ」

「お邪魔でしたか？」

「・・・蒐集対象を潰されてしまった」

そっいつてカートリッジを補充するシグナム。

「でも、あのままだと、シグナム食べられてたよ？」（心配そうな  
顔で）



「そ、そうだな／＼その点は確かに助かった。礼を言う／＼／  
／」（か、可愛い！？）

「まあ、悪い人の邪魔をするのが私達の仕事ですし」

「そうか・・・悪人だったな、私は」

「・・・・。」

僕は事情を知ってる分、何も言えなかった。

カナタ side out

なのは side

カナタちゃんとフェイトちゃんがシグナムさんを助けた後、  
室内に再び警報が鳴り響いた。画面にはヴィータちゃんが映っていた。

「本命はこっち！？なのはちゃん！」

「はい！」

私は頷くとすぐにヴィータちゃんを追った。

すると、上空を移動中のヴィータちゃんを発見することが出来た。  
ヴィータちゃんがこちらに気づいて叫ぶ

「高町ナントカー！」

ズルッ

「『なのは』だってヴぁゝゝ！な・の・はー！！・・・もうっ」

いきなり間違えるからこちらでも叫んでしまった。

（一度、互いに名乗ったはずなんだけどなあ・・・。）

私はため息を吐きつつ

もう一度話を聞かせて貰えないかヴィータちゃんに訪ねてみた。  
もしかしたら聞けるかも知れないと思ったから。

しかし、返答はなく、逃走を計ろうとする。

だつたら、こつちにも考えがあるの！

「いくよ！久しぶりの長距離砲撃！」

【ロードカードリッジ！】

「ディバイーン、バスターーっ！！」

すると思つたよりも威力の高い  
ディバインバスターがヴィータちゃんを捉えた。

【直撃ですね】

「少し、やりすぎたかな？」

【大丈夫でしょう】

そんなやり取りをしていると、次第に煙が晴れ、姿を確認できた。  
すると、そこには仮面の人が立っていた。

え？

驚いていると、すぐにバインドをかけられ動きを封じられてしまった。

「つく！そんな！バインド！？あんな距離から一瞬で！？」

私はすぐにバインドを解いてヴィータちゃんを追おうとしたが  
仮面の人もヴィータちゃんも、既にそこに居なかった。

なのは side out

カナタ side

え、カナタです。

ただいま、フェイ姉VSシグナムの闘いを観戦しております。  
非常に暇です。

あの時フェイ姉にジャンケンで負けなければ……。 orz  
いいなあ、僕も闘いたいなあ。

なんて、思っていると闘いも終盤のようだ。

二人とも構えが変わった。これで決めるつもりだろう。  
すると、フェイ姉の背後に仮面の男の姿が・・・。

やはり、やって来たか。でも、フェイ姉はやらせないよ!!

そう思って、フェイ姉の所へ向かおうとした瞬間

。

「かはっ!?!」

僕の胸を誰かの腕が貫いていた。

後ろを振り向くと仮面の男の姿がそこにあった。

「な、何で?・・・っぐ!?!あああああああっ!!」

油断してた。まさか、もう一人もコッチにくるなんて・・・。

薄れる意識の中、フェイ姉の方を見ると、フェイ姉も原作通りにやられてしまっていた。

フエイ姉……。

手を伸ばそうとするが、その手が届く事はなかった。

僕のそのまま意識を失った。

カナタ side out

## 第21話 『はやての笑顔、グレアムの苦悩』

l i n e 場所：時空管理局本局、アースラ内部

現在、アースラの面々はリンカーコアを蒐集され、気を失ったカナタ達を回収したのち、今回の件に関して会議を行っていた。

会議の中で今回の件に関する疑問が解決されることはなく、地上にあった司令部をアースラに戻し、引き続き調査を続ける事だけが

リンディによって決定された。

会議に参加していたなのは、そのままカナタ達が目を覚ますまでここに残ろうとしたが、一度、家に戻らないと不味いだろうということで

リンディに止められていた。

カナタ s i d e 場所：医務室

フェイトとは別室で治療を受けていたカナタは、暫くたった頃に目を覚ました。

すると、そこにはリンディの姿があった。

「んっ・・・あ・・・」

「カナタくん、目、覚めた？」

「リンディ、さん？」

「うん」

僕はリンディさんの姿を確認すると体を起こそうとしたが、上手く起きられなかった。

リンディさんに手伝って貰いながら体を起こす。  
そして周囲を見渡した。

「あれ？僕・・・」

「ここはアースラの艦内。

貴方は砂漠での戦闘中に背後から襲われて気を失っていたの」

「あ・・・」

リンディさんに言われたことで全て思い出した。  
そうだ、僕はあの時、背後を取られて



「そうだ！フェイ姉！フェイ姉は無事ですか！？」

「落ち着いて、カナタくん！大丈夫よ、フェイトさんもさっき目を覚ましたし、今はプレシアさん達が傍にいるから」

「そうですか、よかった・・・。

でも、そうか、僕はやられちゃったんですね。情けないなあ・・・

」

「管理局のサーチャーでも確認できなかった不意打ちよ、仕方ないわ」

そう言って手を重ねてくるリンディさん。

「あ・・・／／／」

「あ・・・ごめんさい、嫌だった？」

「あ、いえ、そう言う訳では・・・その・・・」

「少し、うなされてるみたいだったから。でも、よかったわ。貴方が無事で」

「すみません、ありがとうございます／／／」

「学校には家の用事で

お休みってことにしてあるから、ゆっくり休むといいわ」

「はい」

「お腹すいてるでしょう？」

何か軽い食事と飲み物を持ってくるわ。何が良い？」

「あ、いえ、そんな・・・」

「いいから」

「えっと、じゃあ、おまかせします・・・」

「わかったわ」

リンディさんが居なくなってから自分の手をみる。

「よかったわ。貴方が無事で」

（リンディさんの手、温かかったなあ・・・）

リンディさんの笑顔を思い出しながら僕は小さくほほ笑んだ。

数日後

現在、僕とフェイ姉は体が回復したことで一緒に登校している。当面はこっちでおとなしく生活しなさいとのことで出勤待ちのような状態になっているのだが、ここで衝撃の事実が。

僕もフェイ姉同様、魔法が使えなくなっていた。

どうやら、リンカーコアに酷いダメージを受けると僕もスキルに係なく

魔法の類が使えなくなってしまうらしい。なので、リンカーコアが回復するまでは、どの道、おとなしくしているしかないのだ。

途中で合流したなのは姉と一緒に学校に向かうと、さすが姉からはやてが

入院したことを告げられた。そこで、はやてをみんなに紹介すること兼ねて

放課後、みんなでお見舞いに行こうという話になった。

発案者はアリサ姉である。

はやてか、図書館で会って以来だな……。

でも、はやてが入院したとなると、そろそろ、この事件も終わりが近いな。

そう思いつつ、姉達の話聞いていた。

場所：海鳴大学病院、はやての病室

12月13日

放課後になり、僕ははやての病室の前にいる。  
そして、ノックをすると、はやての声が聞こえた。

「はい、どうぞ」

その声に従って僕は中へと入っていった。

「「「こんにちは〜！」「」」

「こんにちは！いらっしやい！・・・ってカナタくん？！」

「やつ！久しぶり、はやて」

「「「へ？」「」」

「すずかちゃんから、最近可愛い弟が  
出来たっていう話は聞いてたけど、カナタくんのことやったん！  
？」

「そっだよ」

「「私（アタシ）たちの弟よ！（です！）（なの！）」」

「ふえ？（汗）」

状況についていけない、はやて。

まあ、当然だよ。ここで僕は丁度いいから以前の説明を遡りながら改めて現状をはやてに説明した。すると

「カナタくん、ウチもお姉ちゃんって呼んでくれへん？／／／／」

「はい？」

「だって、みんながお姉ちゃんって呼ばれてるのにウチだけ「はやて」じゃ寂しいやんかあ」（涙目で）

「っう・・・」

「カナタくん、はやてちゃんも呼んであげてくれないかな？」

すずか姉が言ってくる。他の姉たちをみる。

「いいじゃない、呼んであげれば。減るもんじゃなし」

「はやてちゃんも私たちの仲間入りなの」

「私も良いと思うよ」

まあ、みんなが良いなら僕としては問題ないかな。

ただ、なのは姉とフェイト姉が

賛成してくれたのとは裏腹に目が笑ってないんだよね。

二人ともさっきから念話で

「私がカナタ（くん）のお姉ちゃんなのに・・・」

と延々と言って来るしさ・・・。

あとでO H A N A S H Iなんてされないよね？（汗

「えっと、じゃあ、はやて姉でいいかな？みんな、この呼び方だからさ」

「うん」「（にやり）」

この瞬間、はやて姉から狸の耳と尻尾が見えたのは僕の錯覚だと思っていた。

その後は、みんなで、クリスマスへ向けての話などで盛り上がった。別れ際には、また見舞いに来ることをはやて姉に約束して僕は病室を去った。

カナタ side out

はやて side

今日はすずかちゃんが友達を連れてお見舞いに来てくれることになっていた。

すずかちゃんのお友達、どんな子やろうなあ。

そう言えば最近出来た弟分の子も連れてくるって言ってたな。

そんなことを考えていると、ノックの音が聞こえた。

どうやら、すずかちゃん達が来てくれたみたいやな。

「はい、どうぞ」

すると元気な挨拶と共にすずかちゃん達が入って来る。

「「「こんにちは〜!」」」

「こんにちは!いらっしやい!・・・ってカナタくん?！」

「やつ!久しぶり、はやて」

「「「へ?」」」

私は驚いた。以前、図書館で友達になったカナタくんが  
すずかちゃん達と見舞いに来てくれたことに。

他のみんなは私とカナタくんが  
知り合いやったことに驚いてたみたいやったけどな。

そして私はすずかちゃんが言っていたことを思い出した。

「すずかちゃんから、最近可愛い弟が

出来たっていう話は聞いてたけど、カナタくんのことやったん!  
?」

すると、カナタくんはそれを肯定した。それと同時に

「「「私たちの弟よ!（です!）（なの!）」」」

「ふえ?（汗）」



と、みんなが「私たち」の部分強調して言ってきた。  
すずかちゃんから聞いた時は、「すずかちゃんの弟」って  
聞いてたんやけどなあ・・・（汗）

みんなの気迫に戸惑っているとカナタくんが  
以前の説明を遡りながら経緯を説明してくれた。

そういう訳やったんか・・・。  
でも、それなら私も呼んで貰いたいなあ／／  
そこで私は言ってみた。

「カナタくん、ウチもお姉ちゃんって呼んでくれへん？／／／／」

カナタくんは状況が呑み込めないようやった。  
せやから私はそれらしい理由をうる目で言ってみた。

「だって、みんながお姉ちゃんって  
呼ばれてるのにウチだけ「はやて」じゃ寂しいやんかあ」

すると、カナタくんが若干たじろいでいた。

（あと、もうひと押しやな・・・）

そう思っているとすずかちゃんと目が合った。

（すずかちゃん、お願い！）

（いいよ、まかせて）

どうやら無事伝わったみたいで、すずかちゃんは笑顔で頷いてくれた。

そしてすずかちゃんの一言から、みんな同意してくれたので私も晴れて『カナタくんのお姉ちゃん』として仲間入りを果たせた。

その後はクリスマスの話題で盛り上がって、帰り際に「また、見舞いにくる」と約束をしてみんなは帰って行った。

独りになった病室で呟く。

「『はやて姉』か……。ふふっ、なんか、くすぐったいわ／＼／」

また一人、大事な家族が増えたようで私は嬉しかった。

すると、暫くしてシャルが入って来た。

「あら？はやてちゃん、嬉しそうですね。何か良い事でもありましたか？」

「うん！実はな

」

私は笑顔でみんなとの話や  
自分にも新しい弟分が出来た事をシャマルに話していた。

はやて side out

side

ここは管理局内のある一室。

一人の男性がディスプレイを眺めている。

ディスプレイには『闇の書』もとい『夜天の魔道書』のデータが映  
されていた。

その男性に二人の女性から声がかかる。

「父さま、あんまり根を詰めると体に毒ですよ」

「そうだよ」

ギル・グレアムとその使い魔、リーゼロッテとリーゼアリアだ。

グレアム side

「リーゼか、どうだい、様子は」

「まあ、ぼちぼちですね」

「クロノ達も頑張ってますけど、『闇の書』が相手ですから一筋縄では」

「そうか・・・」

そういつて私は目を伏せる。

「すまん、お前たちまで付き合わせてしまって・・・」

「何言ってるの、父さま」

「私達は父さまの使い魔。父さまの願いは私達の願い」

「うん。大丈夫だよ、父さま。『デュランダル』ももう完成してる

し」

「『闇の書』の封印、きっと今度こそ大丈夫ですよ」

「ああ・・・」

私の謝罪に対し、笑顔で言ってくる愛しい娘たち。

私はこれまで自分の過去と決別する為に不幸の身であった一人の少女に対し、偽善ともいえる行為を施してきた。

そして、その少女を犠牲にこの事件を解決しようとしている。自分を父と慕う娘たちをも巻き込んで・・・。

私は今でも思う。

他に方法はなかったのか、と。

いや、それは愚問だな。

既に事態は動き始めてしまった。もう後戻りは出来まい。ならば、最後までやり遂げよう。

無力な私にはこれしか方法が無いのだから。

そう思いつつ、ふと、面接の時に会った銀髪の少年の顔が浮かんだ。

カナタくんといったか・・・。

彼からは、どこか私と似た雰囲気を感じた。

聞くところによると彼は不思議な力を持っているという。

そんな彼ならば、この事件をどのように解決したのだろうか・・・。

（っふ、まだ幼さの残る少年に何を期待しているのだろうか・・・）

意味の無い考えを振り払い、私は愛しい娘達の笑顔を眺めていた。

グレアム side out

## 第21話 『闇の書の哀しみ、二人の涙』

l i s i d e 場所：海鳴大学病院 12月22日

現在、カナタは、はやてのいる海鳴大学病院を訪れていた。  
一応、来る前にみんなを誘ったのだが都合が悪いとのこと。  
今回のお見舞いはカナタ一人である。

カナタ s i d e

「ごめんね、はやて姉、突然お邪魔しちゃって」

「気にせんでええよ。ウチも今日はまだ誰にも  
会ってへんかったから、ちょお寂しいなあって思ってたところやっ  
たし」

「そっか。よかった」

僕は笑顔でそう答えてベットの横にあった椅子へ腰を下した。

「で、わざわざ一人で来たってことはお姉ちゃんに構って欲しいん  
かな？」

「甘えん坊さんやなあ／＼／＼」

「・・・・・・・・・・。」（『また』始まったか・・・・）

「ほら、今日は誰もおらんし、お姉ちゃんに思いっきり甘えてもええんやよ？／＼／＼／」

そういつて、両手を広げてくるはやて姉。だが、僕はそれを軽やかに受け流した。

「あはー、遠慮しとくよ。『また』揉みしだかれるのはゴメンだからね」

「・・・っち！ガードが堅いなあ。ええやん、姉妹のスキンシップやで？」

「舌打ち！？・・・それに姉妹って何さ！？

というか、アレはスキンシップの限度を超えてるからね！？」

「恥ずかしがり屋さんやなあ。『あの時』はあんなに可愛い声、あげてたのに／＼／＼／」

あの時の状況を思い出しているのか、体をくねらせながら悶えるはやて姉。

以前も一人で見舞いに行ったことがあるんだけど、その時に隙をみて体を揉みしだかれてしまったのだ。



ホントに男の娘か、確かめたる〜〜！！

とか言っで。

なのは姉達があとから見舞いに訪れなかったら  
そのまま別の世界へ逝くところだったよ・・・。

「あれは、その／／／はやて姉が変な触り方をするから  
／／／／」

「ん？するから、なに？お姉ちゃんに恥ずかしがらずに言ってみ  
い」（にやにや）

「う・・・うだ〜〜！！／／／／／あんまりイジメないでよ！？  
はやて姉！！／／／／／」

「あはは ゴメン、ゴメン。  
拗ねんといてや、カナタくん。せつかくの可愛い顔が台無しやで  
？」

「むう〜〜・・・／／／」

頬を膨らませながら拗ねる僕の頭を、謝りながら撫でてくるはやて  
姉。

すると、先程とは一変して、はやて姉が

。

「・・・なあ、カナタくん？」

「・・・何？はやて姉」

「ちょっと、お姉ちゃんの独り言聞いてくれへんかな？」

と寂しげな表情で言ってきた。僕は二つ返事で聞くことにした。

「いいよ、聞かせて」

「おおきに、ありがとう」

そついつて優しい笑みを浮かべるとはやて姉は呟き始めた。

「あたしはずっと一人ぼっちゃったから

病気で死んでしまうこと自体はそんなに怖くないと思ってた」

「・・・。。」

「せやけど、今は違う。守りたい日々があつて、大切に、幸せに  
してあげなあかん子達がある。みんなの為にあたしは生きてよう、  
強いよう、そう思った。その子らは私の大事な家族やから」

そこまでいうと一旦、間を置くはやて姉。そして

「せやけど、せやけどな、カナタくん……。最近、分かったんよ。どんなに頑張っても、あたしの体がもう持たんことが……………」

「そんなこと」

。「自分の体やから分かる。もう、そんなに長くは生きられへん……………」

せつかく守りたいもんが見つかって、友達や弟も出来て、これからや

って時やのに……。あたしの物語はここでおしまいみたいや……………」

それだけ言い終えると、先程と同じ寂しげな表情をするはやて姉。僕はその顔が見ていられなくて、気づいたら叫んでいた。

「そんなことないっ!！」

「か、カナタくん？」

僕の突然の大声に驚くはやて姉。でも僕は止まらない。

「はやて姉は助かるよ!絶対につ!!!  
はやて姉は見つけたんでしょ!?!守りたいものを!!!

その為に、今まで努力してきたんでしょ!？」

「うん・・・」

「それなのに、こんな所で諦めないでよっ!!」

例え、無理だったとしても僕が助けて見せるから!!  
だから、だから・・・そんな哀しい事、言わないでよう・・・」

言い終える頃には僕は涙を流していた。

僕は泣き顔を見られたくないのも後ろを向いた。

「ひつく・・・えつぐ・・・ぐすつ・・・」

「せやなあ。確かにこんな所で諦めたらあかんわなあ」

そついうとはやてが背中から抱きしめてきた。

「ごめんな?カナタくん。」

ウチお姉ちゃんやのに弱音吐いてしもうて。

拳句、可愛い弟を泣かせるなんてお姉ちゃん失格やなあ」

「そんなことない・・・」

「ホンマに?」

「うん・・・」

「そつか・・・」

そついつて腕に力を込めるはやて姉。

「あはは・・・」

なんかウチも貰い泣きしたみたいやわ。涙が、止まらへんっ・・・

」

僕達はそのまま一緒に涙を流していた。  
そして泣き止んだ頃には

。

「はぁ、やつぱり、カナタくんの抱き心地は最高や～～」

「あうう／＼も、もう放してよう、はやて姉え・・・／＼／」

「却下や 姉弟の絆を深めるんや」(ぎゅ)

「へうううう！？／＼／」

なんとか逃れようとするが、がっちり固定されてて抜け出せない。  
だから再度放すように、はやて姉に言おうとしたが

「・・・・。」

「はやて姉？」

「・・・ごめん、あと、ちょっとでええから・・・このままでいさせて」

「・・・うん」

さっきは自分の感情が抑えられなくて、ああは言ったがもうすぐ、更に哀しい出来事がはやて姉に起こってしまう。

だから、はやて姉が落ち着くまでそのまま抱きしめられていた。そして。

「あはは・・・」

ホンマ、ごめんなカナタくん。情けない所、見せてしもうて」

「いいよ、気にしないで。情けないのはお互い様だったしさ」

「・・・ありがとう、カナタくん／＼／＼」

僕は暫く談笑したのち病院を後にした。

カナタ side out

クロノside

12月23日 場所：アースラ艦内

僕はいま、ある人物について調査している。  
ディスプレイを弄る音が室内に響く。

（これは・・・やっぱり、そうなのか？）

カナタ達の一件から薄々感づいていたが・・・

調べれば、調べるほど、僕の予想は肯定されていった。  
すると、エイミイがやってきたようなので僕は調査を中断する。

「アレ？どうしたのクロノくん」

「う、うん。ちょっと調べ物・・・」

「なんだ、言ってくればやるのに」

「いや、いいんだ。個人的なことだから」

僕はそう言いながら話題をユーノの『闇の書』に関する報告書へと切り替えた。エイミイによるとなのは達も『闇の書』の過去には複雑な心境らしい。僕はただ短く頷くことしかできなかった。

クロノ side out

side 2月24日 場所：海鳴大学病院、夜の屋上

カナタは現在、急ぎ、病院へと向かっていた。

「なのは姉とフェイ姉のばかりー!!」

二人の姉に文句を言いながら……。

そう、今日カナタ達は原作通り、はやての病室へ見舞に訪れていた。

そして、同じようにシグナム達と鉢合わせとなり、アリサ達と別れたのち

なのはとフェイトと共に改めて病院の屋上で会うはずだったのだが・  
・・。



帰り際にアリサが一言。

「ねえ、今日はイヴだし、今夜はみんなで過ごさない?」

「それいいかも!」

この一言で状況が変わってしまった。何も事情を知らないアリサの申し出。

それにすずかも同意する。断るのは簡単なのだが、言葉に詰まるのは達。

「今夜はちよつと・・・」

「にやはは・・・」

「あゝ! また何か隠し事してるでしょ! ?」

「ふえ! ? そ、そんなことないよ」

「どうかしらね・・・まあ、いいわ。

なら、代わりに帰りの付き添いとしてカナタを貰うわよ」

「にゃ! ?」 (ど、どうしよう! ? フェイトちゃん! )

「ええ! ?」 (で、でも、二人に下手なことは言えないし・・・)

暫くの逡巡があつたが、初代お姉ちゃんズの結論は決まった。

「へう!？」（「ちょ!？なのは姉!? フェイ姉!？」）

「うん、いいよ。ごめんね、二人とも」（「ゴメン、カナタくん」）

「三人とも気をつけてね」（「今度、お詫びするから許して」）

カナタは念話で二人の名を呼ぶが

魔法を知らないアリサとすずかに下手なことは言えないため  
なのはとフェイトは笑顔でカナタを引き渡した。

そして、冒頭の台詞へと繋がる。

カナタ side

アリサ姉たちを送るのに、かなり時間がかかってしまった。

病院へ着いてみると屋上から魔力光の柱が立ち上っていた。  
間に合わなかったか……。

柱の中心にはやて姉の姿があった。

「封印解放……。」

【解放】

はやて姉の言葉に反応し『闇の書』が起動する。  
そして、はやて姉の姿が管制プログラムである  
リインフォースへと変化していった。

「また、全てが終わってしまった……。  
一体、幾度こんな哀しみを繰り返せばいいのか……。」

涙を流しながら呟くリインフォース。  
リインフォースの近くにいたなのは姉とフェイ姉が呟く。

「はやてちゃん！」

「はやて……。」

「我は『闇の書』、我が力の全ては主の願いをそのままに……。」

二人の声には反応せず、涙を流したまま

『デアボリック・エミッション』を発動させるリインフォース。

僕にはその涙がはやて姉とリインフォース、

二人の心が合わさって泣いているように思えたから・・・。

僕が、いや…僕たちみんなでその哀しみを

終わらせてあげるから、もう泣かないで

そして全てが終わったら笑って。はやて姉と、家族みんなで

そう思いながら、僕はリインフォースへと視線を向けた。

カナタ side out

## 第22話 『託される力、感情の否定』

side 市街地：ビルの屋上

『闇の書』となのは達の姿が見えるビルの屋上に仮面の男たちの姿があつた。

「よし、結界は張れた……。『デュランダル』の準備は？」

「出来ている」

片方の問いに対し『デュランダル』を

見せることで、それを肯定する、もう一人の仮面の男。  
そして二人はなのは達の方を向き、静観していた。

カナタ side

「デアボリック・エミッション」

リインフォースの掛け声と共に次第に巨大な魔力球が形成され  
唱え終わると同時に巨大な魔力球が圧縮されていった。

「あつ・・・」

「空間攻撃っ」

技の性質を見極め、驚くのは姉達を余所に  
リインフォースが最後の発動ワードを述べる。

「闇に染まれ・・・」

そして、その言葉と共に技が発動した。

（これはちょっとなのは姉一人じゃキツイよね・・・）

僕は急いでなのは姉とフェイ姉の前に出てシールドを展開した。

「ふえ！？カナタくん！？」

「カナタ！？」

「話は後だよ！今はこれを防がないとっ！リオン！！」

【ラウンドシールド】

シールドを展開してるからダメージこそ通らないが視界が闇に染まる。

恐らく、アニメ同様、外から見ると巨大な球形が出来上がっているのだろう。

僕は衝撃が止むまでシールドを張り続けた。

カナタ side

l l l side

カナタ達が「エアボリック・エミッション」を耐える中、仮面の男達が呟く。

「持つかな、あの三人・・・」

「暴走開始までは持つてほしいものだな」

言い終わると同時に男達の周囲で光の粒子が発生した。

「な!？」

「!？」

驚く男達を余所に粒子はそのまま一つの魔法を形成していった。  
すると、一人の少年の声が聞こえた。

「ストラブルバインド」

「!？」

声のする方に顔を向けるとクロノの姿がそこにあった。

クロノ side

「相手を拘束しつつ、強化魔法を無効化する。  
余り使いどころの無い魔法だけど、こういう時には役に立つ



」

僕は言い終わると同時に、デバイスを構え直し、最後の効果を発動する。

「変身魔法を強制的に解除するからね・・・」

男達の変身魔法が解除されると予想通りの人物たちがそこにいた。出来れば、外れて欲しかったが・・・。

「クロノ・・・このおっ・・・」

「こんな魔法、教えてなかったんだがな・・・」

「一人でも精進しろと教えたのはキミたちだろ。アリア、ロツテ・・・っ」

クロノ side out

l l l side

視界が晴れた頃、リインフォースが心の中で呟く。

(・・・隠れたか)

そしてリインフォースから少し離れたビルの陰にカナタ達はいた。

カナタ side

「痛つ~~~~~!」

「カナタくん、ごめんなさい」

「ゴメン、カナタ。助かったよ、ありがとう。大丈夫?」

僕を心配してくれるのは姉達。

いやゝ、やっぱり強いな。リインフォースは・・・。

一応、ステータスを抑えててもオールSランクはあるのにこれ程とは。

原作ではなのは姉が防いでて痛そうだったけど、これは確かに痛い。

「う、うん。だ、大丈夫・・・」(涙目)

「!?!?」

この瞬間、なのは姉達のオーラが変わった・・・。

「カナタくんを泣かせるヤツは」

「何処のどいつだーーーーー!?!?」

いきなり、無防備に飛び出していこうとする二人の姉。

「わあゝ!?!?泣いてない!泣いてないから、無防備に突っ込まないでゝ!?!?」

急ぎ、なのは姉達を抱き止めた。すると。

「もうっ、甘えん坊なんだから、カナタくんは / / / /」

「そ、そんなにお姉ちゃんに甘えたいの? / / / /」

「「ほら、思う存分、甘えて良いよ? / / / /」」

そう言いながら両手を広げてくるなのは姉達。

どうやら、引き止めた際に頭のネジを落としてしまったようだ・・・。

そいえば、はやて姉も病院に見舞いに行った時、同じ事やってたな・・・。

僕は二人を正常に戻す為にある一言をいった。

「お断りするよ、『高町』さんに『テストロッサ』さん」

言った瞬間、なのは姉たちは凍りついた。そして次の瞬間、絶叫した。

「にゃあああああ！？謝るからソレだけはやめて〜！？」

「いやあああああああ！？」

若干泣きが入っているが、どうやら、正気(?)に戻ったようだ。以前、調子に乗って絡んできたことがあったから他人行儀に苗字で呼んだら、かなりの効果を発揮したのだ。

だから、二人が暴走した際にはコレが一番手っ取り早いのだ。

二人が落ち込んでいると、背後から見知った声がした。  
ユーノとアルフだ。

「なのは、カナタ！」

「フェイト！」

「やあ、二人とも。手伝いに来てくれたの？」

「うん。って、なのは達どうしたの？（汗）」

「うつつ、カナタくんがグレたよう・・・」

「か、カナタに嫌われた・・・カナタに」

「なのはもフェイトも何やら落ち込んでるようなんだけど（汗）」

「ああ、姉弟のちよつとした戯れだよ」

僕の有無を言わさない笑みに押し黙る二人。

すると、急に市街地全体が広範囲の結界に覆われた。  
それにみんなが気付く。

完全に閉じ込められたようだ。

ユーノ兄によると、クロノ兄がいま解決方法を探っているというから  
恐らくグレアム提督の所にいったのだろう。

（なら、その間は僕らでリインフォースの相手をしないとね）

カナタ side out

クロノ side 場所：管理局本局

僕は現在、本局のグレアム提督の所に来ている。  
提督の傍には先程捕えたアリア達もいる。

「リーゼ達の行動は貴方の指示ですね。グレアム提督・・・」

「違うっ、クロノ！！」

「アタシ達の独断だっ、父さまは関係ない！」

「ロッテ、アリア、良いんだよ。」

クロノはもう粗方のことは掴んでいる。違うかい？」

その問いに僕は調べて分かったことを提督に伝えた。  
そして、一つの質問をした。

「 見つけたんですね。『闇の書』の永久封印の方法を・・・」

すると、自身が考えていたことを全て打ち明けてきた。  
そして、提督が全てを話し終わると同時に僕は自分の考えを述べた。

「その時点では、まだ『闇の書』の主は  
永久凍結されるような犯罪者じゃない・・・違法だ」

僕の言葉に対しロッテ達が  
言い返してくるが、これはやっていいことじゃない。  
二人の主張を聞きいたのち、席をたつ。

入口付近まで歩いていきながら一言いった。

「法以外にも提督のプランには問題があります。  
まず、凍結の解除はそんなに難しくない筈です。  
何処に隠そうと、どんなに守ろうと、いつかは誰かが  
手にして使おうとする。怒りや悲しみ、欲望や切望  
・・・その願いが導いてしまう。封じられた力へと」

「……………」

「提督は先程、自身の行いを偽善と申しましたが、僕は同じ偽善を行いつつも、常に最上の結果を目指し続ける一人の少年を知っています。しかし、そんな彼でもこんなプランは行わなかったでしょう」

「……その少年というのはカナタくんのことかい？」

「はい、僕の自慢の弟分です。」

では、現場が気になるので一旦失礼します」

提督はそれを聞くと何かを考えているようだ。部屋を出ようとした際、提督から声がかかった。

「クロノ」

「はい、なんででしょうか？」

「アリア、『デュランダル』を彼に」

「父さま……」

「そんな……」

「私達にもうチャンスはないよ、持っていたって役に立たん。どう使うかはキミに任せる。氷結の杖『デュランダル』だ。」



キミが言う自慢の弟とともに彼女を救ってやってくれ・・・」

その言葉と共に待機状態の『デュランダル』が僕に託された。

クロノ side out

カナタ side

僕はいまフェイ姉と一緒にリインフォースを翻弄しつつ  
攻撃しているんだけど、やっぱり強いね・・・。  
一度、一対一で戦ってみたいなあ。

（アレ？なんか思考がシグナムに似てきたかも・・・）

そんなことを考えているとユーノ兄とアルフがバインドで  
リインフォース拘束した。

「はあっ」

「ふんっ」

リインフォースの手足が拘束される。だが

「！！・・・碎け・・・」

【ブレイカー】

簡単に破壊されてしまった。しかし、時間稼ぎには十分だった。

【プラスマスマッシャー】

「ファイヤー！！」

【ディバインバスター・エクステンション】

「シューーっ！！」

フェイ姉となのは姉の技がリインフォースを挟みこむように向かっていく。

対するリインフォースは

「盾・・・」

【パンツァーシルト】

咄くと同時に両腕を広げ、シールドで二人の攻撃を防いでいた。  
そしてそのまま

「刃以て、血に染めよ。」

【ブルーティガードルヒ】

「「「!？」」」

「 穿て、ブラッディダガー・・・」

僕達に目掛けて紅い光線が複数放たれる。  
攻撃が当たったことで爆風が立ち上った。

「くうっ・・・！」

「ううっ・・・！」

「ちいっ・・・！大丈夫！？フェイ姉！、なのは姉！」

「うん、なんとか直撃は免れたけど」

フェイ姉が言いきる前にリインフォースが次の攻撃に移った。

「咎人達に、滅びの光を」

そういうとリインフォースを中心に魔力が集束される。  
それをみてアルフとユーノ兄が呟く。

「まさか」

「アレは」

「星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ」

「スターライト・・・ブレイカー・・・？」

自身の技を相手に使われ驚愕するのは姉。  
でも、驚いてる暇はなさそうだ。

「ユーノ兄とアルフはコッチに来て！！」

「私はなのはをつ」

フエイ姉もアレの危険性から即座に判断する。  
僕はユーノ兄とアルフを抱え、その場から離れた。  
原作ではアルフがユーノ兄を連れて飛んでいたけど  
ここでは僕の方が速いからね。

「なのはの魔法を使うなんてっ」

「なのはは一度蒐集されてる。恐らくその時にコピーされたんだ」

「えと、フェイトちゃん。こんなに離れなくても」

「至近で喰らったら防御の上からでも落とされる。回避距離を取らなきゃ」

経験者は語るってやつだね、フェイト姉・・・。  
ある程度離れたのち、アルフ達を放して二手に分かれた。  
すると、リオンが

【マスター、左方向300ヤードに一般市民がいます】

一般市民？・・・あ、アリサ姉たちか！！  
こうならない為にもしっかり送り届けたのにつ・・・！  
僕達はリオンの言葉に従って一般市民、もといアリサ姉達を探し始めた。

カナタ side out

なのは side



なんとか着弾前に二人を見つけられたな。

何で送り届けた筈の二人がここにいるのかとか色々聞きたいことはあるけど、取り敢えずは見つかってよかった。

そう思っただけとしていると、砲撃音が聞こえた。桜色の閃光がこちらに迫って来る。

マズイ！早く、シールドを張らないと！！

フェイ姉がアリサ姉たちを結界で覆うと同時に僕が前に出てシールドを張る。

なのは姉達も一緒に張ってくれている。

すると、アルフ達から念話がはいったので、衝撃波に耐えながら現状を説明した。暫くしてエイミィさんから通信が入った。

<余波が収まり次第、急いで回収するから、なんとか堪えて！>

この言葉に頷く僕達。そして何とか耐えきって後ろの二人に声をかける。

「もう、大丈夫」

「すぐに安全な場所に運んでもらうから。もう少しジッとしててね」

「あの、なのはちゃん、フェイトちゃん、カナタくん」

「ねえ」

二人が言いきる前に転送が始まる。

「「あ・・・!?!」」

「ごめん、二人とも。後で説明するから今は避難してて」

そして転送が済んでからなのは姉が呟く。

「見られちゃったね」

「うん」

「でも、これは仕方がないよ」

その後、なのは姉達がユーノ兄達に念話で二人の警護をお願いしている

エイミィさんから、また通信が入った。通信の内容はクロノ兄からの伝言で

はやて姉とリインフォースに武装の解除と投降を呼びかけて欲しい



とのこと  
だった。

「はやて姉、『闇の いや、夜天の魔道書』、僕達の話聞いて  
！！」

「グイータちゃん達のことを傷つけたの、私たちじゃないんです！」

「シグナム達と私達は  
」

「我が主は、この世界が、自分の愛する者たちを奪った世界が、  
悪い夢であつて欲しいと願った。我はたたそれを叶えるのみ。  
主には穏やかなる夢の内永久の眠りを  
」

そう言いながら自分の胸に手を当て瞳を閉じるリインフォース。  
再び瞳を開くと同時にこう言い切った。

「そして、愛する騎士たちを奪った者には永久の闇を！」

すると、リインフォースが魔力陣を展開させる。

「『闇の書』さん！！」

「お前も『その名』で私を呼ぶのだな  
」

なのは姉の呼びかけに哀しそうに呟くリインフォース。  
それと同時に地面から触手が現れ、街を破壊しながら  
なのは姉達を捕縛する。

「あ！？ああっ・・・！」

「うぐああああっ」

「なのは姉！フェイ姉！」

「それでもいい。私は主の願いを叶えるだけだ」

リインフォースの言葉に『俺』はキレて言い返した。

「・・・願いを叶えるだけ、だと？ふざけるなっ！！」

はやて姉が本当に望んだのはそんなことではない筈だ！！  
心を閉ざして・・・何も考えずに、主の願いを叶える為の  
道具でいて、それでいいのか！？『夜天の魔道書』！！」

「！！・・・我は魔道書・・・。ただの道具だ・・・。」

「なら、何で涙を流している！？その涙はお前の涙だろうが！！  
それに俺が『夜天の魔道書』って呼んだ時、少し驚いた顔してい  
ただろ！！」

それはお前の感情じゃないのか！？」

「この涙は主の涙、私は道具だ・・・哀しみなど、感情などない」

「泣きながら言っても、説得力ねえよ！！この意地っ張りが！！」

俺はそう言っただけを構え、なのは姉とフェイ姉を開放したのち  
リインフォースへと向かっていった。

「そうかもしれんな、だが、例え感情があつたとしても今の私には  
不要なものだ。」

心優しき少年よ、ありがとう……。お前も主と共に私の内で眠  
るといい」

「なあっ！？しまっ  
」

「カナタくん！？」

「カナタ！！」

キミが自分を道具として認識してしまうのは

『夜天の魔道書』の過酷な歴史を考えれば仕方がないのかもしれない

心優しき少年よ、ありがとう……。

でも、キミは自分を道具と言いながらも、優しくほほ笑んだ  
じゃないか。

その感情はけして不要なものじゃない

はずだよ

取り込まれる寸前に見せたリインフォースのほほ笑みに  
心の中で言葉を投げかけながら、僕はそのまま夢の世界へと堕ちて  
いった。

## 第23話 『カナタのユメ、笑顔の別れ』

なのはside

（そ、そんな・・・カナタくんが消滅した！？）

私は目の前で起こった出来事を受け入れられなかった。  
それはフェイトちゃんも同じように呆然としていた。

私はすぐさまエイミイさんにカナタくんの安否を確認した。

「エイミイさん!!」

<状況確認!!カナタくんのバイタル・・・まだ健在!!

『闇の書』の内部空間に閉じ込められたみたい・・・。

助ける方法、現在検討中!!>

（よかった・・・カナタくんはまだ生きてるんだ・・・）

フェイトちゃんもそれを聞いて正気を取り戻したようだ。  
なら、私たちのすることは一つだけだね・・・。

「我が主もあの子も、覚めることない眠りの内に終わりなき夢を見

る。

生と死の狭間の夢を・・・それは永遠だ・・・。」

「永遠なんてないよ・・・。みんな変わってく・・・変わっていか  
なきや

いけないんだ！

私も、貴女もっ！！」

なのはs i d e o u t

カナタs i d e

「んっ・・・ここは？」

目が覚めると同時に辺りを見渡す。

「僕が前世で使っていた部屋・・・？」

突然の状況に困惑していると、誰かが僕の部屋へと入ってきた。

「え？カヅキ・・・姉・・・？」

「うえ！？カナちゃんが既に起きている！？  
はあ、残念。せつかくお姉ちゃんが優しく起こしてあげようと思っただのに」

目の前で落ち込んでいる義姉に僕は呆然としながらも質問してみた。

「・・・本当にカヅキ姉・・・なの？」

「ん？・・・そうだけど・・・ひょっとしてカナちゃん、まだ寝ぼけてる？」

「う、ううん、起きてるよ、ありがとう。カヅキ姉」

「はわーん カナちゃんに朝から笑顔でありがとつて言われた、これは一大事だよ！！お母さん達にも伝えなきゃ！！  
朝食出来てるからカナちゃんもちゃんと着替えて来るんだよ！」

そういつてカヅキ姉は部屋を出て行ってしまった。

・・・どうなっているんだ？

何で、死んだはずのカズキ姉が目の前にいる？

それに母さん達って・・・居る筈がない。

だって二人は事故で死んでしまったのだから。

僕は服を着替えてそのままカズキ姉の後を追った。

朝食を取りながら食卓を囲むみんなを僕は見る。

「ねえ、ねえ、お母さん！さっきね、カナちゃんを起こしに行ったらカナちゃんに笑顔で『ありがとう』って言われたの〜 もう、凄く可愛かったんだから！」

「ずるいわ、カズキ！カナちゃんを起こしに行くのは交代でするっていう約束だったじゃない！」

「へっへ〜ん、行動したモノ勝ちだよ〜」

「カナタはモテモテだなあ・・・でも母さんはやらんからな！」

「もう 貴方ったら子供たちの前で何言ってるの／＼／＼／」

みんなの笑い声が部屋の中に響く。

・・・違う。これは夢だ・・・。



みんなは既に亡くなっているんだ。両親は事故で、カヅキ姉は不治の病で。

その時の哀しみや絶望感は今でも覚えている。  
だから、これが夢なのは間違いない。

でも                   これは僕が何よりも望んだ日常の光景だった。

カナタ s i d e   o u t

なのは s i d e           場所・海鳴市、海上

「！！           つく！！」

『闇の書』さんの攻撃に対し私はシールドを張って防ぐが

パリンっ！！

「なっ!?!」

【シュヴァルツェ・ヴィルクング】

驚く私を余所に『闇の書』さんが魔力を纏わせた拳で攻撃してきた。咄嗟にレイジングハートで防御するが、やはり威力が強いつ。。。。

「ああああああああっ!」

そのまま、海中へ吹き飛ばされる  
と思ったが  
フェイトちゃんが受けとめてくれた。

「つぐつ!。。。大丈夫?なのは!」

「あ、ありがとう、フェイトちゃん」

「こっちこそ、ゴメン。まさか、あそこで抜かれるなんて。。。」

「平気だよ、フェイトちゃん。お互い、頑張ろう」

「うん」

その後、私はアースラへ連絡を取って『闇の書』さんによって引き起こされた

市街地の火災の対応をリンディさんをお願いした。

「マガジン、残り三本、カードリッジ残り、十八発……。  
スターライトブレイカー……撃てるチャンスあるかな？」

私はレイジングハートに聞いてみた。

【手段はあります】

「エクセリオンモード……だね」

【はい。ですが、これは                      】

「うん……」

エクセリオンモード。レイジングハートは耐えられるけど私自身にかかる負担が

大きいから、体が成長するまでは使わないで欲しいとカナタくんに言われていたもの。

でも    今これを使わないと、はやてちゃんやカナタくん、『闇の書』さんを救えない！！

（ゴメン、カナタくん。私、約束を破るね……。）

私は心の中で謝りながら、エクセリオンモードを起動させた。

なのは side out

カナタ side

「カナちゃん、今日はお母さん達、帰りが少し遅くなるんだって」

「そっか」

「でも、お姉ちゃんが一緒にいてあげるから寂しい想いはさせないよ」

そういつて僕を後ろから抱きしめるカヅキ姉。

「ねえ、カヅキ姉・・・」

「なに？カナちゃん・・・？」

「これは・・・夢、なんだよね・・・？」

この日、お母さん達は事故にあつて死んじゃつて・・・  
その後はカヅキ姉も病気で

「・・・うん、そう・・・だよ」

僕を抱きしめる腕に自然と力が入る。

「でもさ、カナタ。夢でも・・・いいと思わない？」

ここでなら母さん達も無事に私たちのところに帰つて来るし、  
私が病気で死ぬことも、幼いカナタを独りにしてしまふこともな  
い」

そう、僕は両親とカヅキ姉が死んだ事で独りになった。

そして、親戚の家をたらい回しにされた拳句、施設へと送られた。  
そこでの生活は決して楽しいものではなかった。だけど、今は  
。

「あの日、失われた平穏が      カナタが欲しかった幸せが永遠に  
続くんだよ？」

だから、ずっとここに居ようよ?。」

僕はカヅキ姉の誘いに対し、首を横に振った。

「カナちゃん・・・」

「・・・ゴメン、カヅキ姉・・・。僕も出来ることならそうしたい・・・。

でも、僕はいかなくちゃいけないんだ。待ってる人が。。

僕を待っていてくれる人達がいるからっ・・・だからっ

」

僕はここまで言うと目から涙が溢れていた。

「そっか、見つけたんだね。新しい居場所を・・・家族と呼べる人達を」

「うん・・・」

「なら、お姉ちゃんが引きとめる訳には、いかないね・・・」

カヅキ姉は涙を流しながらそういうと何かを差し出してきた。

銀の剣十字ネックレス・・・リオンだった。

「リオン・・・」

「ごめんね、本当はカナタが気づいているの、最初の時から解ってた。

でも、なかなか真実が伝えられなかった。またカナタに哀しい想

いを

させることになるから

」

僕は首にかかるカヅキ姉の腕に手を重ねながらお礼をいった。  
そして、正面に向き直って続きを言った。

「ありがとう、カヅキ姉……。

夢の中でも僕のことを心配して

想ってくれていて」

「当然だよ……だって私はカナちゃんのお姉ちゃんだもん」

「例え、ひと時の夢であっても、もう一度みんなに出会えてよかった……。」

「私もだよ、カナちゃん

新しい家族と幸せに暮らさないと、お姉ちゃん怒るからね！」

「うんっ！」

僕達が笑顔で別れを告げると同時に光の粒子となってカヅキ姉は消えていった。

最後に笑顔で別れられて良かった。

カヅキ姉が死ぬ時、泣き顔のまま別れてしまったから。

僕は誰もいなくなった空間でもう一度だけ涙を流すとリオンに語りかけた。

「リオン、待たせたね。帰ろう

みんなのところへ」

【はい、マスター】

リオンの頷きと共に僕は騎士甲冑と剣ツルギを装備した。

カナタ side out

はやて side

「あたし、こんなの望んでないっ。

・・・貴女も同じはずや!・・・違うか?」

あたしはいま自分の目の前にいる銀髪の女性に話しかけている。

「私の感情は騎士たちと深くリンクしています。

だから私も騎士たちと同じように貴女を愛おしく思います。

だからこそ、貴女を殺してしまう自分自身が許せない・・・」

「あ・・・」

「自分では、どうにもならない力の暴走・・・。

貴女を侵食することも、暴走して貴女を喰らい尽してしまうことも止められないっ・・・」



目の前の女性は本当に悔しそうにそういった。

「・・・覚醒の時に今までのこと少しわかったんよ。

望むように生きられへん哀しさ・・・あたしにも少しは解る・・・シグナム達と同じや・・・ずっと寂しい想い、哀しい想いしてきた」

「・・・・。」

「せやけど、忘れたらあかん・・・」

あたしはここまで言うつと

車イスから乗り出し、目の前の女性の頬に手を当てる。

「貴女のマスターは今ほあたしや！

マスターのいうことはちゃんと聞かなあかん。」

女性は少し驚いた顔をしていたが構わず続けた。

「名前をあげる。もう『闇の書』とか呪いの魔道書なんて言わせへん。

あたしが呼ばせへん。

夜天の主の名において汝に新

たな名を贈る。

強く支える者、幸運の追い風、祝福のエール『リインフォース』」

すると、あたしの魔力陣が光った。どうやらマスターとして無事に名を

贈れたみたいやな。よかった……。ならばここから脱出せなな。

「リインフォース。ここから出たいんやけど、出ることって出来る？」

「無理です……。自動防御プログラムが止まりません……。管理局の魔導師達が闘っていますが、それも」

「それ位なら、あたしの方でやってみるわ。

あたしは管理者や。あたしにはそれが出来るはずや」

リインフォースは涙ながらに否定するが、それでも、あたしは信じる。

自分の力を。何よりもリインフォースを。

「止まって……」

そして手ごたえを感じた。やっぱり出来た……。あたしはそのことを喜びながらも外で闘っているであろう人達へ声

をかける。

「えっと、外の方！・・・管理局の方！！

こちら、えっと、そこにいる子の保護者、八神はやてです！」

「「はやて（ちゃん）！？」「」

「え？なのはちゃん、フェイトちゃん！？ホンマに？」

「うん、なのはだよ！色々あつて『闇の書』さんと戦っているの！」

「カナタも『闇の書』に取り込まれちゃって・・・」

そんな・・・カナタくんが・・・！？

あたしはその事実には驚きながらも二人に告げた。

「ゴメン、なのはちゃん、フェイトちゃん。なんとか、その子止めてあげてくれる？」

魔道書本体からはコントロールを切り離れたんやけど、その子にはしつてると

管理者権限が使える。いま、そっちに出てるのは自動行動の防御プログラム

だけやからっ・・・」

あたしはそれだけ伝えたと脱出のチャンスを手静かに待った。

はやてside out

なのはside

はやてちゃんから、『闇の書』さんを止めてくれて  
言われたけど、どうやって止めたらいいか解らないよ……!?

混乱している私達にユーノくんから念話が入った。

（「なのは！フェイト！解りやすく伝えるよ！！  
今から言うことをなのは達が出来れば、はやてちゃんも力ナタも  
外に出られる！」）

（「「本当！？」」）

（「どんな方法でもいい！！目の前の子を魔力ダメージでぶっ飛ば  
して！！」

全力全開！！手加減なしでっ！！」）

（「「……………」」）

簡単すぎる方法に思わず二人で笑ってしまった。

「さっすが、ユーノくん！わっかりやすい！！」

【まったくです】

私はユーノくんを褒めつつ、レイジングハートを構えた。

フェイトちゃんもバルデッシュを構えて技の準備に入った。

『闇の書』さんが防御態勢に入ろうとしたけど、もう遅いのっ！！

「エクセリオンバスター！バレル展開！！中距離砲撃モード！！」

【オールライト、バレルショット】

バレルショットが当たったことで『闇の書』さんが無防備になった。

フェイトちゃんもそろそろ準備が終わる頃みたい。これならいける！！

「カナタ・・・いま助けるよ。バルデッシュ、ザンバーフォーム！」

【了解、ザンバーフォーム】

「エクセリオンバスター！フォースバースト！

ブレイクシ

ュート！！」

「疾風迅雷！」

「ブライトザンバー！！」

私達の攻撃が『闇の書』さんを呑み込んでいった。

これで、はやてちゃんとカナタくんが帰って来る筈

。

なのはside out

はやてside

「管理者権限の使用が可能になりました」

「・・・うん」

あたしは光の中を漂いながら頷く。

「ですが、防御プログラムの暴走が止まりません。  
管理から切り離された膨大な力が、じきに暴れ出します」

「うん、まあ、なんとかしよう・・・」

そういうと、あたしは『夜天の魔道書』を胸に抱きながら  
リインフォースへ呼びかけた。

「ほんなら、いこうか・・・リインフォース」

「はい、我が主・・・」

はやてside out

カナタside

おお・・・。

何やら脱出しようと思っていたら、いきなり空間から放りだされた  
よ。

突然の出来事に驚いていると、なのは姉たちを見つけた。  
傍に行ってみる。

「おい、なのは姉、フェイ姉～～～！」

「カナタくん!!」

「カナタ!!」

二人は僕を見つけるや否や、思いっきり抱きしめてきた。

「ちょ!?! 苦しいよ、なのは姉、フェイ姉!？」

「バカ! 心配したんだよ!!」

「もう、会えないかと思った・・・」

涙ながらに訴えてくる姉達をみて僕は二人に謝った。

「ゴメン、心配掛けたね」

「うっん、無事でよかった」

「でも、今度無茶したら許さないからね?」

うん・・・これは二人ともマジな目だね(汗  
今度からは少し自重しないとO H A N A S H I コー  
ス まっしぐらになりそうな予感がするよ・・・。

「予感じゃなくて必然なの」



な！？読まれただ！？そんなバカな

「お姉ちゃん達に隠し事は出来ないんだよ？」

こ、こえええええ！？お姉ちゃん、こええええ！！

勝手に思考を読みまくる姉達に戦慄を覚えていると  
地響きが発生し、同時にエイミィさんから通信が

。

<みんな、気をつけて！『闇の書』の反応、まだ消えてないよ！！>

その言葉を受けて、僕達はこれから始まるであろう、最終決戦へと  
気持ちを切り替えた。

カナタ side out

第24話 『闇の終焉、訪れる未来』 【A・S編 完結】（前書き）

これで、A・S編本編は終了です。

これからしばらくは、私情により休載します。

再開の目途は立っていませんが、いずれは再開するつもりですので今後ともよろしく願います！！

追記：番外編はちよくちよく投稿するかもしれません。

第24話 『闇の終焉、訪れる未来』 【A・S編 完結】

カナタside

『闇の書』の防衛プログラムを見つめていると、付近に白い球体が現れた。

恐らく、はやて姉たちだろう。球体は現れると同時に強い光を發した。

僕達はその眩しさに目を細める。すると、そこには守護騎士たちの姿があつた。

守護騎士たちの復活に驚くのは姉たち。

「ヴィータちゃん！」

「シグナム！！」

「我ら、夜天の主に集いし騎士」

「主ある限り、我らの魂は尽きることなし」

「この身に命ある限り、我らは御身の下に在り」

「我らが主、夜天の王、八神はやての名の下に！」

守護騎士たちがそう宣言すると杖を手にしたはやて姉が騎士たちの中央に現れた。

なのは姉の呼びかけに笑顔で答えながら、最後の言葉を口にする。

「夜天の光よ！我が手に集え！祝福の風、リインフォース！セーッ  
トアップ！」

こうして、八神はやてとその騎士たちは復活を果たした。

はやて姉たちが感動の再会を果たしている所に僕達も向かう。

「なのはちゃん達もゴメンな、ウチの子達が迷惑かけてしもつて・  
・」

「ううん」

「平気だよ」

「そつちも無事で何よりだよ、はやて姉」

はやて姉の謝罪に対し、笑顔で答える僕達。すると、背後からクロ  
ノ兄が降りてきた。

「すまないな……水を差してしまうんだが、時空管理局執務官クロ  
ノ・ハラオウンだ。

時間がないので簡潔に説明する。あそこの黒い淀み、闇の書の防  
衛プログラムが

あと数分で暴走を開始する。僕らはそれを何らかの方法で止めな  
いといけない。

停止のプランは現在二つある。一つ、極めて強力な氷結魔法で停

止させる。

二つ、軌道上に待機している艦船アースラの魔導砲『アルカンシエル』で

消滅させる。これ以外に他に良い手はないか、闇の書の主とその守護騎士たちに

聞きたい」

「えーっと、最初のは多分難しいと思います。

主の無い防衛プログラムは魔力の塊みたいなものですから」

「凍結させてもコアがある限り、再生機能が止まらん」

「アルカンシエルも絶対ダメ!!」

こんなところでアルカンシエルを撃つたらはやての家までぶっ飛んじゃうじゃんか!!」

ヴィータの発言からなのは姉たちもそれに反対した。

クロノ兄もあまり気乗りしない方法だといった。

「何かないか・・・カナタ、キミはどうだ？」

「あるよ?」

「「「え!? 本当(マジ)か!?!」」」

みんなの声が被さった。

「う、うん。まあ、みんなの協力が必須条件だけど・・・」

僕はその内容をみんなに説明した。するとクロノ兄が驚いたようにいった

「おい、ちょっとまって！？まさか、カナタ」

「そのまさかだよ　クロノ兄」

カナタ side out

side

カナタの作戦内容をアースラ内部で聞いたリンディとエイミィは呆れていた。

「なんともまあ、相変わらず物凄いというか」

「計算上、実現可能なのが、また怖いですね……。クロノくん、こっちのスタンバイ、オッケー。暴走臨界点まであと十分！」

エイミイの言葉を受けてクロノが全員に告げる。

「実に個人の能力頼りで、ギャンブル性の高いプランだが、まあ、やってみる価値はある」

その言葉にはやて、フェイト、なのはが続き、カナタが締める

「防衛プログラムのバリアは魔力と物理の複合四層式、まずはそれを破る」

「バリアを抜いたら本体に向けて私達の一斉砲撃でコアを露出……」

「そしたら、ユーノくん達の強制転移魔法でアースラの前に転送！」

「そして、アルカンシエルでコアを蒸発……。だね」

そして、計画の確認を済ませたクロノは映像でこちらを見ているであろう  
グレアムへと語りかける。

「提督、見えますか？」

「ああ、よく見えるよ」

「『闇の書』は呪われた魔導書でした・・・。

その呪いはいくつもの人生を喰らい、それに関わった多くの人の人生を

狂わせてきました。アレのお陰で僕も母さんも、他の多くの被害者遺族も

こんなはずじゃない人生を進まなきゃいけなくなった。それはきつと貴方や

リーゼ達も・・・」

クロノはデュランダルを見つめながら言葉を紡ぎ続ける。

「無くしてしまった過去は変えることが出来ない

」

この時、一瞬だがカナタの顔に陰りが見えたのは恐らく気のせいではないだろう。

「だから、現在を闘<sup>いま</sup>って、未来を変えます!!」

クロノの言葉を皮切りにカナタ達の最後の闘いが始まった。



カナタ side

「夜天の魔導書を呪われた闇の書と呼ばせたプログラム・・・闇の書の『闇』」

はやて姉がそういつと同時に見るもおぞましい姿の化物が姿を現した。  
各員が配置につき、攻撃を開始する。

「チェーンバインド！」 「ストラグルバインド！」 「縛れ、鋼の軛！！」

アルフ、ユーノ兄、ザフィーラの順に前面に出ていた触手を排除する。

「ちゃんと合わせろよ！高町なのは！」 「ヴィータちゃんもね！」

「鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーファイゼン！  
轟天爆碎！ギガントシュラーク！！」

ヴィータとグラーファイゼンの一撃によって第一層の物理防御が破

壊された。

「高町なのはとレイジングハート・エクセリオン、行きます！」

エクセリオン・・・バスター！！ブレイクシュート！！」

なのは姉のエクセリオンバスターから続く連続技によって第二層も破壊された。

『闇』の叫び声が周囲に響く。

「次！シグナムとテストロッサちゃん！」

「剣の騎士、シグナムが魂 炎が魔剣、レヴァンディン！」

刃と連結刃に続く、もう一つの姿 翔けよ、隼！【シュルムファルケン】」

シグナムの剣が弓状に変形し、矢を放ったことで第三層が破壊された。

「フェイト・テストロッサ！バルデッシュ・ザンバー！行きます！！  
撃ちぬけ！雷神！！【ジェットザンバー】」

フェイ姉の一撃で最後の層が破壊された。  
すると『闇』が、砲撃を撃とうと発射態勢にはいった。

「盾の守護獣、ザフィーラ！砲撃なんぞ、撃たせん！！」

そういつてザフィーラが砲撃を阻止し、はやて姉と僕にシャマルから声がかかる。

「はやてちゃん！カナタくん！」

「彼方より来たれ、ヤドリギの枝。銀月の槍となりて撃ち貫け！石化の槍、ミストルティン！」

「天空より来たれ、古の稲妻。太陽神の槍となりて撃ち貫け！灼熱の雷槍、ブリューナク！」

はやて姉と僕の攻撃を受けたことで『闇』は石化し、燃え盛りながら崩壊と再生を繰り返していた。その結果、更に醜惡な姿へと変貌を遂げた。その事態にみんなは驚くが、クロノ兄が言う。

「だが、攻撃は通っている。プランに変更は無しだ！行くぞ、デュランダル！」

【イエス・サー、ボス】

「悠久なる凍土、凍てつく棺の内にて永遠の眠りを与えよ。  
凍てつけ！                   【エターナルコフィン】」

クロノ兄が氷結魔法を使ったことで『闇』の行動を足止めすることが出来た。

この隙になのは姉が呼びかける。

「フェイトちゃん！はやてちゃん！カナタくん！」

「「「うん！」「」」

「全力全開！スターライト」

「雷光一閃！プラズマザンバー」

「ごめんな、お休みな・・・っ・・・響け、終焉の笛、ラグナロク！」

「

みんなが最終段階にはいった。僕も技を放つ為、剣を上段に構える。先程のクロノ兄の言葉が脳裏に浮かぶ。

無くしてしまった過去は変えることが出来ない

そうだね、その通りだ・・・。  
だからこそ、僕は現在<sup>いま</sup>を生きよう。

この世界を生きるみんなと共に。

「闇の書の『闇』よ、安らかに眠れ……。  
響け、安息の旋律、レクイエム！」

「『『ブレイカー』！』『『』」

四色の魔力砲が闇の書の『闇』に向かって放たれる。  
高出力の魔力を受けたことで『闇』のコアが剥き出しになった。

「本体コア露出……。捕まえ たっ！」

「長距離転送！」

「目標！軌道上」

「『『転送！』『』」

シャマルがコアを捕獲し、ユーノ兄とアルフ、シャマルの三人でそれを転送した。転送されたコアはそのまま原作通り、アルカンシエルを

くらって消滅した。エイミィさんからのねぎらいの言葉を受けてほっと一息つく。

みんなが、思い思いに発言をしているさなか、はやて姉が倒れた。ヴィータの叫び声が周囲に響く。はやて姉はそのままアースラへと

運ばれた。

カナタ side out

side 場所：アースラ、医務室

はやてを医務室に運んだ後、  
ヴォルケンリッター達ははやてを囲むようにしながら話し合いをしていた。

その内容はプログラムの破損が致命的な部分にまで至っており、放  
つておけば  
いずれまた、暴走してしまうというものだった。

しかし、リインフォースによれば幸いにもはやてに対する侵食は止  
まっている為、  
不自由であつた足も時間をおけば、動けるようになるだろうという。

「そう。じゃあ、それなら、まあ、良しとしましょうか・・・」

「ああ、心残りはないな・・・」

「防御プログラムが無いまま、夜天の魔道書の完全破壊は簡単だ。破壊しちやえば暴走することも二度とない。……代わりにアタシらも消滅するけど」

「すまないな、ヴィータ……」

「なんで謝るんだよ、良いよ別に……」

「こうなる可能性があったことくらい、みんな知ってたじゃんか……」

落ち込むヴィータに対して、リインフォースがそれを否定する。

「いいや、違う。お前たちは残る。逝くのは私だけだ……」

「それも違う。キミも逝く必要はないよ、リインフォース」

リインフォースの言葉に対し、背後から否定の言葉がかけられた。全員が声の方へと振り向く。そこにはほほ笑みながら佇むカナタの姿があった。

リインフォースside 場所：雪山の開けた場所

現在、私はヴォルケンリッターと共に開けた場所に來ている。  
あの銀髪の少年にここで待つように言われたからだ。  
傍にいた將に聞いてみる。

「・・・將よ、あの少年の言っていたことは本当なのだろうか。  
私は本当に消えなくてもいいのか・・・？」

「私にもわからん。だが、アマギは信用に足るヤツだ。大丈夫だろう」

驚いた・・・。あの將にそこまで言わせるとはな。  
暫くして少年と少女達、そして敬愛する我が主が車イスに乗ってや  
つてきた。

「主はやて？少年、これは一体・・・」

「ごめんね、大事なことから、みんなにも来てもらっただ」

「ホンマにリインフォースを直せるん？カナタくん」

「うん。任せて、はやて姉。」

みんな少し離れててね。じゃあ、やるよ、リオン」

【了解です、マスター】



少年がそう言っていると私は藍色の魔力光に包まれていった。

リインフォース side out

6年後

カナタ side

「じゃあ、行ってくるね。ルナ」

「お気をつけて、我が主」

「うん。　　ごめんね、『リインフォース』」

「はあ、主カナタ。これで『何回目』の謝罪だと思いですか？」

「うう・・・だって　　」

「『だって』ではありませんよ。それに今は『ルナ』です」

「あ、ごめ・・・」「主?」な、なんでもないです!?行ってきます  
!」

うん、ここまでくれば解るよね。やっちゃいました・・・僕。

どこでミスをしたのか解らないけど、  
破損したプログラムを修復した途端      「新たな主を認識しまし  
た」

だもん。あの後、はやて姉に謝りまくったよ。

はやて姉は「リインフォースが幸せになれるんやったら      」と  
許してくれたけど、それじゃ、僕の気が済まないから修復の際に  
落ちてきたリインフォースの欠片を元に僕が新しいデバイスを作り、  
プレゼントした。

まさか、僕がリインフォース・ツヴァイの生みの親になるとはね・  
。

考え事をしながら走っていると、桜並木に立っているなのは姉を見  
つけた。

「おゝい、なのは姉~~~~!」

「あ、おはよう、カナタくん      今日も可愛いね      」

「うつ／＼／・・・それ、言っとしたら普通逆じゃない?／／／」

「にやははは ゴメン、ゴメン」(なでなで)

「むうゝ・・・／＼／＼／」

そう言いながら僕の頭を撫でるのは姉。

悔しい話だが、現在のなのは姉は僕より頭一つ分以上大きいのだ。つまり、僕がなのは姉を見上げる形になっている。

僕が悔しがっているとアリサ姉たちがやってきた。

「なのはゝ！カナタゝ！」

「あ、おはよう、アリサちゃん、すずかちゃん」

「おはよう、アリサ姉、すずか姉」

「「おはよう」」

「今日も二人はお仕事？」

「うん、今日は久しぶりにみんな集まるんだ。

お昼過ぎに早退しちゃうから午後のノートお願い！」

「あ、僕もよろしく」

「アンタは必要ないでしょうが！万年トップのくせにゝゝゝ！！」

そう言いながら僕の頬を両側から引っ張るアリサ姉。

「ひゃうー！？いひゃいよ、ありひゃね~~~~！？」

「おお、相変わらず柔らかいわね・・・うりうり」

「む~~~~！？」

僕がもがいているとフェイ姉とはやて姉がやったきた。

「あはは、二人は相変わらずだね。おはよう、みんな」

「せやなあ、この光景ももうすっかり見慣れてもうたわ」

二人が来たことで解放される僕。

「うう・・・酷いよ、アリサ姉え」

「大丈夫？カナタ」

「・・・うん。ありがとう、フェイ姉」（涙目）

「う、うん／＼／＼」（今日もカナタは可愛いいな／＼）

僕を引っ張っていた張本人は気にすることなく

フェイ姉とはやて姉に話しかける。

「二人も今日集まるんだって？」

「うん」

「ホンマに楽しみやわ〜」

そう言いながらみんなで学校に向かった。

そして、昼過ぎになり、屋上でなのは姉達とデバイスを起動させる。

「レイジングハート！」

【イエス・マイマスター】

「バルデッシュ！」

【イエス・サー】

「リインフォース！」

「はい マスターはやて。あ・・・兄さまもお久しぶりです〜」

「久しぶり、リイン。調子はどう？」

「はい、ばっちりです〜」

「それは何よりだね　・・・リオン！」

【はい、マスター】

「セッ・アップ！」

少し、予定とは結果が変わってしまったけど、はやて姉もリインフォース・・・

いや、今はルナか。二人とも笑顔で現在<sup>いま</sup>を暮らしている。  
そして僕も　。

僕たちはそのまま、みんなが居るであろう場所まで飛んでいった。

カナタ side out

番外編 『カナタin翠屋』姉達の気持ち（アリサ&すずか）（前書き）

ちよくちよく番外編を投稿すると言っていたのに  
この体たらく・・・申し訳ないです・・・。

約一ヶ月ぶりの更新です！！

またも駄文になりますが、よろしく願います！！

番外編 『カナタin翠屋』姉達の気持ち（アリサ&すずか）

『闇の書』事件から6年、カナタも14歳となり、魔導師として、また騎士として著しい成長を遂げていた。唯一、身体的なものを除いて

「くしゅっ……うう……なんか失礼なことを言われた気がする」

「うん？カナちゃん、風邪引いちゃった？」

「いえ、大丈夫ですよ。桃子さん」

「そう？じゃあ次はこれを持っていつてね」

「はい」

カナタside

こんにちは！カナタです！

今日は管理局の仕事が非番と言うことで翠屋でお手伝いをしています。

このお手伝いも長いもので、6年ほど続いています。

たまに、なのは姉達と一緒に手伝うこともあるけど、3人とも今日は仕事の為、此处にはいません。



また、さっきの会話でも分かるように桃子さん達とは、この六年で更に打ち解け、  
今では『カナタくん』ではなく、『カナちゃん』の愛称で呼ばれるようになりました。

でも、僕は知ってるんだ。

そう呼ばれるようになった本当の理由はそれだけじゃないって。

うん。それはね、今の僕の格好と体格に原因がある。

「ねえ、ねえ・・・あの子、なんか可愛くない？／＼／＼」

「やだっ、アンタ知らないの？」

あの子は『カナちゃん』っていつて翠屋では有名なお手伝いさんよ」

「へえ、カナちゃんっていうんだ」

「毎回、手伝う度に衣装が変わってるんだけど、今日はゴスロリみたいね

やっぱり女装が似合う男の娘って良いわよね／＼／＼」

「え！？女装なの！？全然そうは見えない。可愛い／＼／＼」

そう、今日の僕はゴスロリ

イメージ的には『ローゼンメイデンの銀様』の服装になっている。  
髪の色は元から銀色だったし、なのは姉達の強い要望で髪を切るこ

とが出来なかったから  
長さもそれなりに長くなっており、眼の色と翼がない事を除けば殆ど銀様だ。

その為、同じ銀色の長髪であるルナと一緒に行動していると姉妹と勘違いされることも、しばしばある。

言うまでもないと思うけど、この場合、僕が妹にみられている。

理由？・・・言わなきゃ駄目？・・・その／＼／＼身長が・・・  
ごによごによ／＼／／

カラン カラン

僕が内心で言い淀んでる内にお客さんが来たみたいだ。  
気持ちを切り替え笑顔で相手を出迎える。

「いらっしゃいませ」

って、なんだアリサ姉か・・・笑顔で出迎えて損した気分・・・」

「なんですってえ！？ちびカナタのくせに！！！」

「なっ！？身長は関係ないでしょ！？／＼／＼／」

「ふんっ、事実を言ったまでよ、『カナちゃん』」

「ううゝゝ！！／／／／」

僕は頬を膨らませ、アリサ姉を見上げながら悔しがるが、確かに小さいのは事実である。

転入当初はみんなとそんなに差はなかったんだ。

精々、なのは姉より若干小さいくらいだった。だけど、それから六年……。

みんなとの目線が合わなくなり、みんなはどんどん大きくなっていった。

僕を置き去りにして……。

お陰でなのは姉やアリサ姉が160センチに届きそうになっているのに対し、

僕は140センチ程度という結果になってしまった。以前、身長で馬鹿にしていた

クロノ兄でさえ、今ではエイミイさんと同じか、それより大きくなったというのに!!

唯一、はやて姉が僕に近かったけど、最近では、はやて姉にも抜かされてしまった。

つく……これが男の娘の呪いなのか……もしくはクロノ兄の呪い……orz

その為、学校でもそうだが翠屋でも、ちょっとしたマスコットないしプチアイドルのような感じで『カナちゃん』の愛称と共にみんなに愛されて(?)いる。

でも、僕は諦めないぞ!あのクロノ兄だって大きくなったんだ。

僕だって成人を迎える頃には立派に成長してるはず!!

だって、まだ中学生だし!!

そうやって希望的観測をしながら握りこぶしを作り、ガッツポーズで自分を励ましていると、またお客さんがやってきた。

「こんにちは」

「あ、すずか姉。いらっしやうい 席はアリサ姉と同じで良い？」

「うん、ありがとう 今日ゴスロリなんだね、凄く可愛いよ／＼」

「あう／＼／＼．．．ありがとう／＼／」

本来、僕はこういうことを言われるのは好きじゃないんだけど最近になっては余り嫌じゃなくなってきた。

アレ？もしかして桃子さん達に染められた？（汗

そんなことを考えているとアリサ姉がまた突っかかってきた。

「ちょっと待てえい！！」

「．．．何さ、アリサ姉？」

「なんで、アタシとすずかとで対応がこつも違うのよ！？」

「だって、すずか姉はアリサ姉みたくイジワルしないもん」

そう、アリサ姉は僕がここでコスプレ（女装）しながら手伝いをしているのを

知ってから、度々、僕にちょっかいを出してくるのだ。

だから、最近ではアリサ姉と店で会ったら、さっきみたいになるのが常だ。

それに引き換え、すずか姉はいつも優しくしてくれる。

母性を感じるってこういう人のことをいうんだろっな。

実際、恭也さんもすずか姉のお姉さんと付き合ってるみたいだし。やっぱり、優しい人はいいなあ……。癒されます。

「なっ！？アタシがいつイジワルしたっていうのよ！？」

「さっき」

「あ、あんなのイジワルした内に入らないでしょうが！！」

「ぷいっ」

女装のことで弄られるのは6年も続いてるから流石に慣れたけど思春期の身としては身長のこととはなるべく触れられたくないのだ。だから、僕はアリサ姉が抗議しても、今回だけは相手にしないで顔を逸らした。

「うつ・・・」（マズイ、今日はマジで地雷踏んだかも・・・）

「ふふっ、アリサちゃん、またカナタくんを弄って遊んでたんでし

「よう？」

「だ、だって、こつても可愛いと弄りたくなるじゃない？／＼／／」  
ボソッ

「まあ、気持ちはわかるけど、程々にしないとカナタくんに嫌われちゃうよ？」ボソッ

「それはイヤ！！・・・すずかぁ、助けて」

「しょうがないなぁ・・・カナタくん、ちょっと耳貸して？」

「へう？」

カナタ side out

アリサ side

すずかの言葉に従ってカナタは耳を近づける。  
そして、すずかがカナタに何やらこによこによと囁き始めた。  
すると

「ポンッ／＼／＼／＼／」

カナタの顔が一気に真っ赤に染まった。

「ちょ！？すずか、アンタ、カナタに何て言ったの！？」

「へううう／＼／／／」

「えゝ？私はただアリサちゃんのカナタくんの事が大好き過ぎて  
つい、ちょっかい出しちゃうだけだから、許してあげてね って  
言っただけだよ」

「なあっ！？／／／／／」

「まずかった？でも、ホントのことでしょう？」

凄く良い笑顔で聞いてくる、すずか。

忘れてた・・・すずかもどちらかといえば『弄る側の人間』だった  
わね（汗

「確かに助けてくれとは頼んだけど、

そんなことまで言うてくれなんて頼んでないわよ！？／／／／／  
／  
／

お陰でアタシもカナタも互いに顔を真っ赤に染め、二人の間で気ま  
ずい空気が流れた。

カナタもそれを感じたらしく、そのまま耳まで真っ赤にして店の奥  
へと入って行ってしまった。

「ちょっとお！？どうするのよ、すずか！？逆効果じゃないの！  
！／／／／」

「そんなことないと思うけどな、ほら、戻ってきたし・・・」

「あ・・・」

すずかがそう言つと確かにカナタが両手に皿を持ってこっちに戻ってきた。

「これ、僕が作った新作のレアチーズケーキ。良かったら食べてみて。

それと・・・その／／さっきは態度悪くしてごめんね？／／／  
アリサ姉」

そういつてケーキがのった皿をアタシ達の前に置くカナタ。

「っ／／／／／／／／／／」

もつつ、なんでコイツはこういう時だけ、こんなに素直になるのよ  
！！  
そんな顔で謝られたら、アタシも謝らないといけなくなるじゃない  
／／／／



「あ、アタシも何て言うか・・・悪かったわ！／／／・・・ゴメン（ボソッ）」

最後の方が小さくなってしまったが、ちゃんと聞えただろうか・・・。  
若干不安になっていると、すずかには聞えていたらしく

「ふふっ・・・素直じゃないんだから。アリサちゃんは」

「う、ううつるさいわね！アタシとコイツはこんな感じで良いのよ  
！！／／／」

私の言葉にニコニコ、いや、むしろニヤニヤ？した後、すずかはカナタに話しかける。

「カナタくん、私の分まで用意してくれてありがとね。帰り際にまた感想伝えるね」

「うん、お願い  
僕はまだ手伝いが残ってるからもう行くけど、二人ともゆっくり  
していつてね」

カナタは笑顔でそう言うと今度こそ店の奥へと戻って行った。

「仲直り出来てよかったね、アリサちゃん」

「まあね・・・あむっ・・・」(美味しい／＼／＼)

アタシはすずかの言葉に頷きながら、カナタが出してくれたケーキを口にする。

程良い甘さに適度な酸味が加わっていて、とても美味しかった。

アリサ s i d e o u t

すずか s i d e

カナタくんが店の奥へと入って行き、アリサちゃんと二人きりになった私は

以前から気になっていたことをアリサちゃんに聞いてみた。

「ねえ、アリサちゃん

・・・アリサちゃんは本当の所、カナタくんのことどう思ってるの

？」

「つぶ!？」

私の突然の問いに食後に飲んでいた紅茶を吹き出しそうになるアリサちゃん。

「ごっほ、ごほっ・・・なによ、いきなり！？／／／」

「私ね、アリサちゃんがカナタくんのことが大好きなのは見て分かるんだけど、

それって異性として好きなのか、弟として好きなのか、どっちなのかなあって

思ってた・・・」

すると、アリサちゃんは顔を真っ赤にしながらも真剣な眼差しでこちらを見つめる。

恐らく、「冗談で聞いているのか、本気で聞いているのか見極めているという所だろう。」

私も真剣な眼差しでアリサちゃんを見つめる。すると

「・・・弟よ。カナタは私の可愛い弟。少なくとも私はそう思っている。」

まあ、アレでいて結構男らしい所もあるから、以前は恋愛感情のようなものも

抱いていたけどね」

過去形ではあるが

やっぱりアリサちゃんもカナタくんを異性として意識していたよう  
だ。

「そういわずかはどうなのよ？」

「アンタもたまにカナタを異性として意識してるように見えるけど  
？」

「私は」

私もアリサちゃんの問いに真剣に応える為に慎重に偽りなく言葉を  
紡ぐ。

「私も弟かな・・・確かにカナタくんが時折見せる男の子の一面は  
カッコイイと思うし、惹かれなかったっていえば嘘になるけど、  
やっぱり私にとっても可愛い弟だよ」

「なんだ、すずかもアタシと同じなんじゃない」

そういつて微笑むアリサちゃん。私も同じく笑顔で返す。

「そうみただね・・・でも、なのはちゃん達はどんなのかな？  
私の見立てでは、なのはちゃん達はカナタくん恋愛感情を  
抱いていそうだけど・・・」

「あゝ、あの3人ね。確かにそういう風に見えなくもないわねえ。

でも、なのは達自身もその気持ちに気づいていないんじゃないかしら?」

「やっぱり、アリサちゃんもそう思う?」

「当然よ、カナタも鈍チンだけど、なのは達も同じぐらいそういう面では鈍いからね」

「もし、これから数年先、なのはちゃん達がその気持ちに気づいて、カナタくんに告白したらカナタくんは誰を選ぶのかなあ」

「さあね、でも、カナタが誰を選んでも私達とカナタの関係は変わらないわ。」

私は姉としてでもあの子を支えていくつもりよ。

それはなのは達も同じだと思う。すずかもそうでしょ?」

「クスっ・・・そうだね」

「だって私達は」

「「カナタ(くん)のお姉さんだから」」

又も意見が合わさり、お互い笑いあった。そう、これが私達の気持ち。

私達には魔力適正がないから、なのはちゃん達みたく前線では一緒にいてあげられない。

だけど、間接的になら支えてあげられる。だから、支えるよ。アリサちゃんと一緒に。

カナタくんだけじゃなく、なのはちゃん達、みんなを。

私はそう思いながらアリスちゃんと暫く談笑を続けた。

すずか side out

読者の方々へ質問です！

読者の皆様方、御無沙汰しております。夜神です。

最近、自分の作品を読み直していて主人公設定や本編の内容を（書き方なんかも）若干改訂したいなあなんて考えている夜神なんですが、みなさんはどう思いますか？

現在、この作品はA・sまで書き終えているので、この作品はこの作品として残し、改訂版として投稿し直した方がいいのか。

それともあらずに改訂したことを記載して一気に変えてしまってもいいのか。みなさんの意見を教えてください！

意見がある程度集まり次第、執筆を再開しようと思います。

また、この質問に際し、ユーザーのみで受け入れていた感想を全面解放しますので、無登録ユーザーの方々も是非教えてください！

#### 【注意】

作者、作品等への誹謗中傷、あるいはそう感じられるような文面が送られた場合は勝手ながらこちらで削除させて頂きますのでご了承

ください。



## 今後について

どうも、夜神です。

今回はサブタイトル通り、この作品の今後についてのご連絡です。

方針としては当作品である「魔法少女リリカルなのは」転生者はHAPPY END  
APPY ENDを至高とする」に直接改訂は行わず、新たに改訂版  
ないしリメイク版として書き直すことにしました。

それに伴い「魔法少女リリカルなのは」転生者はHAPPY END  
を至高とする」の方は、更新を待って下さっていた方々には大変申し  
訳ないのですが、現在の状態で完結という形をとらせて頂きます。

勝手な作者で申し訳ありません。 orz

こんな作者ではありますが、今後ともよろしく願います！

また前回の質問に対し、お答え下さった方々、ありがとうございました。  
これから頑張らせて頂きます！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0282p/>

---

魔法少女リリカルなのは ～転生者はHAPPY ENDを至高とする～

2011年6月16日11時48分発行